

3

7309~7314

12471
付回

板付周辺遺跡調査報告書

(I)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集

1974

福岡市教育委員会

正 説 表

頁 行 行	國	正	頁 行 行	國	正
れいげん	下象	下像	17	5	類似をそれぞれ
掲題目次	第45号要旨篇内出土土器等測定 第57回被許土品・	" (穴跡) " (穴跡) " (埴山牆)	18	29	第19・10 第9・10
8	9 25 21~22	派生する 40m 沖積地 沖積世地土と考えられる土層地 を	19	28	毫微 スケールは 1/30
9	土灰 土鐵 土壤	土灰 土鐵 土壤	24	第32圖	上层左側に 46 をいれる
4	注1 注3 注6	調査報告書原12集 下系樹行 由代美代子ほか	34	第32圖	右圖に 24 をいれる
6	19 27	刃漬し加工 採用品	40	第37圖	第41圖
9	第6圖	諸問題説明石器 (?) 加える予定	45	第40圖	上部のスケールをとる
11	接1No. 54 " No. 91	黒曜石 黒曜石	49	第40圖	施した
12	18	窓坑	51	22	●
13	4 6 15 31	毫微 口張 毫微 毫微 毫微	60	5	● ● ● ● ● ● レヅムルは 14.50 m (PLXVII) の範囲
14	28	小児用 箱	61	第55圖	土壌層 2号 (第25圖) 2号は レヅムルは 14.50 m (PLXVII) の範囲
			65	6	は 21.0 cm・短径 15.4 cm は 210 cm・短径 154 cm
			69	10	は 21.0 cm・短径 15.4 cm は 210 cm・短径 154 cm
			71	30	直径 14.7 cm 直径 147 cm
			71	31	17.7 cm 直径 147 cm
			72	第65圖	177 cm 小刀のスケールのみ
			75	表3 " No. 25	第32圖の時割の頭を中崩す る 黒曜石 土鉢
			76	No. 30 " No. 30	グレーヴアー (?) ナイフ型石器 彫刻刀型石器 第7圖
			78	9 10	ナイフ型石器 彫刻刀型石器 第7圖
			79	第2トレン チ両端	標高 10.00 m をいれる 第7圖として S=1/60をいれる

板付周辺遺跡調査報告書

- I -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集

1974

福岡市教育委員会

7309~7314



序 文

近年、福岡平野における土地開発の急激な膨張は、市域に多く知られる埋蔵文化財の保護に関して幾多の問題をなげかけています。

当教育委員会では、やむをえずして保存できない文化財については、事前の発掘調査をもって記録保存につとめています。

今度、板付周辺において宅地造成がなされる地域について、事前に同地域に存在する遺跡の緊急調査を、福岡市教育委員会が主体となり、国庫補助事業により実施いたしました。

調査に際しては、地元及び諸方面のご協力を得て、弥生時代櫛棺墓地の検出など多くの成果をあげることができました。

これも、関係者の埋蔵文化財への深いご理解とご協力によるものであって、深甚の敬意を表するものであります。

本報告書が福岡市のため、市民の方々に広くご活用いただけることを願ってやみません。

昭和49年3月

福岡市教育委員会

教育長 正木利輔

一れいげん一

- ◇ 本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を得て、昭和48年度に実施した福岡市博多区板付周辺の民間宅地造成事業にともなう緊急調査報告である。
- ◇ 報告書作成にあたっては、九州大学医学部永井昌文教授、同横口達也助手には執筆の一部を分担して戴き、また市歴史資料館下条信行氏には調査・報告にわたって指導・助言を戴いた。
- ◇ 編集は後藤・沢・山口の助言のもとに横山がこれにあたった。尚製図は挿図目次に示した以外は全て沢がこれにあたった。
- ◇ 写真は、横山が遠構、後藤が遠物を担当した。貝輪は橋口による。
- ◇ 本報告の執筆は各項目の終りに記す通りである。

本文目次

第一章 序 説	1
第二章 諸岡遺跡	
I 遺跡の立地と環境	3
II 遺跡出土の遺物・遺構	
1. 諸岡遺跡の先土器時代遺物	6
2. 弓生時代の墓地・遺構	12
①櫛状出土状況	12
②出土漆棺	36
③上塗器	60
④然肥遺構	60
⑤清	62
⑥人骨および貝輪	63
3. 中世遺構	69
①竪穴遺構	69
②ピット群・溝	73
4. 表面採集の遺物	73
III まとめ	76
第三章 緊急調査各地点の調査	78

挿図目次

第1図 板付周辺遺跡分布図	
第2図 1973年度緊急調査地点図	
第3図 諸岡遺跡地形図	
第4図 諸岡遺跡出土石器(1) (山口謙治・測・製図)	
第5図 諸岡遺跡出土石器(2) (山口・測・製図)	
第6図 諸岡遺跡表採石器 (山口・測・製図)	
第7図 石器出土分布図	
第8図 杖状図	
第9図 遺構出土状況全測図 (折り込み)	
第10図 第5・6・7号出土状況図 (浜石哲也・沢皇臣・横山邦継・測)	
第11図 第11・12・13号出土状況図 (玉永光洋・野尻雄三・横尾義明・浜石・測)	
第12図 第14・16・20・23号出土状況図 (浜石・横山・測)	

- 第13図 第31・32号出土状況図（後藤直測）
- 第14図 第34・36号出土状況図（浜石測）
- 第15図 第37・40・42号出土状況図（横尾・横山測）
- 第16図 第51号出土状況図（山口測）
- 第17図 第44・47・52号出土状況図（横尾・山口・横山測）
- 第18図 第1・2・3号出土状況図（小田雅文・山口・横山測）
- 第19図 第8・9・10号出土状況図（宮下健司・野尻・山口測）
- 第20図 第4・15・17・18号出土状況図（横尾・小田・後藤測）
- 第21図 第19・土抜墓1号出土状況図（山口測）
- 第22図 第21・22号出土状況図（横尾・小田測）
- 第23図 第24・25号出土状況図（横尾・小田測）
- 第24図 第26・27号出土状況図（山口・横山測）
- 第25図 第28・29号出土状況図（浜石・横山・後藤測）
- 第26図 第33号出土状況図（後藤測）
- 第27図 第30・土抜墓3号出土状況図（金鍾徹・横山測）
- 第28図 第35号出土状況図（浜石・横山測）
- 第29図 第38・土抜墓2号出土状況図（浜石・横山測）
- 第30図 第41・43号出土状況図（金・横尾測）
- 第31図 第45号出土状況図（浜石・横山測）
- 第32図 第46・48・49号出土状況図（野尻・小田・横山測）
- 第33図 第53・54号出土状況図（山口・横山測）
- 第34図 第19・33号腰棺実測図（横山測）
- 第35図 第33号上蓋破損部をおおった高杯（沢測）
- 第36図 第6・13・16・31・32号腰棺実測図（後藤・横山測）
- 第37図 第24・28号腰棺実測図（横山測）
- 第38図 第29・30号腰棺実測図（横山測）
- 第39図 第5・34・40号腰棺実測図（沢・横山測）
- 第40図 第11号腰棺実測図（横山測）
- 第41図 第8号腰棺実測図（横山測）
- 第42図 第17・25・26号腰棺実測図（横山測）
- 第43図 第4・27・53号腰棺実測図（横山測）
- 第44図 第2・9・21号腰棺実測図（沢・横山測）
- 第45図 第10・38・45号腰棺実測図（横山測）
- 第46図 第45号腰棺墓坑内出土土器実測図
- 第47図 第3・43・49号腰棺実測図（横山測）
- 第48図 第35・41・54号腰棺実測図（横山測）

- 第49図 第1・15・22・46・54号腰棺実測図（横山測）
- 第50図 第12号腰棺実測図（横山測）
- 第51図 第51号腰棺実測図（横山測）
- 第52図 第20・36・37号腰棺実測図（横山測）
- 第53図 第7・14・42・44・52号腰棺実測図（横山測）
- 第54図 土括墓第3号出土土器（横山測）
- 第55図 井原り土器ピット及び出土土器（沢・横山測）
- 第56図 片廻り土器群及び出土土器実測図（沢・横山測）
- 第57図 破片土器（沢拓）
- 第58図 溝底出土土器
- 第59図 諸岡43号腰棺人骨、貝輪出土状況（橋口達也測・製図）
- 第60図 諸岡43号人骨着貝輪実測図（橋口測・製図）
- 第61図 諸岡出土貝輪の取り方（橋口製図）
- 第62図 隅丸長方形ピット実測図（横山測）
- 第63図 隅丸長方形ピット内遺物（横山測）
- 第64図 青磁器出土状況（横山測）
- 第65図 青磁器内面摄影（沢拓）
- 第66図 青磁器副葬ピット内遺物（後藤・横山測）
- 第67図 時期不詳ピット（山口・横山測）
- 第68図 表面採集土器(1)（沢測）
- 第69図 表面採集土器(2)（沢測）
- 第70図 表面採集石、土製品（沢・横山測）
- 第71図 土層図（後藤測・製図）

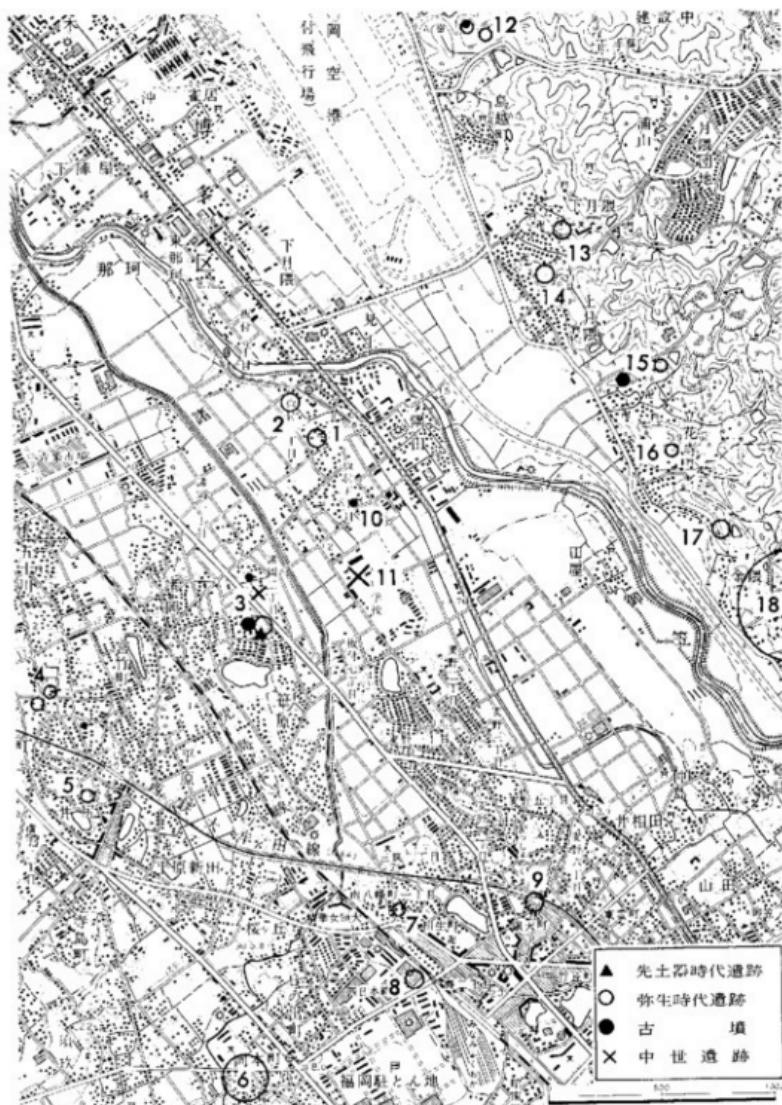
表 目 次

- 第1表 出土石器一覧表
- 第2表 丹状骨最大長表
- 第3表 出土腰棺一覧表
- 第4表 出土上土器一覧表

図 版 目 次

- PL. I　遺跡遠景（月隈丘陵よりのぞむ）
- PL. II 1 諸岡遺跡発掘地全景（航空写真、東から）
2 諸岡遺跡発掘地全景（航空写真、南から）
- PL. III 1 諸岡遺跡遠景（南から）

- 2 茜国遺跡遺構出土状況全景（北から）
- PL. IV 1 19号・29号甕棺出土状況（東から）
2 8号・9号・10号甕棺出土状況（東から）
- PL. V 1 18号・25号甕棺出土状況（西から）
2 19号甕棺・1号土括墓出土状況（南から）
- PL. VI 1 35号甕棺出土状況（東から）
2 38号甕棺・2号土括墓出土状況（東から）
- PL. VII 1 13号・14号・27号・28号甕棺出土状況（北から）
2 30号甕棺出土状況（南から）
- PL. VIII 1 4号・21号・22号甕棺出土状況（北から）
2 33号甕棺出土状況（西から）
- PL. IX 1 52号・53号甕棺出土状況（南から）
2 35号甕棺挿入状態（東から）
- PL. X 1 15号甕棺出土状況（南から）
2 20号甕棺出土状況（東から）
- PL. XI 1 青磁器出土状況
2 長方形ピット出土状況
3 破碎土器出土状況
- PL. XII 1 3号土括墓（東から）
2 11号甕棺出土状況
- PL. XIII 1 43号甕棺貝輪着装人骨出土状況（北から）
2 43号甕棺貝輪着装状態
3 34号甕棺出土状況
- PL. XIV 1 51号甕棺出土状況（北から）
2 46号甕棺出土状況
3 5号甕棺出土状況（東から）
4 焼壁ピット（東から）
- PL. XV 1 先土器時代石器（表）
2 先土器時代石器（裏）
- PL. XVI 1 青磁器
2 石器・鉄器・土製品
- PL. XVII 1 貝輪と手根骨の出土状況
2 貝輪除去後の状態
- PL. XVIII 1 手根骨の比較
2 貝輪の比較
- PL. XIX 1 43号甕棺人骨着装貝輪



第1図 板付周辺の遺跡

- 1. 板付遺跡
- 2. 板付水田遺跡
- 3. 諸岡遺跡
- 4. 井尻栄町遺跡
- 5. 井尻地緑神社遺跡
- 6. 須玖岡本遺跡
- 7. 南八幡町遺跡
- 8. 渡辺鉄工所遺跡
- 9. 雜餉畠遺跡
- 10. 板付八幡古墳
- 11. 警察学校遺跡
- 12. 下月隈宝満尾遺跡
- 13. 下月隈遺跡
- 14. 上月隈遺跡
- 15. 谷頭遺跡
- 16. 上園遺跡
- 17. 金隈斐杵遺跡
- 18. 持田浦古墳群

第一章 序 説

福岡市博多区板付二丁目所在の板付遺跡は1951～54年と1968年の日本考古学協会による調査⁽¹⁾、1969年の福岡市教育委員会の調査⁽²⁾、1969年の福岡県教育委員会の調査によって南北約90m・東西約80mの円形環溝にかこまれた弥生時代初頭以降の集落遺跡であることが明らかになった。さらに板付第一市営住宅建設にともない1971年にはじまった板付遺跡西側の沖積地（板付水田遺跡と仮称）の調査で矢板列・水利施設等の生産遺跡や墓地等が確認された。また1916年に環溝南側の板付田端で発見された甕棺副葬の細形銅劍・銅鉢各3本はつとに著名である。

これらの調査を通じて板付遺跡が生産・生活の場と墓地からなり、弥生時代農耕村落としてのまとまったあり方をよく残していることが次第に明らかになった。福岡市は本遺跡の保存・史跡指定を計画するにいたり、今年度から史跡指定事務と板付地区発掘調査を行うため文化課に板付遺跡調査事務所を設けた。

板付地区は近年宅地化が進み、水田は次々と住宅・アパート・市営住宅にかかり、板付台地とその周辺には点々と空地が残るにすぎない。こうした都市化の進展に対し、板付調査事務所では、板付遺跡の全体を把握し古環境を明らかにするため、国庫補助を受けて宅地化される周辺空地の緊急調査を行なうこととした。

この調査に際し、福岡市地図No.24「板付」を100m方眼に区切り、東から西へA・B……北から南へ1・2……とし、緊急調査地点をこの方眼の番号で呼ぶことにした（第2図）。これによれば、たとえば板付環溝遺跡はF-5・6、G-5・6地点にわたる。今後行う周辺緊急調査においてもこの地点呼称を探る。今年度は次の5地点で緊急調査を行った。

1. I-14地点（博多区諸岡ノ前 453・435-1・454-3）諸岡遺跡⁽³⁾
2. H-8地点（板付4丁目2-1）
3. D-9・10地点（板付5丁目9-6）
4. D-7地点（板付5丁目15-5）
5. A・B-13地点（板付6丁目11-2）

諸岡遺跡の調査は横山邦繼が責任者となり板付遺跡調査事務所技術職員全員で行い、九州大学医学部の永井昌文教授、橋口達也助手の参加・指導を得た。また金鍾徵（韓国国立博物館館員・九州大学研究生）、浜石哲也・小田雅文、横尾義明、鈴木由紀夫・宮下健司・川道寛（以上明治大学学生）、玉永光洋・野尻雄三（以上東洋大学学生）、実川順・（東京都遺跡調査会）の諸氏および東福岡高校史学クラブ生徒諸君の参加・援助を受けた。亀井勇氏（春日市社会教育課）、中原志外顕氏、高倉洋彰氏（九大大学院）には種々の助言を受けた。

H-8、D-9・10、D-7、A・B-13各地点の調査には後藤直と山口謙治があたった。

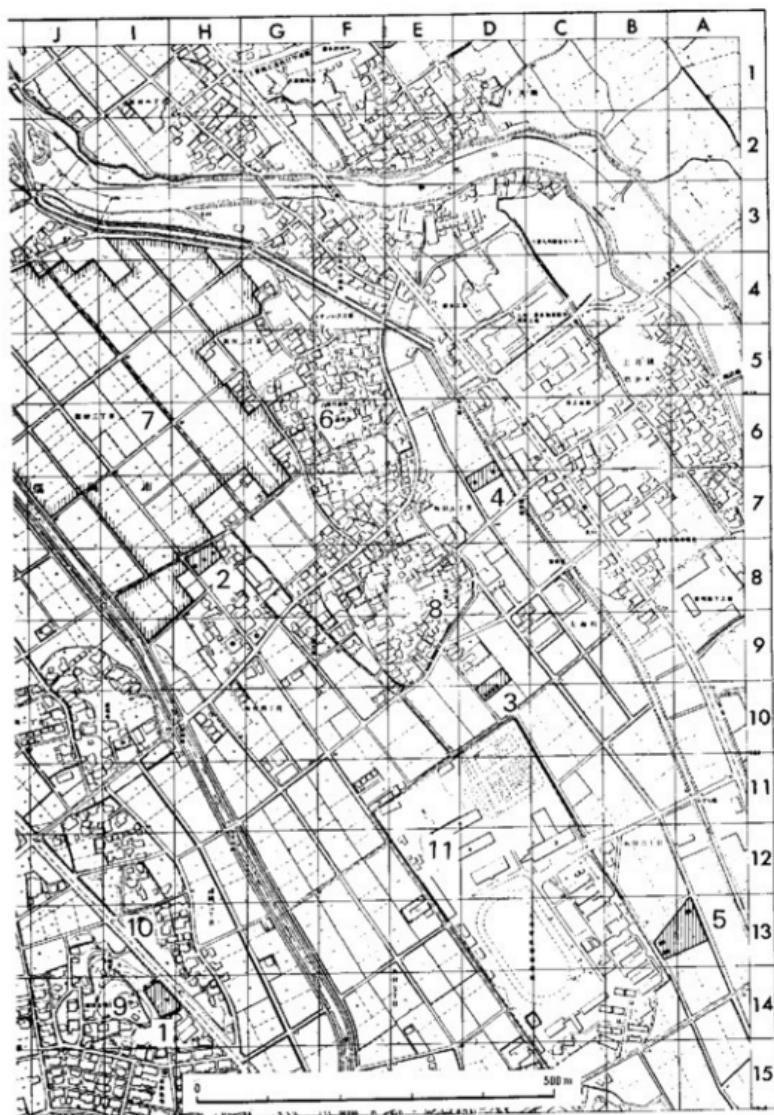
（後藤 直）

註 (1) 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年

(2) 下條信行「福岡市板付遺跡調査報告」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集）1970年

(3) 中山半次郎「銅鉢銅劍の新資料（板付北崎の遺物）」「考古学雑誌」第7巻7号 1917年

(4) 「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 総集編」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集）1971年



第2図 緊急調査地点と板付地区的遺跡

- 1. 諸岡発掘遺跡 2. H 8地点 3. D-9-10地点 4. D-6-7地点 5. A-B 13地点
- 6. 板付遺跡 7. 板付水田遺跡 8. 板付八幡古墳 9. 諸岡古墳群
- 10. 諸岡遺跡(中世遺構) 11. 警察学校遺跡

第Ⅱ章 諸岡遺跡

1 遺跡の立地と環境

北部九州福岡地方は、内陸部より北方にむかって広大な平野が形成されている。内陸部と平野部の中間地域には、開析谷や段丘が発達し、これらの地域には、各時代の多くの遺跡が点在している。福岡市博多区大字諸岡字岡の前 436から 439の地籍にある諸岡遺跡も、それらのひとつである。ここで、諸岡遺跡をはじめ周辺地域の地誌的立地・同遺跡の発見の過程・遺跡の環境について略述していく。

福岡平野は、東部を三郡山地に、南部から西部を背振山地にさえぎられ、北部は博多湾にむかってひらけている。本遺跡を含む東部地域は、東を三郡山系より派生する 430mの頂をもつ四王寺山塊と、さらに北にのびている 150mの比高差をもつ月隈丘陵できれ、西を背振山系より同じように分枝派生する 592mの頂をもつ油山山塊によって遮断されている。南部地域は、前述山系より北に派生する支脈がいたるところで侵蝕され非常に入りくんだ開析谷をもつ段丘をなしている。しかし、東部の月隈丘陵および、西部の油山山塊からの支脈の派生は弱い。平野部は、二日市狭隘部を頂点として、北西へ展開している。また、平野部では御笠川が太宰府東部を源として北西にむかい、四王子山塊の山麓線をたどり、西部を背振山の東を源とする那珂川が南東から北へ流路をとり、安徳付近において低平な河岸段丘を形成しながら、竹下付近で北西に流路を変えている。現在の福岡市街をのせている広大な三角洲は、主にこの二河川によって形づくられている。

諸岡周辺地域に目を移すと、那珂・御笠両河川の中下流にかけては、低平な河岸段丘が発達し、両河川に狹まれる南部の数条の開析段丘（早良花崗岩基盤）をも含めて、広義の沖積地とされている。しかし、低地には、花崗岩基盤上に粘土・砂礫・火山灰など洪積世堆土と考えられる土層堆をもつ標高20m前後の台地が点在している。諸岡丘陵も、板付丘陵とともに、それらのひとつである（第1図参照）。諸岡丘陵は、標高23mで、南北 110m・東西 150mの独立丘陵である。東部は国道 3号線バイパスによって切りとられ、南西部は宅地造成等によって削平されている。北部のみが、本来の姿をほぼ保ち、ゆるやかな傾斜をもって、沖積低地につながっている。この丘陵は、花崗岩を基盤とし、粘土・砂礫・火山灰よりなる洪積層をのせ、頂部には、基盤の露頭がみられる。

諸岡丘陵は、從来、建武 3年（1336年）の合戦場跡として知られていた（貝原益軒「筑前絵風土記」「福岡県史料統第 4輯」（1943）。遺跡としてしられるようになるのは、昭和10年代に入ってからである。昭和16年、高射砲台が丘陵西部に設営された時多数の甕棺が、昭和28～29年、忠魂神社建立の時には貝輪・細形銅劍（龜井勇氏談）が、各々発見され、弥生時代の甕棺墓遺跡としてしられたのである。さらに、昭和33年には、中原志外顕氏によって先土器時代のナイフ形石器が採集され、昭和47年には、丘陵北東部の発掘調査が市教育委員会によって行われ、中世の遺構も確認された。今回は、南東斜面に宅地造成が行われることになり、地主池平勝・

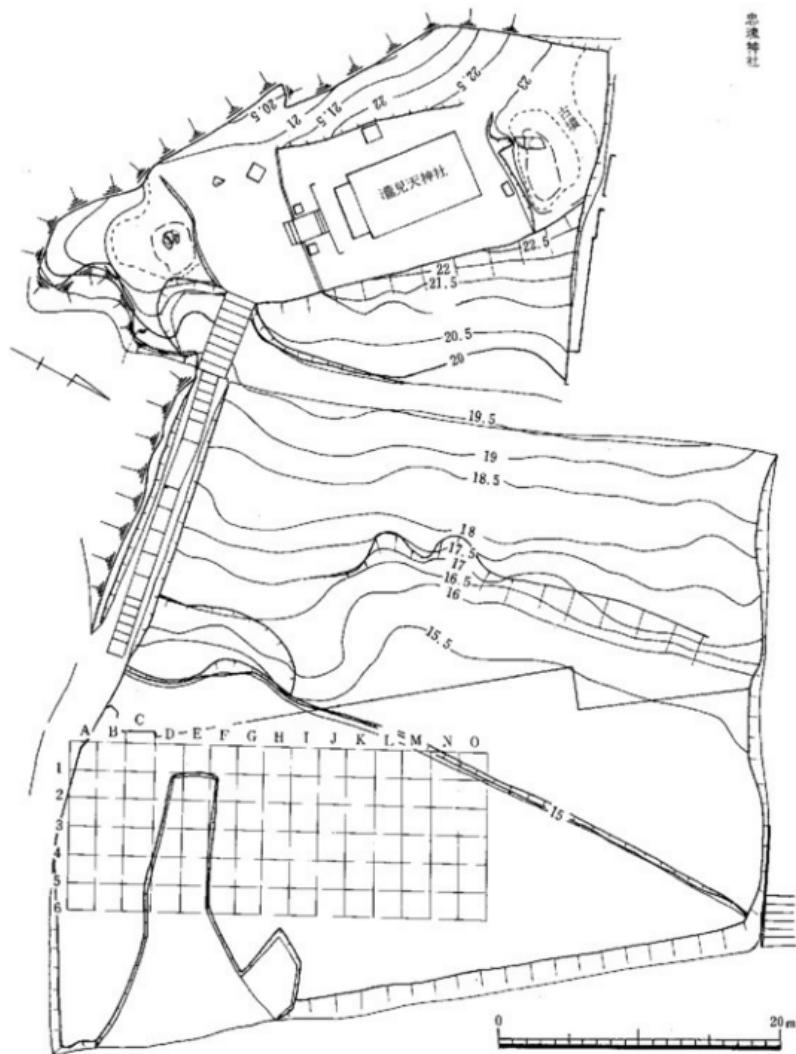
白木總潔（ヘルス商事株式会社代表取締役）両氏の協力によって記録保存調査を行なった。本文に入るまえにここで、環境についてふれることにする。

南を花崗岩の侵蝕段丘に、また東に御笠・那珂川が流れる沖積地に聳立する諸岡丘陵遺跡はそれ自体個的な歴史を持つとはいえ、平野単位の団式的な移行の過程では周辺地域とのかかわり合いなしには決して成り立ち得ない。諸岡遺跡を中心にして周辺の遺跡をみると^①（第1図参照）、本遺跡（同図3）の南方2kmにはこれと対峙して、明治32年に発見された腰棺より前漢鏡30余面・銅劍・銅鋒・玻璃璧などを出土した須玖岡本遺跡（同図6）を含む須玖丘陵の腰棺墓地帯が展開し、これより北東部に亘る低台地上には腰棺・鉄斧を出土した渡鉄工所遺跡（同図8）、弥生後期にあたる腰棺・石蓋上括を出した南八幡町遺跡（同図7）、弥生後期の住居址を出した椎前腰跡（同図9）が点在している。また遺跡西南方の井戸低台地上には弥生中期の腰棺・磨製石器および土器類の出土散布で知られる井戸柴町遺跡（同図4）、中期の住居址を出した地縁神社遺跡（同図5）がみられる。

北東1kmには環溝、腰棺墓地、貯蔵穴群などを含む弥生時代初頭以来の集落址として著名な板付遺跡（同図1）があり^②、最近では水田遺跡（同図3）の調査も行なわれている。この板付丘陵は御笠川左岸の沖積地に横たわる標高12m、南北600m、東西150m～200mをはかる低平な微高地であり、南端には小円墳（板付八幡古墳、同図10）一基がみられ、更に南方井相山の醫府学校敷地内（同図11）では礎石・瓦・古錢などを出土し、中世期の包含地をなしている。御笠川以東では、四王寺山塊より北へ伸びる月隈丘陵の尾根・山麓部に遺跡の分布は濃厚であり、特に弥生時代腰棺墓地は山麓線に沿って点在し、北端に至っている。諸岡丘陵の東方2.2kmには、弥生前中期～後期に亘る腰棺・土壙墓を含む金隈遺跡（金隈字日焼—同図17）、その北端には、弥生時代包含地の上園遺跡（金隈字上園—同図16）、谷頭遺跡（立花字谷頭—同図15）、更に腰棺墓に銅劍の伴出が伝えられる上月隈遺跡（同図14）、下月隈腰棺遺跡（同図13）が知られる。更に最近調査された下月隈宝満尾遺跡（同図12）では弥生前中期の袋状貯穀穴、中期腰棺墓、前漢鏡・玉類を出土した後期とみられる土壙墓群、および円墳1基がみいだされている^③。なお金隈一帯の尾根上には群集墳として知られる持田浦古墳群が括がっている（同図18）。

（山口・横山）

- 註 1.『埋蔵文化財遺跡地名表』（福岡市埋蔵文化財調査報告第12集）1971年参照
2. 中山平次郎「椎前腰跡付近に発見せる石蓋上括」『考古学雑誌』第21巻9号 1931年
3. 杉原莊介他「板付遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年
下条信行「板付遺跡調査報告」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集） 1970年
4. 折尾学「金隈遺跡第1次調査概報」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集） 1970年
「」 第2次調査概報」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集） 1971年
5. 本遺跡は福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集として報告書を作成中である。
6. 田坂美代子ほか「持田ケ浦古墳群」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第16集） 1971年



第3図 諸岡遠跡地形図

2 遺跡出土の遺物・遺構

1. 諸岡遺跡の先土器時代遺物（第4～第8図）

諸岡遺跡の先土器時代の遺物（ナイフ形石器）は、同地域を精力的に調査活動された中原志外顕氏によって発見された。今回の調査は、前述のように、甕棺墓に重点を置いていたが、第9・10・45号甕棺覆土中より、コア・トラビーズが発見され、甕棺墓調査終了後、先土器時代遺跡の調査を行なった。まず、本年度調査地区に第3図のようにグリットを組み、覆土中より石器採集のあった地区を主に調査した結果、ナイフ形石器文化期の良好な資料を得ることができた。

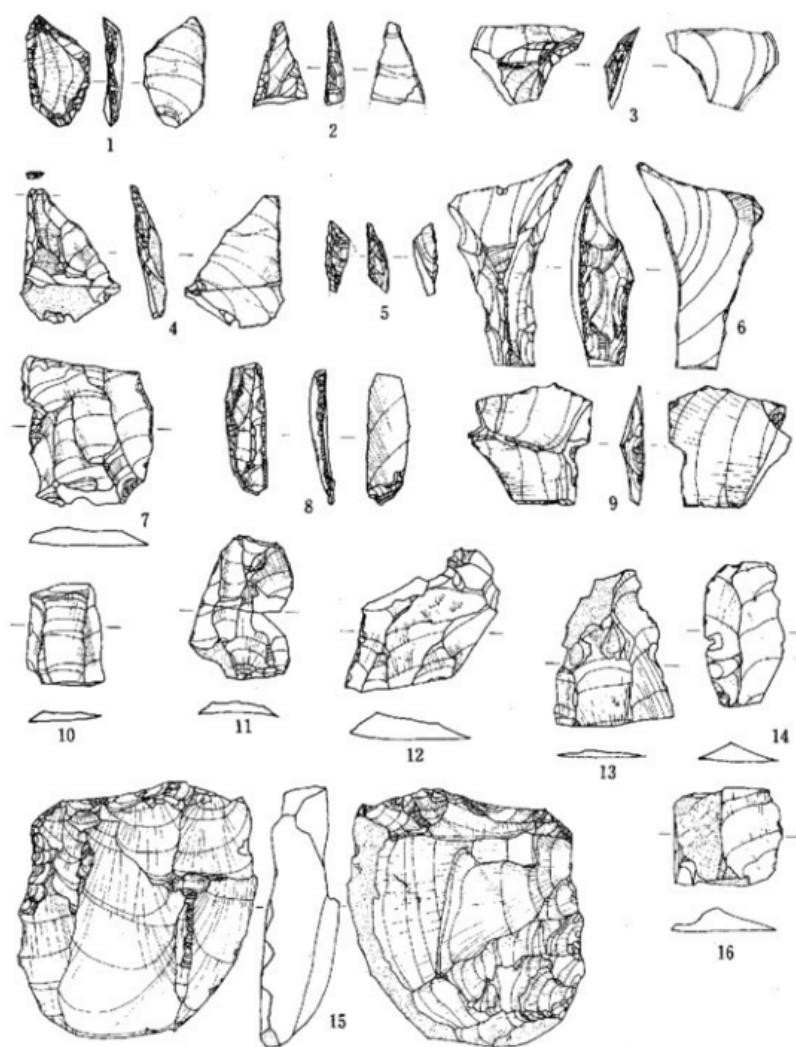
遺物包含層は、第2層（鳥栖ローム層）中である。プライマリーな土壘堆積ならば、耕作下の下に、黒褐色粘質土層・褐色粘質土層・黄褐色ローム層・褐色ローム層とつづいていくが、耕作等により、黄褐色ローム層までは搅乱がすんでいた（第8図）。遺物は、第2層面下10～40cm中に包含されていた。石器の原材としては、2点のハリ質安山岩をのぞき、腰岳産黒曜石が利用されている。石器は総遺物の24%をしめており、コアは残核であり、原材はむだなく使われていることが分る。遺物の出土状態は、第7図でみると、B・C-1区、B・C-3区、F・G-3・4区、H-5区の、4ヶ所にかたよった遺物分布があるが、甕棺墓等で、破壊が進んでいるので、明確にグループとしてとらえることはできない（第7図）。遺物は諸岡丘陵の南東斜面平坦地に分布している（第3図、表1）。

次に石器をみていくことにする。ナイフ形石器は、採集品を含めて7点あるが、いづれも小形であった。No.8をのぞき、いづれも尖端を刃注し加工やNo.86のように折取しており、刃部に刃こぼれがみられるなど、用途上興味がもたられる。タイプツールとしては、ほかにトラビーズ・トラビゾイドがある。トラビーズは採集品を含めて3点あるが、いづれも寸ずまりのフレイクを利用し、打面と尖端部に刃注し加工を加えて作られている。コア（No.1）、フレイク（No.53・72等）はこのトラビーズ製作工程を裏づける遺物である。一方、トラビゾイドは不定形フレイクが素材として選ばれている。トラビーズは、刃部に刃こぼれもみられるが、刃部より直角に擦痕が残されている（No.14・H5）点、ナイフ形石器の刃こぼれといちじるしい相違を示し、用途上の使い分けが考えられそうである。ほかには、グレイバー、サイドスクレイバー、Uフレイク（使用痕のある剥片）等の石器が出土している。グレイバーは採用品であるが、同文化期のものと考えてよいと思う。Uフレイク13点中には、No.38・83のようにスクレイバーと呼称した方がよいようなものもある。また縦長フレイクを2・3折し使われたものがある。このような石器には、刃部に顯著な刃こぼれがみられ、ナイフ形石器と同じ用途をもっていたと考えられる。

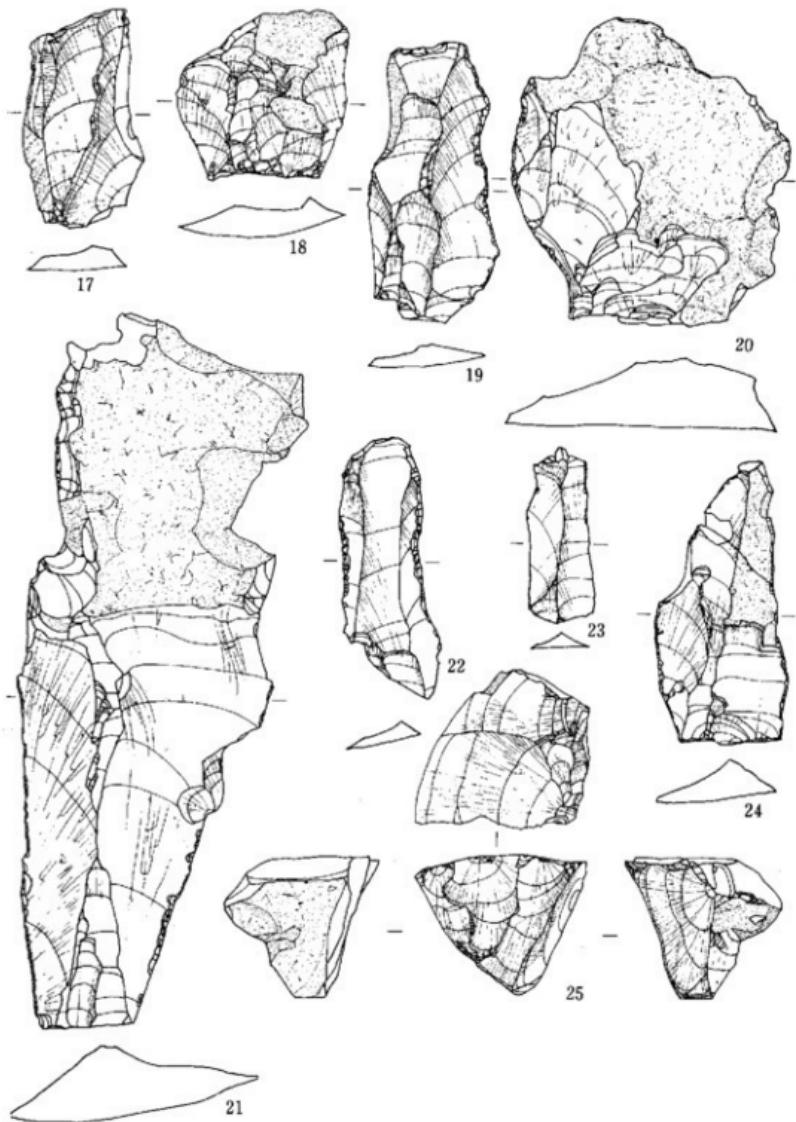
ここで、簡単に主な成果をまとめてみる。今後の福岡平野及び北九州地方の同文化期の発掘調査に期待するとともに、諸岡遺跡発掘資料が参考になれば幸いである。

1 烏栖ローム層中の先土器時代遺物である。

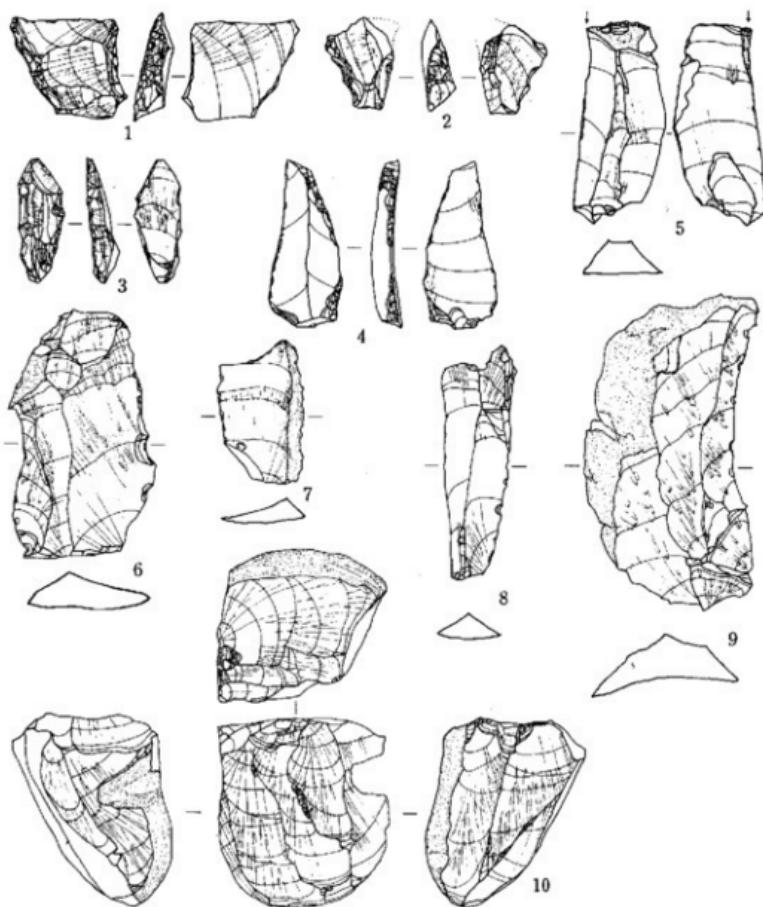
2 ナイフ形石器・トラビーズ・トラビゾイド・グレイバー・サイドスクレイバー・Uフレイク



第4図 諸岡遺跡出土石器(1)(分)



第5図 諸岡遺跡出土石器(Ⅲ)(3)



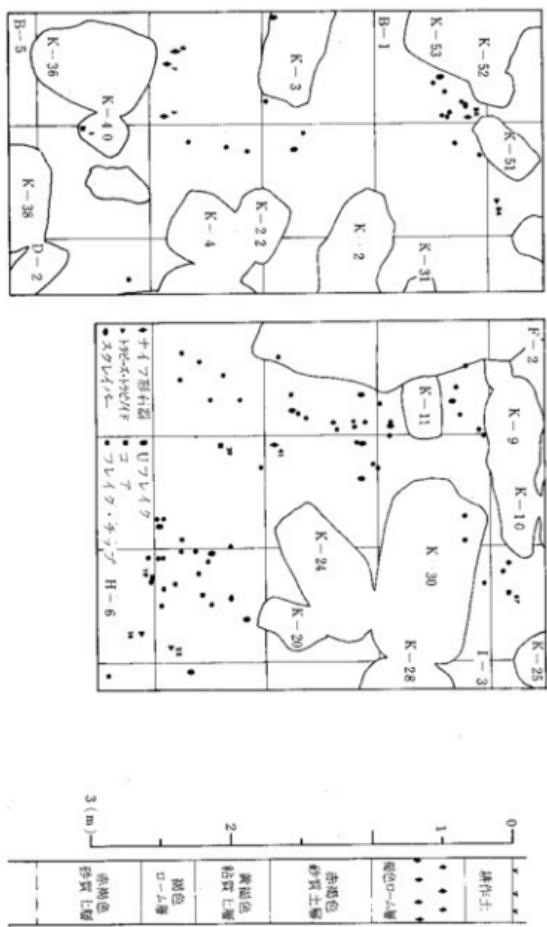
第6図 諸岡遺跡表採石器(%)

コア等からなるナイフ形石器文化終末期の遺跡である。

3 石器の原材料は、腰岳産の黒曜石が利用され、むだなく使われている。

(1974年度も諸岡遺跡の調査をおこなう予定であり、そのおり遺跡の総合的検討を加える予定である。)

(山口謙治)



第7図 石器出土分布図 (100分の1)

第8図 柱状図
(褐色ローム層下は、鳥居ローム層)

表Ⅰ 出土石器一覧

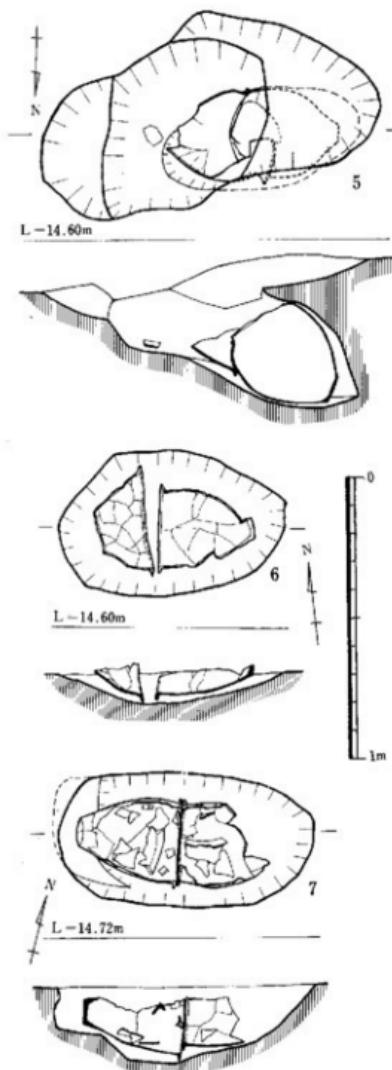
No.	出土区	器種	重さ(g)	石質	レベル	備考	No.	出土区	器種	重さ(g)	石質	レベル	備考
1	C-4	二 チップ	16.35	麻績石	13,784	第5回-25 PL-II	34	D-4	フレイク	0.77	黒曜石	14,235	
2	C-2	チップ	0.75	*	14,076		35	F-5	チップ	0.30	*	14,205	
3	*	Uフレイク	3.76	*	14,051	第4回-7 PL-II	36	F-4	*	0.75	*	14,15	
4	B-2	Uフレイク	2.14	*	14,016		37	*	Uフレイク	6.27	*	14,41	第5回-17 PL-II
5	B-3	ナイフ形石器	0.42	*	13,710	第5回-2 PL-II	38	F-5	チップ	0.01	*	14,26	
6	B-2	チップ	0.09	*	13,995		39	F-3	*	0.27	*	14,375	
7	H-3	ナイフ形石器	0.79	*	14,011	第4回-1 PL-II	40	*	*	0.13	*	14,255	
8	*	*	0.155	*	13,853	第4回-5 PL-II	41	*	Uフレイク	2.73	*	14,29	第4回-12 PL-II
9	H-5	スクレーパー	46.08	■麻績石	18,127	第5回-20 PL-II	42	*	フレイク	0.41	*	14,33	
10	C-3	チップ	1.67	黒曜石	14,086		43	*	チップ	0.28	*	14,365	
11	*	フレイク	2.96	*	14,062		44	G-4	Uフレイク	15.88	*	14,22	
12	*	*	2.02	*	13,986		45	*	チップ	0.30	*	14,175	
13	H-5	チップ	0.20	*	14,066		46	H-2	*	1.00	*	14,29	
14	H-6	トライビーズ	0.98	*	14,011	第4回-3 PL-II	47	H-2	コア	21.27	*	14,44	
15	H-5	チップ	5.02	*	14,131		48	G-3	チップ	1.14	*	14,405	
16	H-6	*	3.54	*	14,096		49	G-4	Uフレイク	6.05	*	14,32	第5回-1a PL-II
17	H-5	*	17.38	*	14,066		50	H-2	チップ	0.60	*	14,385	
18	H-6	*	0.17	*	14,051		51	G-4	*	0.11	*	14,445	
19	*	コア	30.15	*	14,016	第4回-25 PL-II	52	H-2	フレイク	0.02	*	14,34	第4回-11
20	H-5	フレイク	0.16	*	14,036		53	G-3	チップ	0.25	*	14,095	
21	*	*	1.71	*	14,106		54	*	*	0.37	*	14,345	
22	*	トライビーズ	1.83	*	14,054	第4回-9 PL-II	55	F-3	*	0.43	*	14,45	
23	*	チップ	1.23	*	14,001		56	G-3	フレイク	1.50	*	14,37	第4回-13
24	*	*	0.65	*	13,956		57	G-2	チップ	0.23	*	14,395	
25	H-5	*	3.27	*	14,041		58	F-3	*	1.44	*	14,48	
26	*	*	0.37	*	14,109		59	*	Uフレイク	4.35	*	14,345	
27	G-5	*	0.77	*	14,229		60	*	チップ	0.19	*	14,45	
28	*	*	0.01	*	14,134		61	D-4	*	0.02	*	14,185	
29	*	Uフレイク	10.61	*	14,094	第4回-10 PL-II	62	F-4	*	0.63	*	14,27	
30	*	チップ	0.27	*	14,064		63	I-5	Uフレイク	7.85	*	14,19	第5回-19 PL-II
31	*	*	0.27	*	14,014		64	C-0	トライビーズ	4.37	*	14,34	第4回-6 PL-II
32	*	*	0.45	*	14,099		65	B-1	チップ	0.04	*	14,348	
33	H-5	*	4.27	*	14,079		66	*	ナイフ形石器	0.57	*	14,333	第4回-8 PL-II
34	*	*	0.63	*	14,214		67	*	チップ	0.17	*	14,34	
35	*	Uフレイク	3.22	*	14,064		68	*	フレイク	1.07	*	14,34	第5回-19 PL-II
36	G-5	チップ	0.07	*	14,194		69	*	チップ	2.03	*	14,31	
37	I-6	フレイク	0.19	*	13,954		70	*	スクレーパー	71.14	■麻績石	14,303	第5回-17 PL-II
38	H-5	Uフレイク	6.86	*	14,077	第5回-24 PL-II	71	C-1	チップ	3.46	黒曜石	14,228	
39	G-5	コア	25.1	*	14,200		72	*	*	0.94	*	14,262	
40	*	チップ	0.45	*	14,270		73	B-1	*	0.34	*	14,17	
41	F-4	ナイフ形石器	1.005	*	14,19	第4回-4 PL-II	74	*	*	1.02	*	14,25	
42	*	Uフレイク	3.89	*	14,155		75	*	Uフレイク	4.01	*	14,25	第5回-22 PL-II
43	*	フレイク	2.02	*	14,16	第4回-16 PL-II	76	H-1	コア	30.28	*	14,614	PL-II
44	*	チップ	0.71	*	14,07		77	H-2	K-9	30.79	*	PL-II	
45	F-5	*	0.29	*	14,185		78	H-3	灰岩	1.31	*	14,614	PL-II
46	F-4	*	1.23	*	14,19		79	H-4	*	0.87	*	14,614	PL-II
47	F-5	*	0.31	*	14,245		80	H-5	E6黒土	1.80	*	14,614	PL-II
48	F-4	*	6.67	*	14,205		81	H-6	灰岩	3.99	*	14,614	PL-II
49	*	*	0.26	*	14,07		82	H-10	Uソニカ	8.75	*	14,614	PL-II
50	*	*	1.05	*	14,19		83	H-11	フレイク	2.5	*	14,614	PL-II
51	F-5	フレイク	0.98	*	14,215		84	H-12	トライビーズ	0.91	*	14,614	PL-II
52	*	*	0.08	*	14,16		85	H-13	トライビーズ	1.57	*	14,614	PL-II
53	I'-4	*	1.56	*	14,415	第4回-14 PL-II	86	*	*	22.95	■麻績石	14,614	PL-II

2. 弥生時代の墓地・遺構

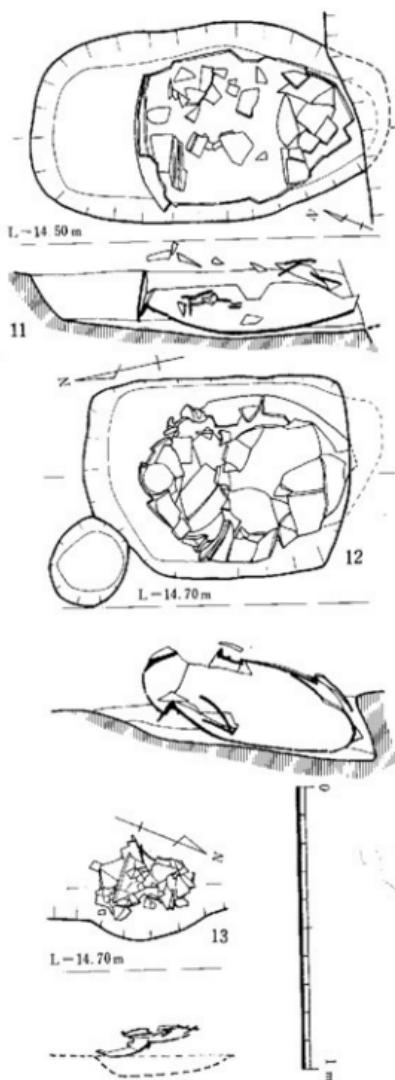
概要 諸岡跡で今回調査した弥生時代の墳墓および遺構は前期～後期にわたる。妻棺墓54基、土塚墓3基、妻棺墓地に付随すると考えられる祭祀遺構、溝などである。妻棺墓は調査区南半の標高14～15m線を追う様に帯状に営まれ、計54基が検出され、時期的には中期が主体を占め、一部に後期初頭のものも含んでいる。妻棺墓は前述の様に調査区中央以北には検出できず、墓全城の北端かと考えられる。妻棺墓は丘陵裾部に営まれ、埋葬人骨の遺存は良好ではなかったが、このうちの1基（第43号）では「ゴホウラ」貝製貝輪1個を着装した例が知られた。土塚墓は墓地内に3基見出され、2基（土塚墓1・3号）は各も中期の妻棺墓墓坑と切断関係にあってこれを切り、時期的に妻棺墓より新しい所産である。祭祀遺構としたものは墓地北端に1ヶ所、西側に2ヶ所見出され、各も浅い不整形の皿状ピットに丹塗りの小型壺あるいは壺・菱形土器が破碎状態で出土している。西側の例に近接して時期不詳の焼壁ピット・円形ピットなどの遺構の検出が行なわれた。溝は削平が著しいがほぼ南北方向に走り、第19号妻棺墓壇に切られ、また溝底より出土した土器より弥生前期にあたると考えられる。表面採集品には前期（板付II式）の壺、菱形土器片がみられ、この時期の生活址の存在が予想される。

① 妻棺出土状況

第5号妻棺墓（第10図） 第5号



第10図 第5・6・7号出土状況図



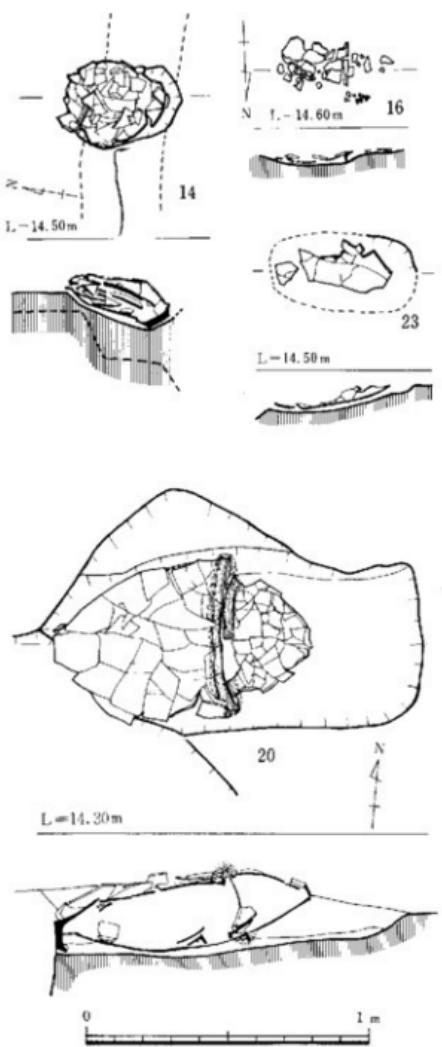
第11図 第11・12・13号出土状況図

は平面的に不整橢円形の墓壙をもっており、長軸を N-89°-E に向けて、39°の傾斜をもって埋置されている。上蓋には小形の斐形土器、下蓋には口縁部を打欠いた小形の斐形土器を使用した覆口式の小児用斐棺墓である。なむ墓壙中からは丹塗り高杯口縁部破片が一個見出された。高杯は中期後葉に属する平坦口縁を持つが他に同一の個体と考えられる破片は全くみられなかった。

第6号斐棺墓（第10図） 第6号は第7号墳の北側に並列して営まれ、平面長橢円形の墓壙をもち長軸を N-82°-W に向けており、欠損が著しいがほぼ水平に埋置されたと考えられる。上蓋に小型の鉢形土器、下蓋には小型の斐形土器を用いた接口式の小児用斐棺墓である。口縁部下端にあたる部分には少量ではあるが青灰色粘土の残存がみとめられ、この粘土の使用によって口径差がうめられる。

第7号斐棺墓（第10図） 第7号は第6号の南に並列近接して営まれており、平面長橢円形の墓壙をもち、長軸を N-75°-E に向けて、-4°の傾斜をもって埋置されている。上下蓋とともに小形の斐形土器を使用する接口式の小児用斐棺墓である。

第11号斐棺墓（第11図） 第11号斐棺は墓塚南隅を破壊されているが、ほぼ平面隅丸長方形の墓壙を残している。上蓋には精良な丹塗り磨研の傘蓋形土器、下蓋には口縁部外反の急な斐形土器を使用した接口式の斐棺墓である。長軸を N-26.5°-W に向けており、ほぼ水平に横たえて埋置されている。上蓋および下蓋の接口の際に生ずるすきまは下蓋口縁部付近に残る黄色味をお



第12図 第14・16・20・23号出土状況図

びた灰色粘土の充填によってうめられている。

第12号甕棺墓（第11図） 第12号は第29号の南に隣接して営まれており、墓域は平面調丸長方形を呈している。甕棺は長軸をN-11°-Eに向け、21.5の傾斜をもって埋置されている。上蓋には小形の鉢形土器を、下蓋に中形の變形土器を使用している接口式の小児用甕棺墓である。

第13号甕棺墓（第11図） 第13号は成人棺第28号の墓域東縁線上に位置し営まれ一部が28号の墓域を切っている。

棺は長軸をN-25°Wに向けて埋置されている。上下甕棺とともに小形の變形土器を使用した接口式の小児用甕棺墓である。

第14号甕棺墓（第12図） 第14号は第27号の墓域北縁線上に営まれており、黒色腐植土と黄色ローム土の混在する同墓域埋土中に58の傾斜をもって埋置されている。棺は長軸をN-9.5°-Wに向けている。削平によって上蓋を欠失したと考えられるが本来は接口式の小児用棺墓であろう。

第16号甕棺墓（第12図） 第16号は第27号の西側に営まれる。甕棺は削平のためその殆どを欠失している。墓域は全く明らかでないが、地山面上に擴がる黒色腐植土と黄褐色ローム土との混在土中に埋り込まれたと考えられ、地山面までは達せず、甕棺自体が浮きあが

っており、設営当時の面的状態がうかがえる、長軸はN-88°-Wに位置している。上・下甕とともに小形の變形土器を使用する接口式の小児用甕棺墓である。

第20号甕棺墓（第12図） 第20号は第24号墓域の北隅と切断関係にあって、これを切っている。平面隅丸長方形の墓域に長軸をN-86°-Eに向けて、14°の傾斜をもって埋置されている。上甕には器高24cm、口径40cmを測る小形の鉢形土器、下甕には器高68.5cm、口径44cmの中形変形土器を使用する接口式の小児用甕棺墓である。

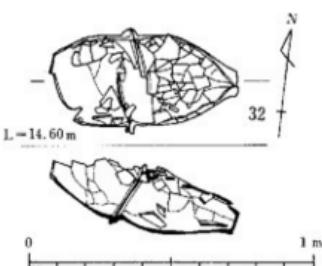
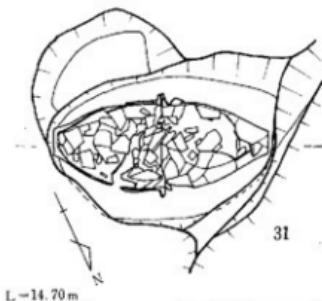
第23号甕棺墓（第12図） 第23号は第44・47号に近接して見出された。この甕棺もまた削平の影響が著しく、墓塙・甕棺とも下端の一部を残すのみであり、その遺存する破片からは小児用甕棺の埋置が推知されるに過ぎない。

第31号甕棺墓（第13図） 第31号は大形棺第33号の墓域南縁を切る長格円形の墓塙をもち、墓塙の一部は黒色腐植土と黄色ローム土の混在土中に張り出す。上・下甕とともに小形の變形土器を使用した接口式の小児用甕棺墓である。棺は長軸をN-65°-Wに向け、ほぼ水平に横たえて埋置されている。墓塙は80×60cmを測り南側に張り出しをみせる。

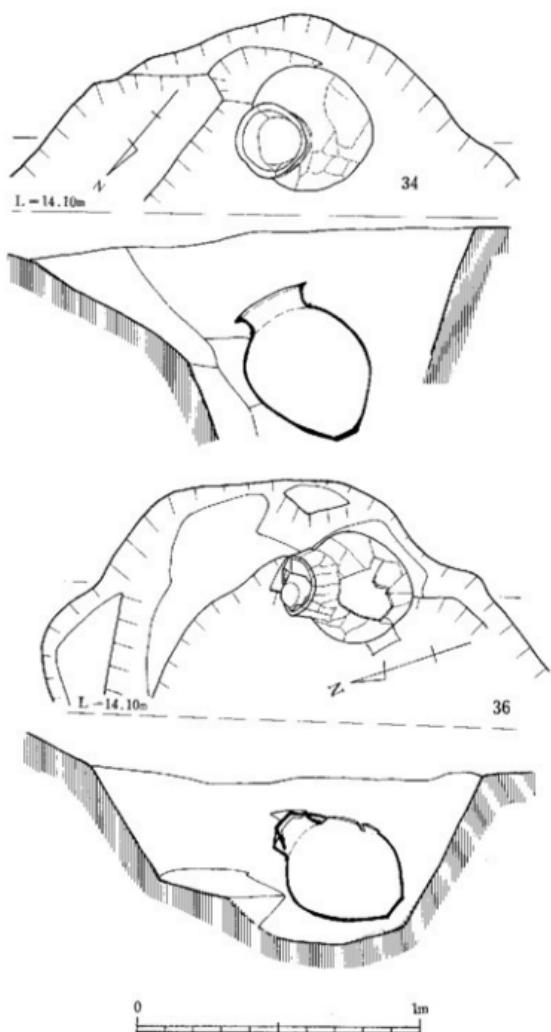
第32号甕棺墓（第13図） 第32号は第33号墓塙埋土内に墓塙を持つものと考えられるが形態は判然としない。棺には第31号と同様に上下甕とも小形の變形土器を使用する接口式の小児用甕棺墓である。棺は長軸をS-83°-Wに向け、26.5°の傾斜をもって埋置されている。

第34号甕棺墓（第14図） 第34号は第35号墓塙中に59°の傾斜をもって埋置される。墓塙内に埋置された棺下端と接する部分は埋土となつた黒色腐植土とローム土の混在土中に褐色を帯びた粘質土の掘りとして区別され墓塙底と考えられる。この状況からすれば墓塙は平面格円形の竪坑となる可能性が強い。棺は甕形土器使用的单式小児用甕棺墓である。調査時においては、壺口部に接して同口径、高さ25cm内外のドーム状空洞部が観察され、腐植し易い物体が蓋（被覆）として使用されたと考えられる。長軸をN-52°-Eに向ける。

第36号甕棺墓（第14図） 第36号は墓塙を第45



第13図 第31・32号出土状況図

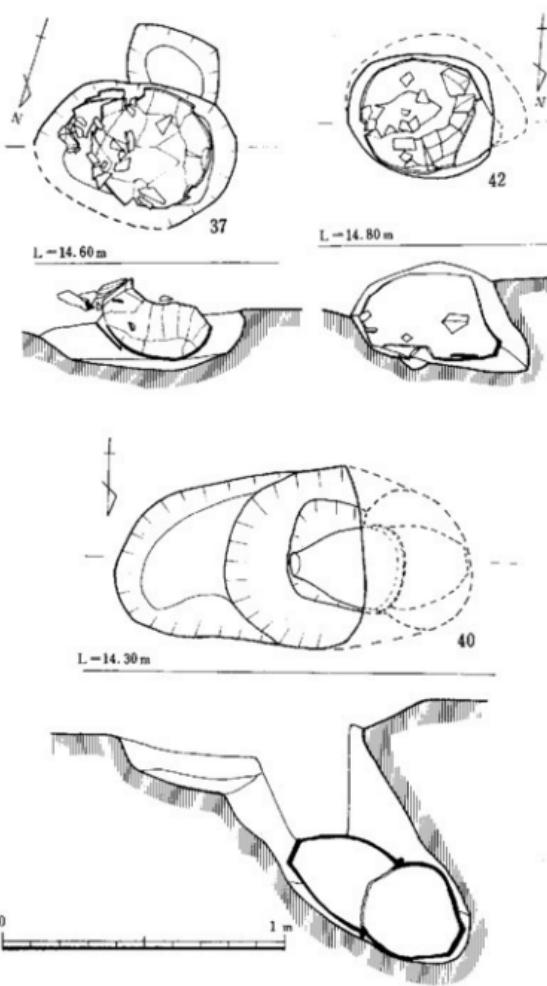


第14図 第34・36号出土状況図

号の墓壇埋土内にもら、上蓋に胸部以上を打欠いた變形土器、下蓋にはほぼ直立する短い頭の変形土器を用いた覆口式の小児用葬棺である。長軸はN-19°-Eに位置し、33°の傾斜をもって埋置されている。

第37号變棺墓（第15図） 第37号は第3号大形棺と切断関係にあり、南端においてこれを切っている。墓壇は3号墓壇以外のピットを切っているがほぼ梢円形となる。棺は長軸をN-81°-Eに向け小さい傾斜で埋置されている。上蓋に小形丹塗りの變形土器、下蓋に丹塗り無頬の精良な変形土器を使用した接口式の小児用葬棺墓である。

第42号變棺墓（第15図） 第42号はブルドーザによる破壊部分にあり、破碎されている。長軸はN-83°-Eに位置する。本来は接口式の小児棺であったかと考えられるが現在は20°の傾斜をもつ變形土器底部を残すのみである。



第15図 第37・42・40号出土状況図

には中形の菱形上器を使用した接口式の小児用棺である。葬棺接口部分は黄褐色ローム土によつて固く丁寧に口張りが施されている。

第44号葬棺墓（第17図） 第44号は平面隅丸長方形の墓壙をもち、長軸をS-26.5-Eに向け埋置される。上下蓋ともに小形の菱形上器を使用した接口式の小児用葬棺墓である。

第40号葬棺墓

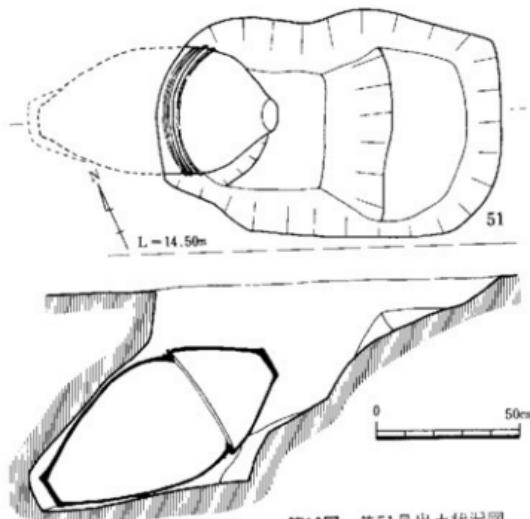
(第15図) 第40

号は第45号葬棺の墓壙北縁を切る長、短径をそれぞれ90×65cmをはかる平面隅丸長方形の墓壙をもち、長軸をN-83-Eに向け26°の傾斜をもつて埋置されている。上蓋に小形の菱形上器、下蓋に口頬部を打欠いた壺形土器を使用した覆口式の小児用葬棺墓である。

第51号葬棺墓

(第16図) 第51

号は第53号の北に接して見出され、長・短径がそれぞれ110cm、80cmを残す平面隅丸長方形の墓壙に、長軸をN-67-Wに向け、30°の傾斜をもつて埋置されている。棺には上蓋に通常の小形壺の頬部突帯以上を打ち欠いたもの、下蓋



第16図 第51号出土状況図

第47号壺棺墓(第17図)

第47号は第44号と切断関係にあって墓塚が44号を切っている。ブルドーザーによる削平で壺棺は殆ど尖われ、団面として示すことが出来ない。小破片から小児用壺棺墓であることが知られるに過ぎない。

第52号壺棺墓(第17図)

第52号の墓塚は第53号の墓塚の北西縁を切っている。壺棺は後世の方形および円形の柱穴状ピットによってかなりの欠失がみられる。不整円形の墓塚に、長軸をS-33°-

Wに向か、上下壺に小形の變形土器を使用する接口式の小児用壺棺墓である。

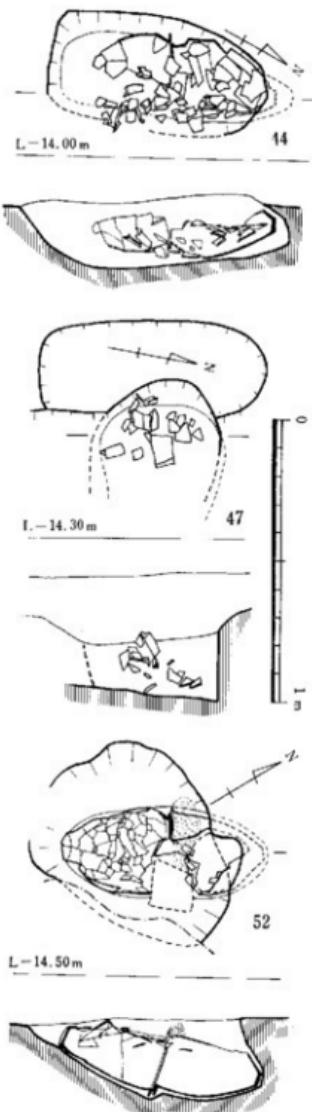
第1号壺棺墓(第18図) 第1号は第38号の墓塚南縁を切り、平面不整な長方形の墓塚となる。棺は長軸をN-71°-Eに向か3.5°の傾斜をもって埋置された単式の成人用壺棺墓である。墓塚内の口縁端には木蓋使用の明らかな痕跡はなかった。

第2号壺棺墓(第18図) 第2号壺棺墓は第26号と隣接して営まれ、この墓塚を切る不整な隅丸長方形墓塚をもち、長軸をN-3°-Eに向か、14.5°の傾斜をもって埋置される。上下壺にはそれぞれ大形の鉢・變形土器を使用する接口式の成人用壺棺墓である。

第3号壺棺墓(第18図) 第3号は長大な平面隅丸長方形を呈する墓塚をもち、棺は長軸をS-3.5-Wに向か、9.5°の傾斜をもって埋置される。上下壺とともに大形の變形土器を使用する接口式の成人用壺棺墓である。墓塚南縁を第37号小児壺棺墓に切られている。

第8号壺棺墓(第19図) 第8号は大形壺棺墓第19・10号と並列、近接して営まれるが、切り合は明らかでない。平面隅丸長方形の墓塚をもち、長軸をS-5°-Eに向か、11°の傾斜をもって埋置され、上下にそれぞれ大形の鉢、變形土器を使用した接口式の成人用壺棺墓である。墓塚は南方向から掘られる。壺棺内部に崩落した破片は器面裏を向けて積み重なり、人為的であり、埋土中から陶器小片が出土した。

第9号壺棺墓(第19図) 第9号は北側を第10号大形成人棺に切られ上壺底部を欠失している。長軸をN-21.5-Wに向か、21°の傾斜をもって埋置される。上下壺にそれぞれ大形の鉢、變形土器を使用した接口式の成人用壺棺墓である。



第17図 第44・47・52号出土状況図

第10号斂棺墓（第19図） 第10号は第9号と切断関係にあり9号南縁を切っている。

棺は長軸をN-19°-Wに向け、20°の傾斜をもって埋置される。上下斐ともに大形の斐形土器を使用した接口式の成人用斂棺墓である。

第4号斂棺墓（第20図） 第4号は大形斂棺墓第21・22号とに切断関係にあって、平面隅丸長方形を呈する墓壙をもつ。

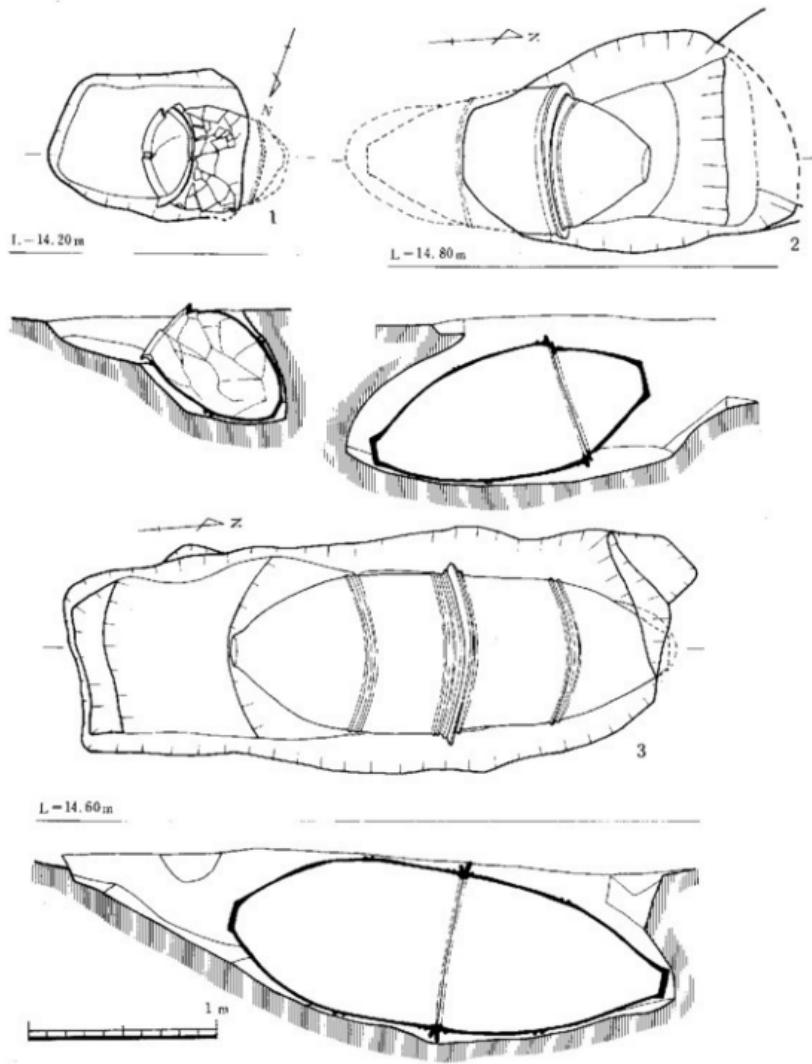
切りあいの前後関係は21号→4号→22号となつて北側より推移して21号を切っている。棺は長軸をS-77°-Eに向けており、16°の傾斜をもって埋置され、上下ともに大形の斐形土器を使用した接口式の成人用斂棺墓である。

第15号斂棺墓（第20図） 第15号は第7号の南、第33号斂棺に隣接して営まれており、棺長軸をS-24°-Wに向けて、14°の傾斜をもって埋置されている。棺は胸部突起径75cm内外をはかる大形壺形土器の口縁部および頸部を打欠き使用した単式斂棺である。

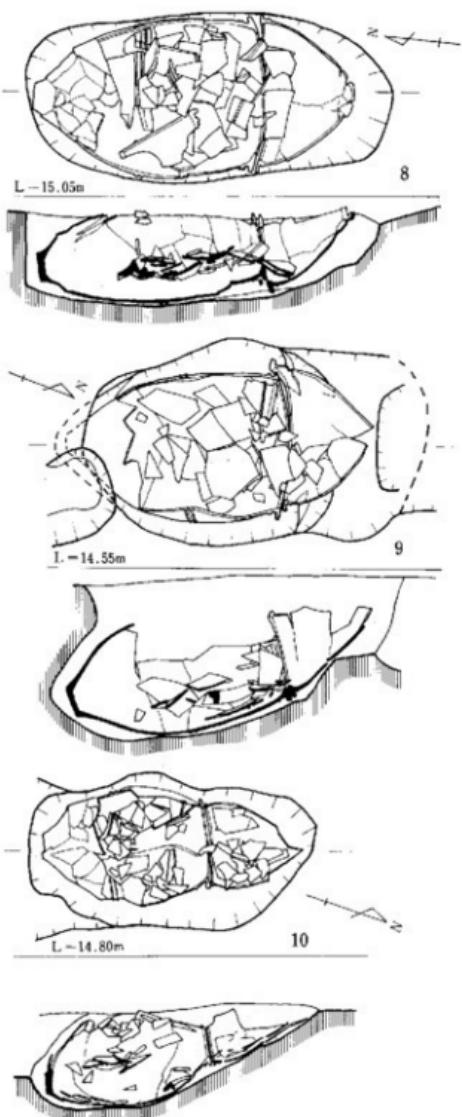
第17号斂棺墓（第20図） 第17号は第18・25号斂棺と並列し、また第28・27号とは直交に近く位置する。墓壙は平面隅丸長方形を呈しており、棺は長軸をN-84.5°-Wに向け、21°の傾斜をもって埋置されている。上・下斐にはそれぞれ大形の鉢、斐形土器を使用した接口式の成人用斂棺墓である。

第18号斂棺墓（第20図）

第18号は25号の北に営まれており、墓壙は隅丸長方形を呈する。長軸はS-75°-Wに位置している。本号は内堀ともいいくべき隅丸長方形遺構西縁上に無頭斐形土器口縁部を、また墓壙東底には丹塗り破碎土器片をもつ。出土状況からは後に記す「土塙墓」3号と類似する形態か或いは斂棺墓の人为的改変であるのか判然としないが、ここでは後者とする。



第18図 第1・2・3号出土状況図



第19図 第8・9・10号出土状況図

第19号壺棺墓（第21図）

第19号は大形壺棺第25号の南に営まれている。墓塚は後に記す土塙墓1号によって北縁を切られ、更に南に伸びる溝状造構を切っている。棺は長軸を S-85°

Wに向け、18°の傾斜をもって埋置される。墓塚は隅丸長方形を呈し、上・下蓋にはそれぞれ大型の鉢、壺形土器を使用した接口式の成人用壺棺墓である。

第21号壺棺墓（第22図）

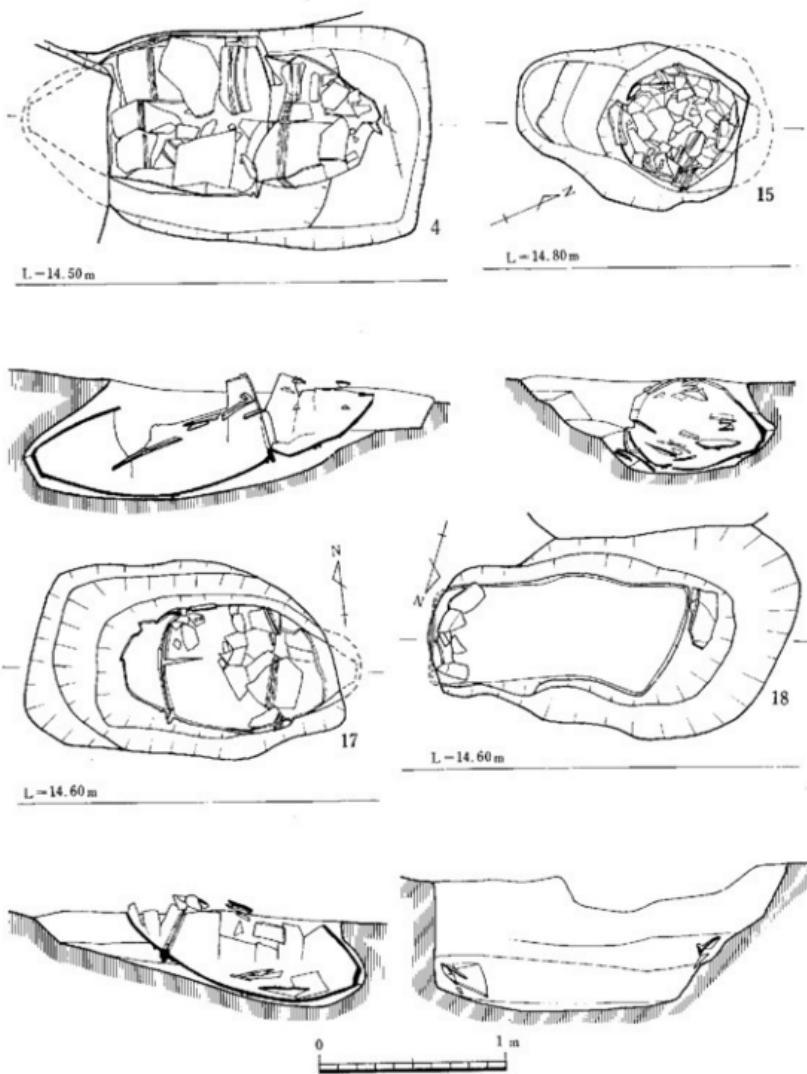
第21号は大形壺棺第4号墓塚に東南壁を切られている。墓塚は平面隅丸長方形を呈し、長軸を S-78°Eに向け、3°の傾斜をもって埋置された単式の成人用壺棺墓である。口縁下端に沿っては短・長径18×80cmの狭長なピットが走っており、木蓋の存在、使用が推定される。

第22号壺棺墓（第23図）

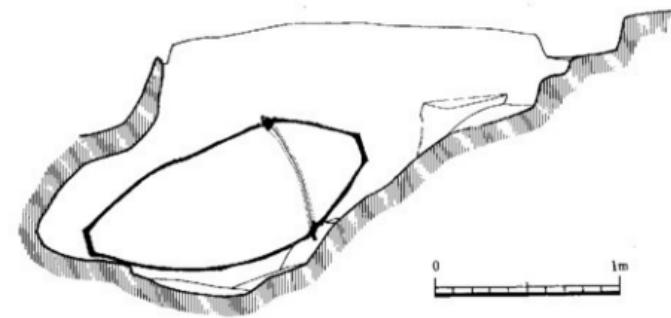
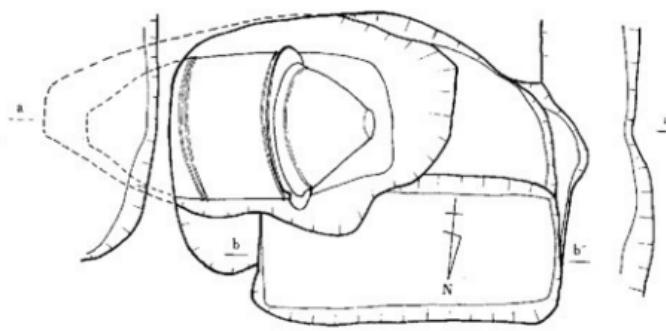
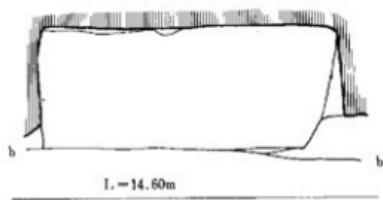
第22号は、大形壺棺第4号の墓塚の南壁と切断関係にあってこれを切っている。墓塚は平面隅丸長方形を呈する。棺は長軸を N-16.5°Eに向けて、6°の傾斜をもって埋置されている。上蓋には上胸部以上を打欠いた丹塗りの壺形土器、下蓋には口縁が削頭状にひらく壺形土器を使用する接口式の壺棺墓である。口径42cmを測る下蓋からは小児用壺棺とするのが妥当であろうか。

第24号壺棺墓（第23図）

第24号は大形棺第30号に近接して

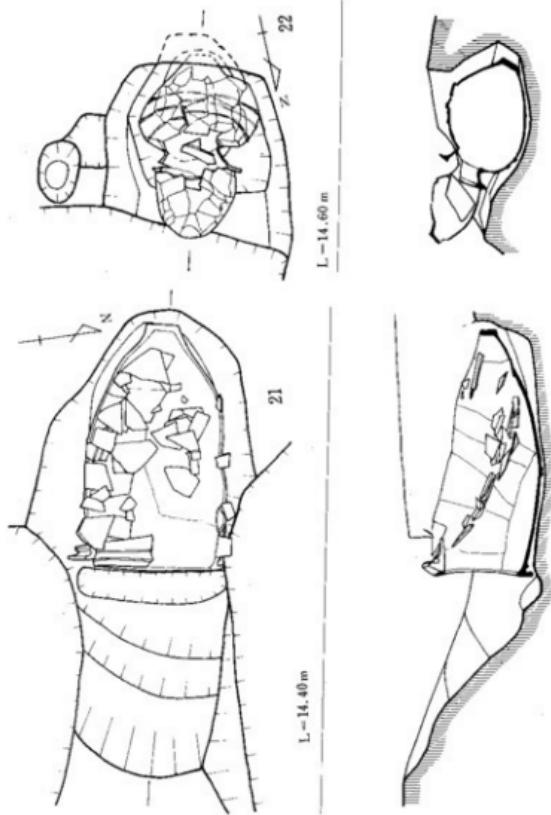


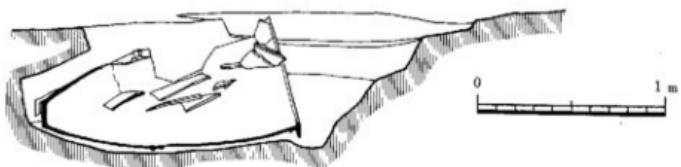
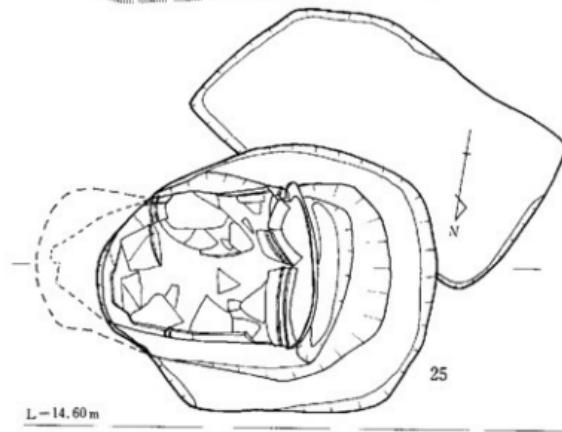
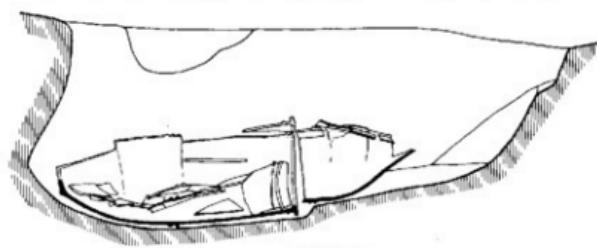
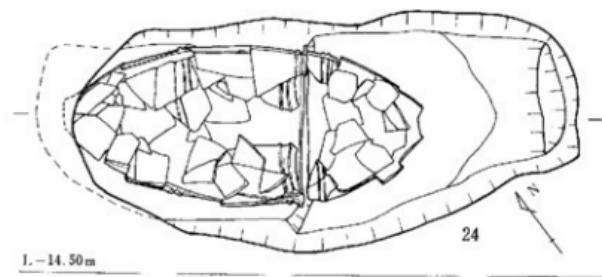
第20圖 第4・15・17・18號出土狀況圖



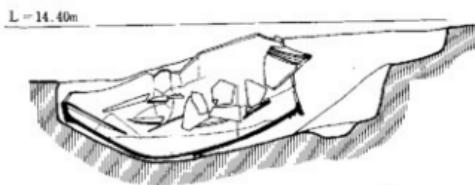
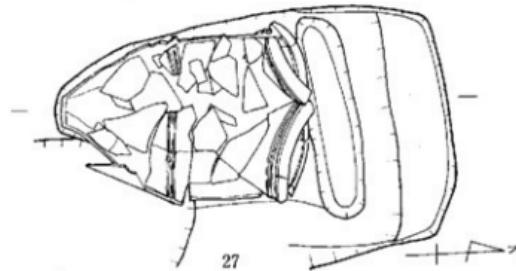
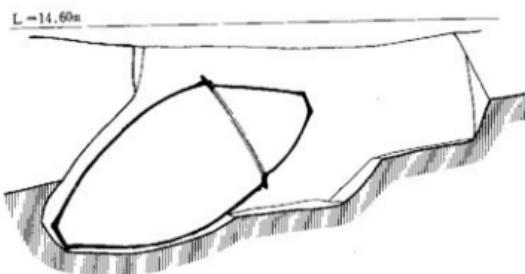
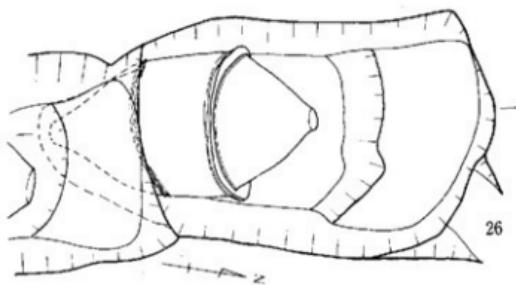
第21図 第19号土塙墓1号出土状況図

第22圖 第21・22号出土狀況圖



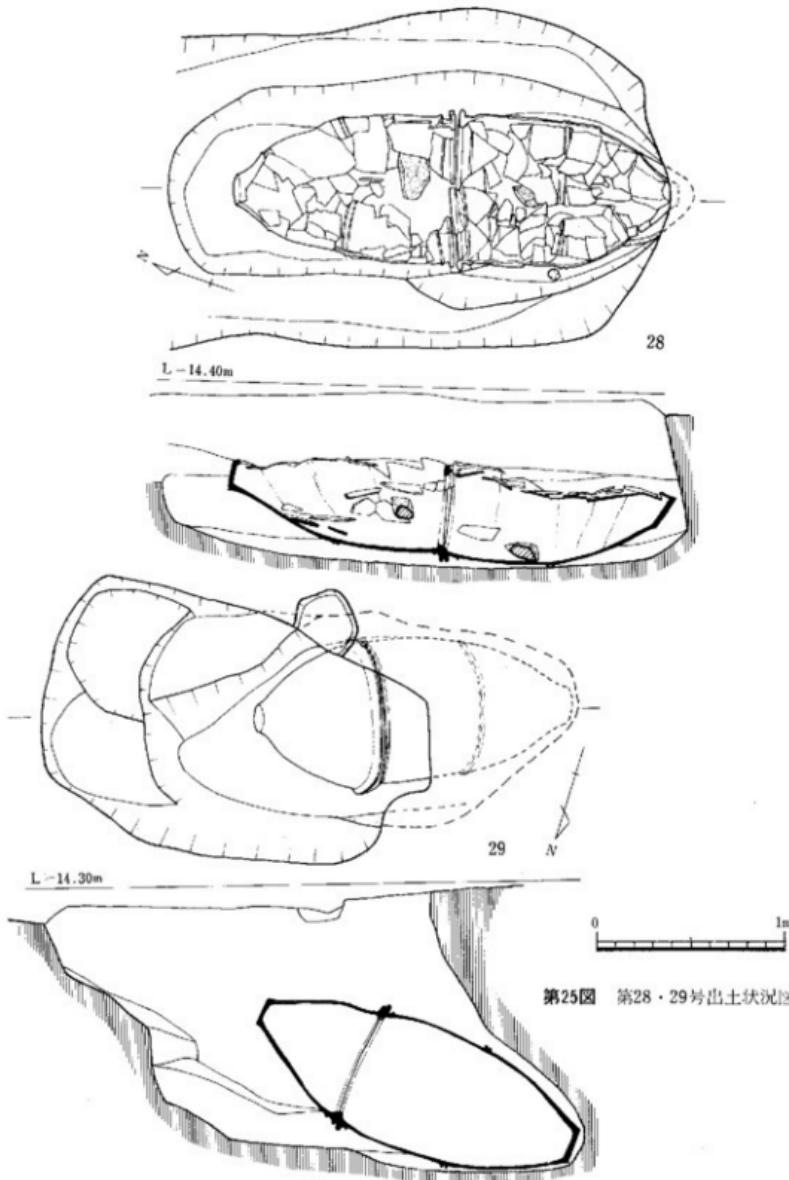


第23図 第24・25号出土状況図



0 1 m

第24図 第26・27号出土状況図

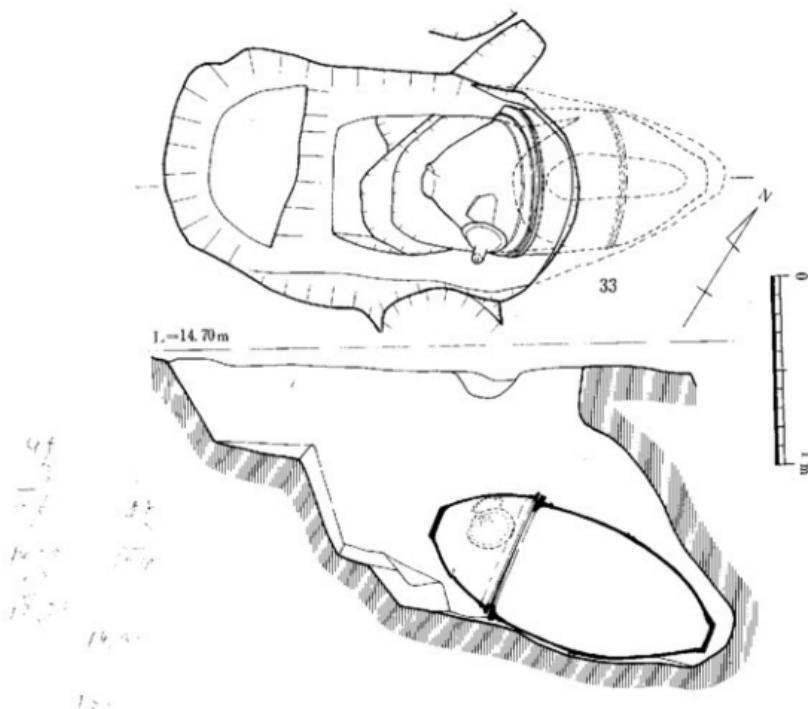


第25図 第28・29号出土状況図

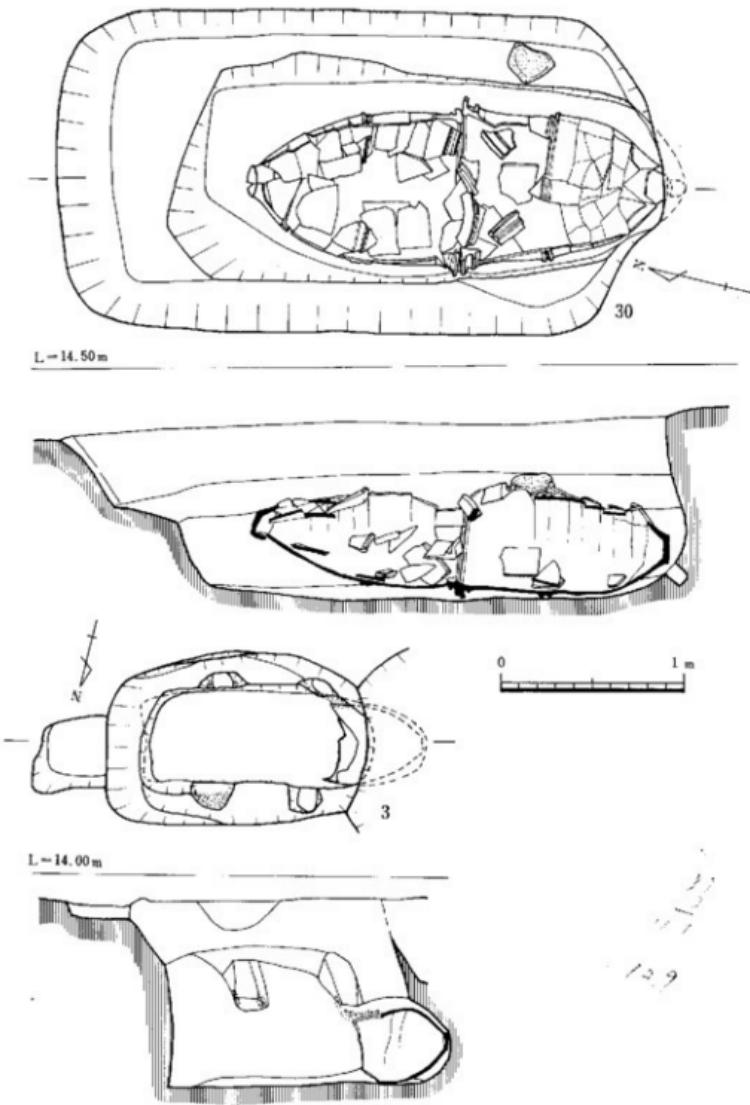
當まれ、また第20号と墓塙の切断關係があつて北のコーナーをこれに切られている。墓塙は平面隅丸長方形を呈しており、塙底は段をもつており、更にこれより喪棺の埋置場が形にあわせて掘られる。長軸を S-52-E に向け、6°の傾斜をもつて埋置される。上下蓋とも大形の變形土器を使用した接口式の成人用喪棺である。

第25号喪棺墓（第23図） 第25号は第18・19号と近接並列して當まれている。墓塙は長楕円を呈し、第30・28号と直交する位置にある。墓塙は浅い方形状のビットと切り合い關係にあるが性格は不明である。長軸を S-80°-W に向け、9.5°の傾斜をもつて埋置されている。口縁と接する墓塙下端に沿っては、 $87 \times 27\text{cm}$ を測る狹長なビットが観察され、口径（86.4cm）と対応し、木蓋の存在が想定される。

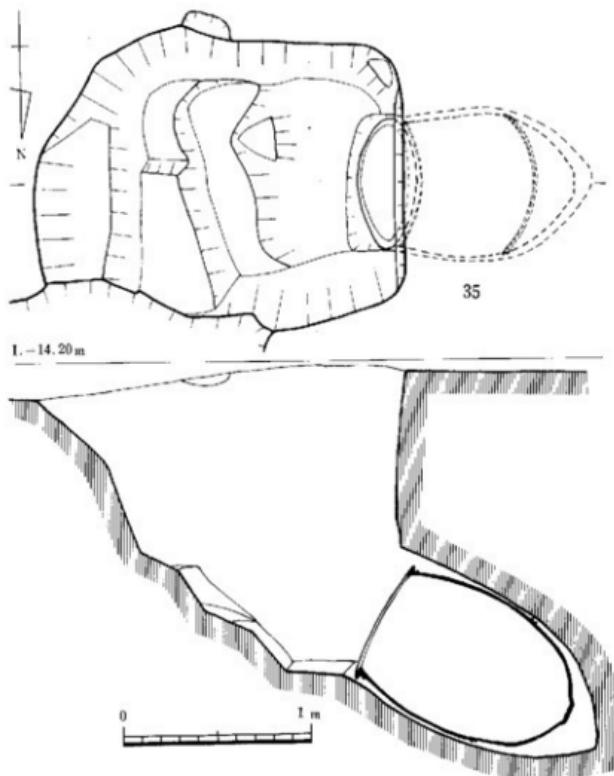
第26号喪棺墓（第24図） 第26号は大形棺第2号と切断關係にあつてこれに切られている。墓塙は段状の平面隅丸長方形を呈しており、長軸を N-13.5-W に向け、9.5°の傾斜をもつて埋置されている。上下蓋にはそれぞれ鉢、變形土器を使用した接口式の成人用喪棺墓である。



第26図 第33号出土状況図



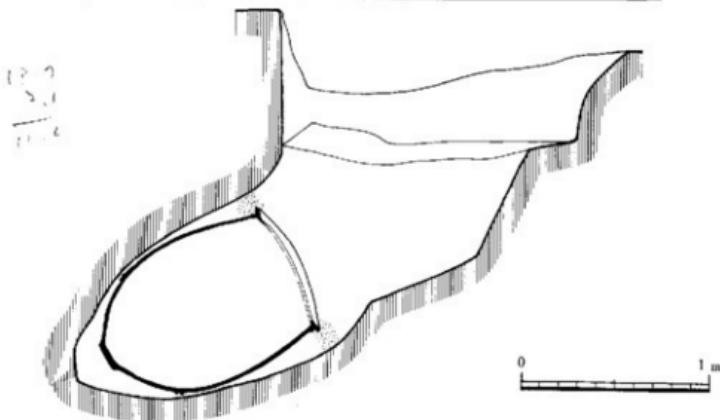
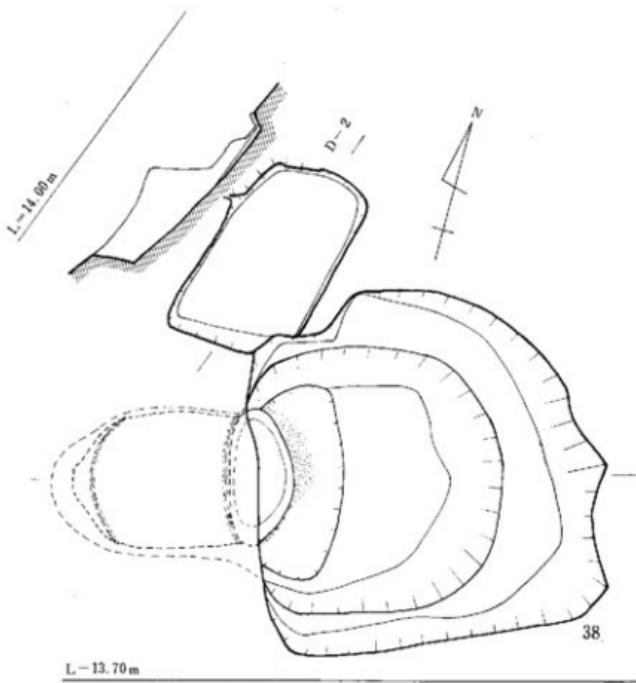
第27圖 第30・D・3号出土状況図



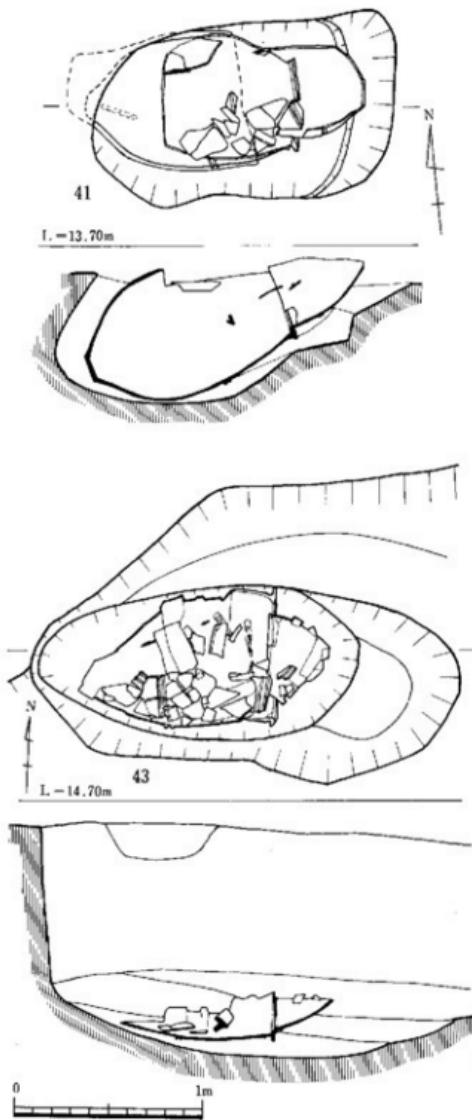
第28図 第35号出土状況図

第27号覆棺墓（第24図） 第27号は第28号と墓塚が切断関係にあってこれを切っている。墓塚は平面隅丸長方形を呈し、また第14号小児棺に切られている。長軸をほぼ南北に向け、ゆるい傾斜で埋置された単式の成人用覆棺墓である。墓塚底の口縁に接する部分には之に沿って長・短径が $107 \times 27\text{cm}$ の狭長なピットがみられ、木蓋の存在が想定される。

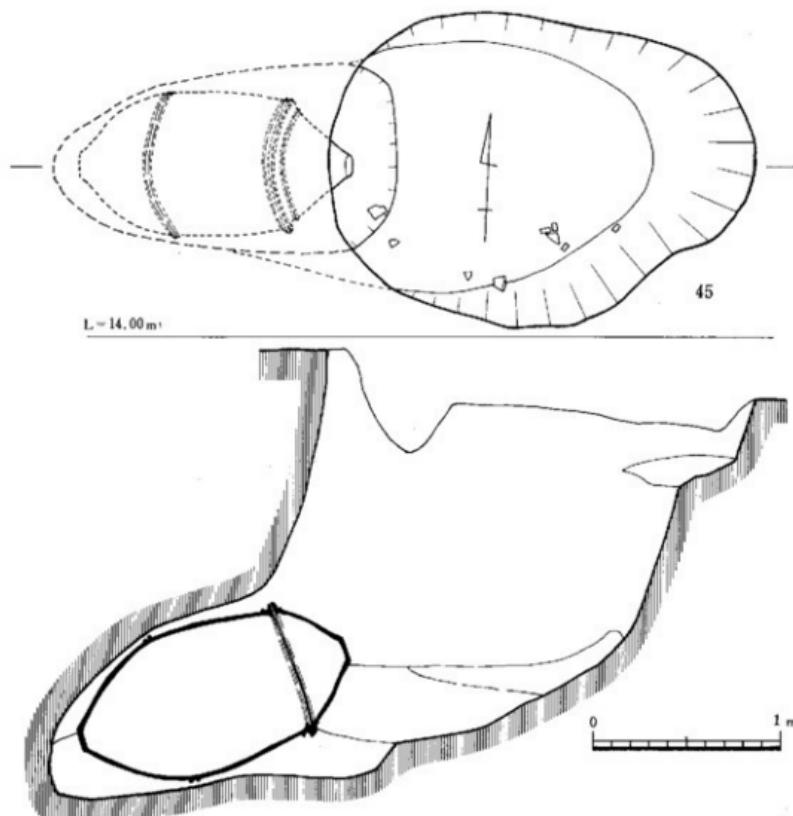
第28号覆棺墓（第25図） 第28号は前述の大形棺第27号と北壁において切り合い、これに切られる。墓塚は長大な隅丸長方形を呈し、三段掘方となる。棺は長軸を $N-19^{\circ}-W$ に向け、 4° の傾斜をもち、ほぼ水平に埋置されている。上下蓋ともに大形の壺形土器を使用した接口状の成人用覆棺墓である。



第29図 第38号土塚墓2号出土状況図



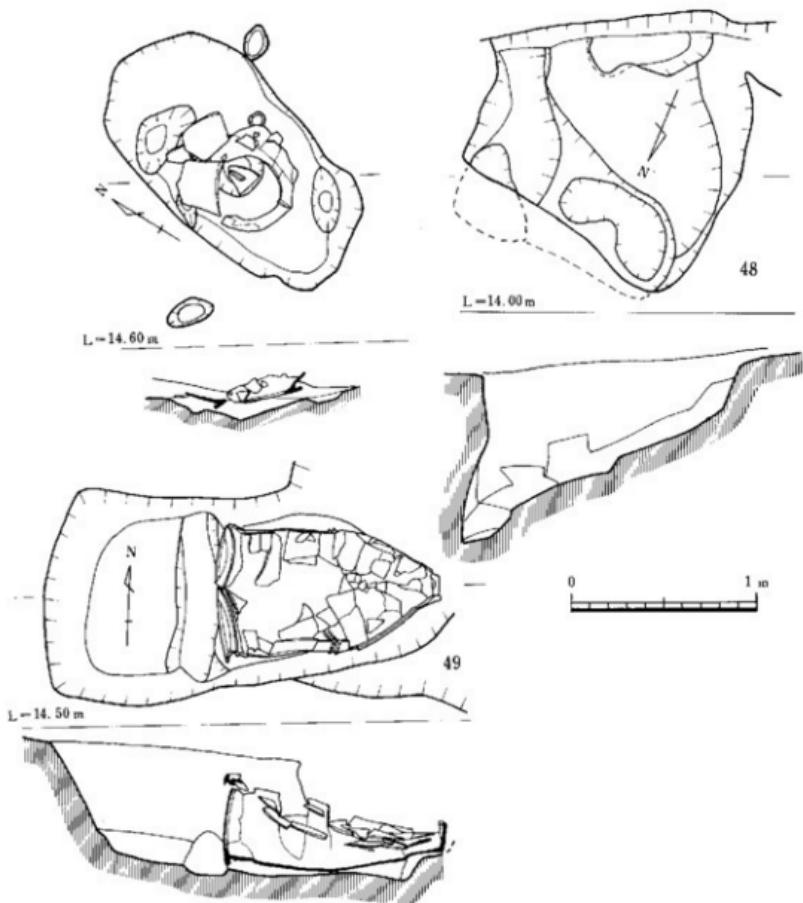
第30図 第41・43号出土状況図



第31図 第45号出土状況図

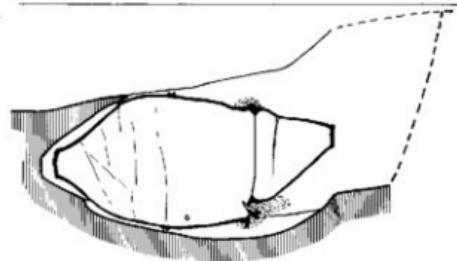
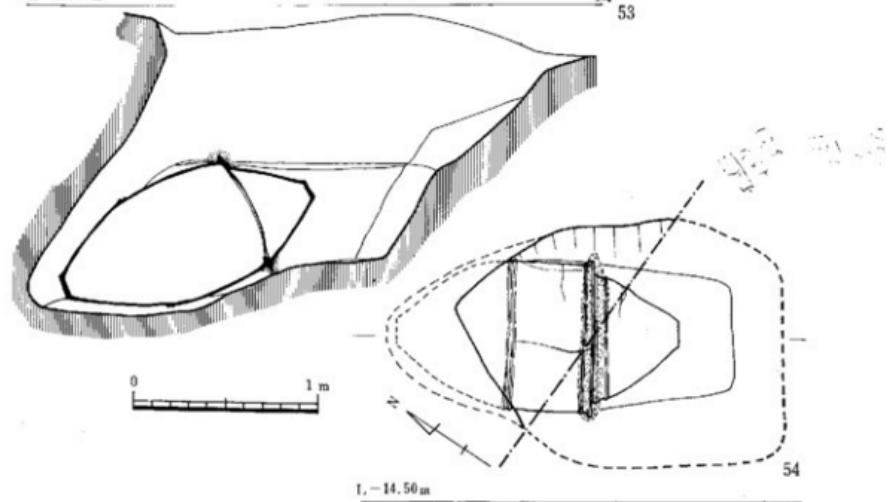
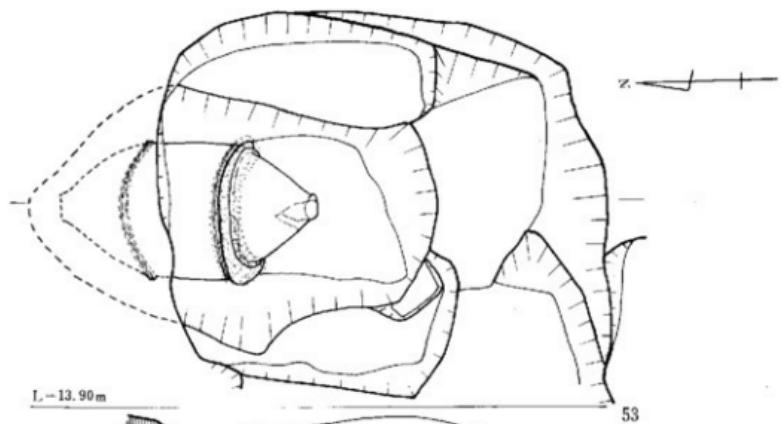
第29号壺棺墓（第25図） 第29号は墓域の北端に位置して、平面隅丸長方形の墓塚をもつていて。棺は長軸をN-71°-Eに向かって、2Tの傾斜をもつて埋置されている。墓塚は東側に段状の構造をもつており、搬入の便に供するためかも知れない。墓塚掘り方は東側からである。上下棺にそれぞれ大形の鉢、壺形土器を使用した成人用壺棺墓である。下壺には若干の人骨片の遺存がみられた。

第33号壺棺墓（第26図） 第33号は残存良好な平面隅丸長方形の墓塚をもち、長軸をS-58°-Wに向かって、25°の傾斜もつて埋置されている。上下棺にはそれぞれ大形の鉢、壺形土器を使用し、上壺の破損部被覆に丹塗り高杯を使用した成人用壺棺墓である。



第32図 第46・48・49号出土状況図

第30号彌棺墓（第27図） 第30号は長大な平面隅丸長方形の墓壇をもち、長軸をN-13.5°-Wに向かって、4.5の傾斜をもつて埋置され、上下棺とともに大型の變形土器を使用する接口式の成人用彌棺墓である。墓壇東縁には花崗岩角礫がわかれ。また墓壇南壁、接口部下には径8cm深さ10~14cmをはかる小孔が各一個検出されたが彌棺墓との関連は明らかではない。



第33図 第53・54号出土状況図

第35号妻棺墓（第28図） 第35号は平面隅丸長方形の墓壇を持ち、25.5°の傾斜をもって挿入埋置される。長軸をS-89°-Eに向ける単式の成人用妻棺墓である。口縁下に沿って72cm程度の溝がみられ、青灰色粘土が充填されており、木蓋の存在が考えられた。

第38号妻棺墓（第29図） 第38号は平面隅丸長方形の墓壇をもち、垂直に削った西壁に奥行150cmの横穴を穿ち、長軸をN-74°-Eに向いて、26°の傾斜をもって挿入埋置される単式の成人用妻棺墓である。検出時は妻棺内への埋土流入はみられず、また口縁平坦面全周には青灰色粘土が固着しており、木蓋の存在がうかがえる。墓壇は後期の「土塙墓3号」に切られる。

第41号妻棺墓（第30図） 第41号はブルドーザーによる削平をうけているが、平面隅丸長方形の墓壇を残し、長軸をS-85°-Eに向いて、22°の傾斜をもって埋置されている。上下妻ともに大形の變形土器を使用した接口式の成人用妻棺墓である。下妻内には僅かに人骨の遺存がみられた。

第43号妻棺墓（第30図） 第43号妻棺墓は削平が著しいが、ほぼ隅丸長方形の墓壇を残し、長軸をN-87.5°-Eに向けて、6°の傾斜をもって埋置されている。上下妻にはそれぞれ大形の精良な鉢、變形土器を使用した接口式の成人用妻棺墓である。本棺は下妻に頭位を西にした貝輪着装男性骨一體が検出された。

第45号妻棺墓（第31図） 第45号は第38・35号と並列して営まれ、第40号小児棺に北壁を切られる。墓壇は不整な梢円を呈し、垂直に削られる西壁に150cmの横穴を穿ち、19°の傾斜をもって挿入埋置される。長軸はN-86.5°-Eを向く。上下棺にはそれぞれ大形の鉢、變形土器を使用した接口式の成人用妻棺墓である。

第46号妻棺墓（第32図） 第46号は隅丸長方形の浅いピット中に口縁を下にして埋置される。妻は下脚部以上を欠失する。口縁下には顯著な上跡などは検出出来なかった。ここでは妻蓋土壇の可能性をもつものと考える。

第49号妻棺墓（第32図） 第49号は第53号墓壇を切り、長軸をS-88°-Wに向いて、11.5°の傾斜をもって埋置される単式の成人用妻棺墓である。口縁に沿っては長・短径が92×22cmの狭長なピットが走り木蓋の存在がうかがえる。

第53号妻棺墓（第33図） 第53号妻棺墓は第49号に切られる。墓壇は外輪部で隅丸方形を呈し、内壇は埋置のために更に掘られ北壁に70cmの横穴を穿つ。長軸を南北に向け、21.5°の傾斜をもち埋置され、上下棺にそれぞれ大形の鉢、變形土器を使用する接口式の成人用妻棺墓である。

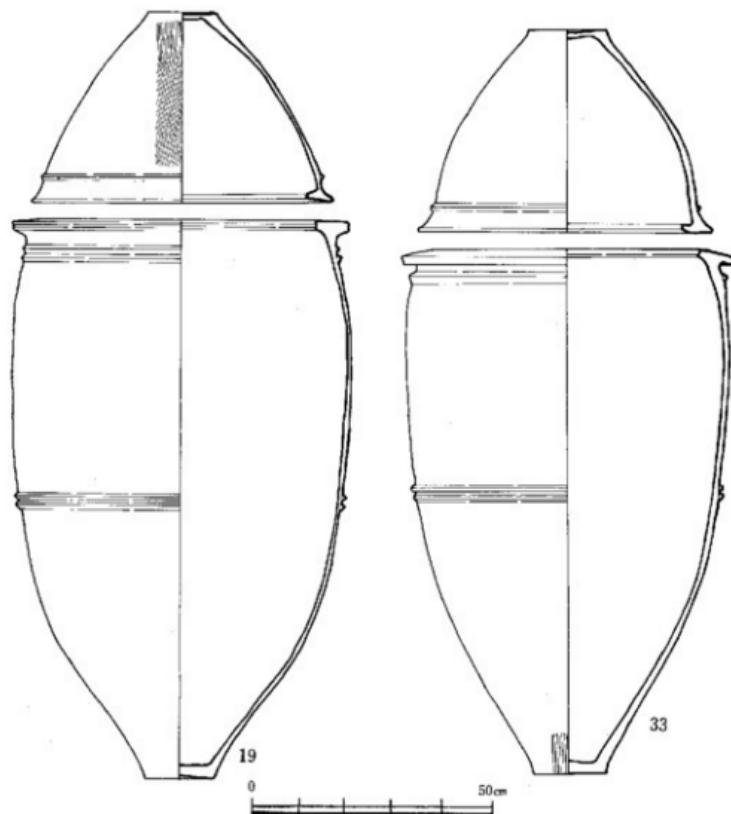
第54号妻棺墓（第33図） 第54号は平面隅丸方形の墓壇をもつと考えられ、長軸をS-34°-Eに向いて、6°傾斜をもって埋置される。上下棺にはそれぞれ大形の鉢、變形土器を使用し、接口にあたって、口径の差は別の土器の口縁部の使用によってうめられる成人用妻棺墓である。

② 出土妻棺（第34～第53図）

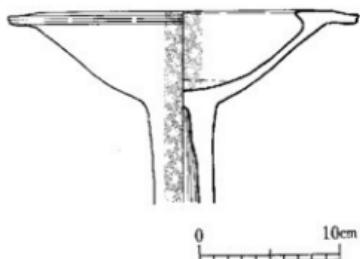
出土した妻棺墓は計54基を数えるが、第23・50号は小破片で実測不能であり、第39・48号は墓壇のみを残し、また第4号・42号の上妻となる口頭打欠きの變形土器は図示し得なかった。

第19号甕棺（第34図） 上蓋は肥厚して内部への張り出しか著しい鉢形土器である。口縁下には一条の高いが鋭い三角突帯一条をめぐらし、ゆるやかに底部へつながる胴は下胴部端において器壁を厚くし薄い底部へ連絡する。下蓋は内・外唇とも肥厚するT字形口縁下に二条の三角突帯をほどこす。ゆるやかなふくらみをもつ上胴部は中央に近く直線的となり、二条の三角突帯をもつスマートな變形土器である。時期は中期中葉か。

第33号甕棺（第34図） 上蓋の鉢形土器は口唇の発達の良好なT字形口縁下に鋭い三角突帯をもち、ゆるやかなふくらみをもってややあげ底の底部へつながる。補修の丹塗り高杯（第35



第34図 第19・33号甕棺実測図



第35図 第33号上部破損部をおおった高壺

らみの大きくなっている。胴部には煤がつき日常用土器の転用が知られる。暗褐色を呈し胎土、焼成とともに良好である。口縁下には強い横ナデがあり、不明瞭な稜をもっている。下腹はゆるやかに外反してやや口唇が肥厚する口縁をもつ鉢で口縁下には断面「コ」字形を呈する突帯一条をもっている。時期は中期後葉であろう。口径は44cmをはかる。

第13号甕棺（第36図） 上部は口縁外唇がやや垂れ、内唇に弱い稜をもつ甕である。口縁下には横ナデが施される。下腹はほぼ水平に外反するとはいえ外唇が垂れ、伸びが良い。胴のふくらみはゆるやかである。時期は中期中葉であろう。

第16号甕棺（第36図） 上部はゆるやかに外反する口縁内唇に弱い稜をもち、胴部のふくらみは弱いシャープな甕である。下腹は肥厚する短小な口縁部をもつ甕である。内面には稜縁をもたず、ゆっくりと胴部へつながっている。胴のふくらみは弱い様である。

第31号甕棺（第36図） 上部は外唇の発達が良く、内唇の小さい口縁をもつ甕である。口縁内唇にはその一ヶ所に巾2cmの間隔をもって焼成前の切り込みがみられ、刻目状となっている。下腹にもまた同様な部分が存在し、埋置に際し符合させた様である。下腹はほぼ水平に外反する口縁部を持ち、内唇の張り出しが弱い。また前記の様に口縁内唇に巾1.5cmの刻み目が一ヶ所施されている。焼成良。時期は中期中葉か。

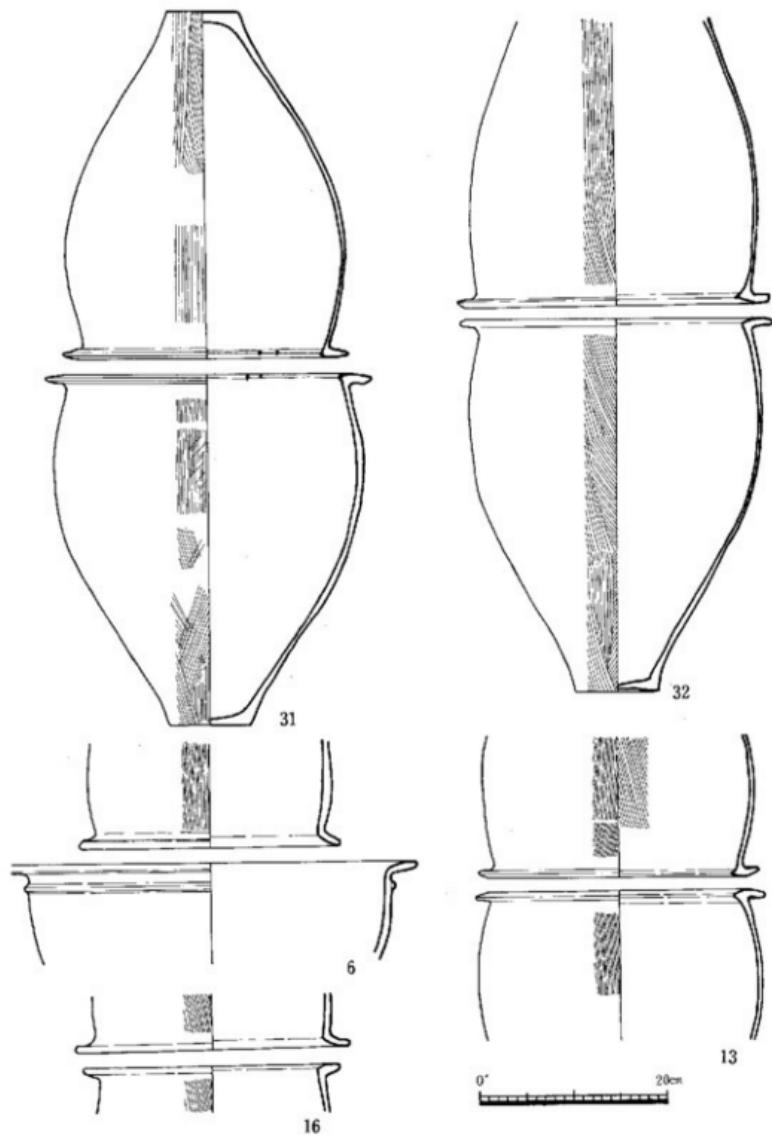
第32号甕棺（第36図） 上部は外唇部が長く伸び、口縁部平坦面は中位から内傾してこれにつながる。内唇端は鋭い稜をもつ。下腹は同様に口縁外唇の発達の良い甕であり、胴の膨らみはゆるやかである。時期は中期中葉であろう。

第24号甕棺（第37図） 上部は断面「コ」字形に近く、径72cmを測る突帯を胴部中位にもつ甕形土器であり、胴上部以上を欠失。下腹は著しく肥厚したT字形口縁下に鈍い「コ」字形突帯をもち、分厚い器壁を保ちながら直線的に断面「コ」字形突帯二条をめぐらす中位へ移る甕である。時期は中期後葉であろう。

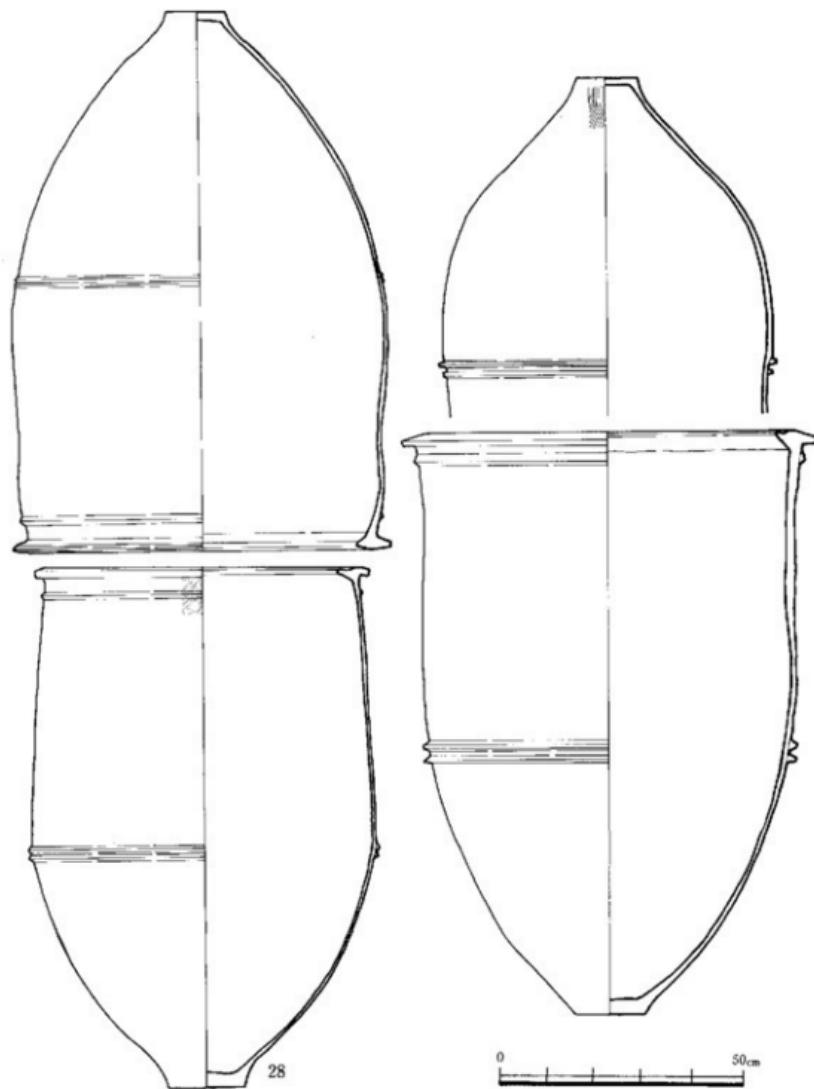
第28号甕棺（第37図） 上部は水平に外反するT字形口縁下に一条の三角突帯を廻らし、ほぼ直線的に伸びる胴部の中位に低い二条の三角突帯を走らせる甕である。下腹は横ナデで口縁平坦部がややへこむT字形口縁下に低い三角突帯を廻らせ、直線的に伸びる胴部は中位で最大となって二条の三角突帯を走らせ、ゆるやかに底部へ移る甕である。時期は中期中葉であろう。

図）は口径25cm。ほぼ水平に外反する口縁は外唇の伸びが良く、浅い杯をつくって円筒形の脚へつながる。時期は中期中葉か。下腹は外唇の垂れたT字形口縁下に近く三角突帯をもち、胴部中央より若干上にややくずれた二条の三角突帯をめぐらす。胎土、焼成とともに良好である。時期は中期中葉か。

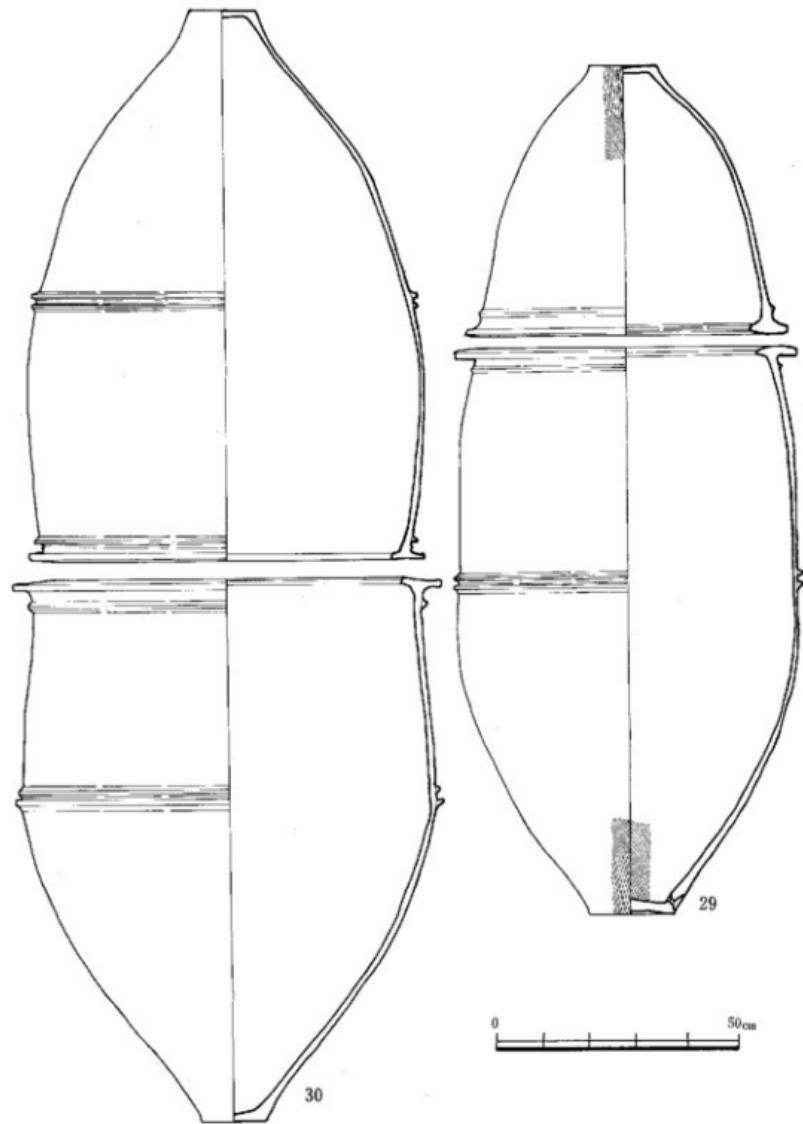
第6号甕棺（第36図） 上部は内面に弱い稜をもって外反する口縁をもち、胴の膨



第36圖 第31・32・16・13・6号漆棺実測図

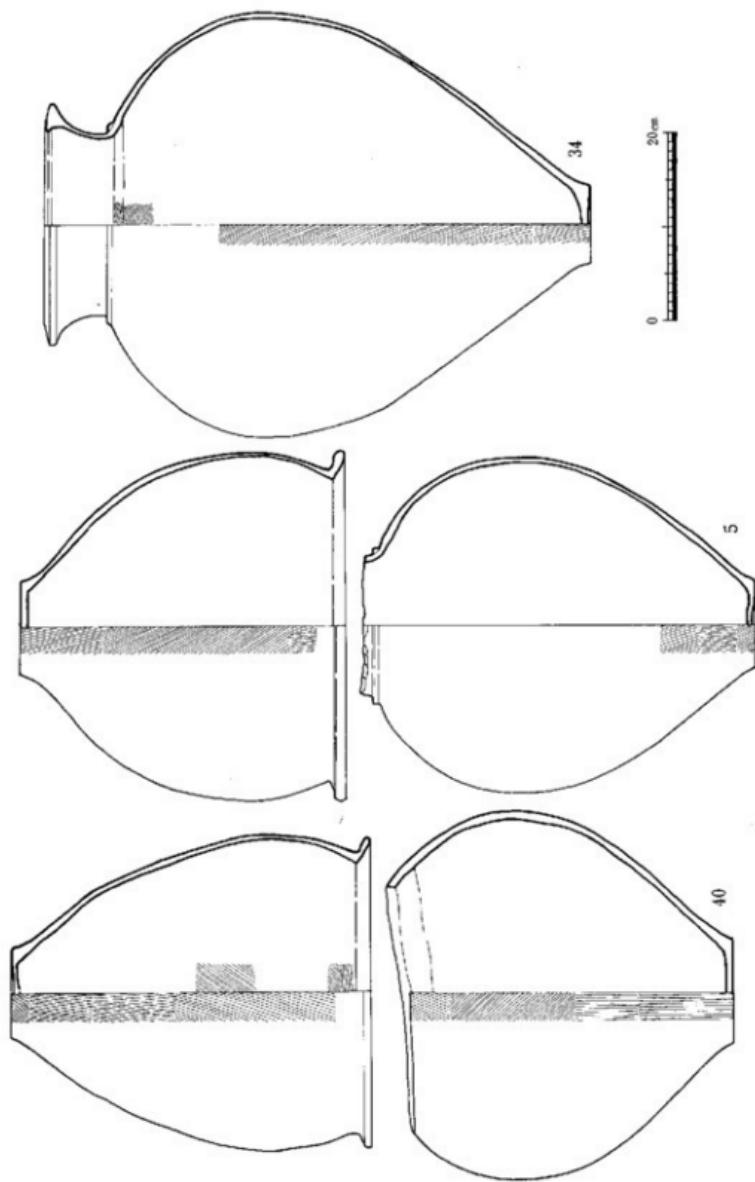


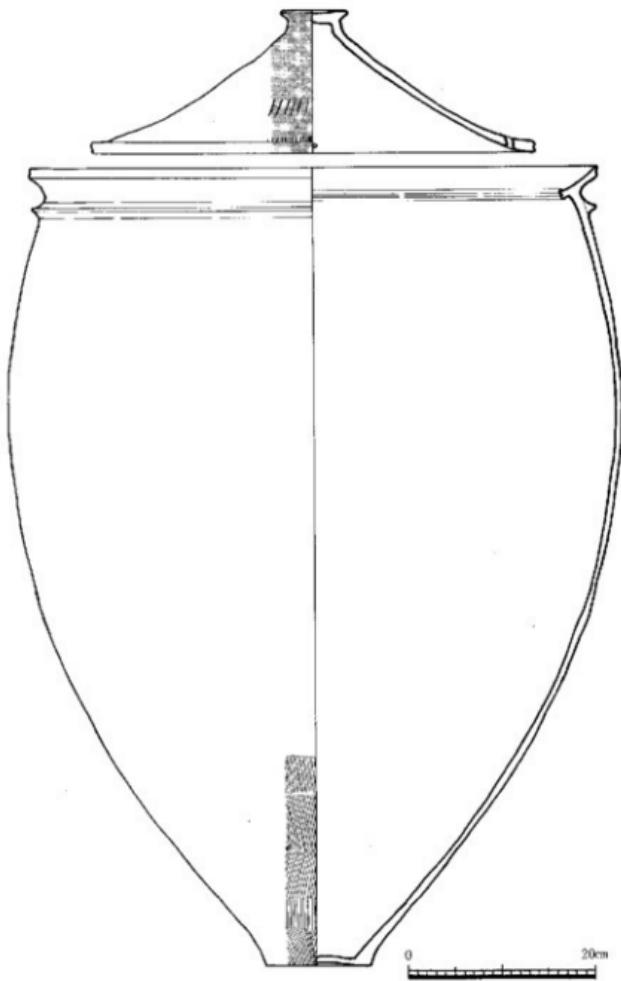
第37図 第28・24号墳実測図



第38図 第29・30号 瓦棺実測図

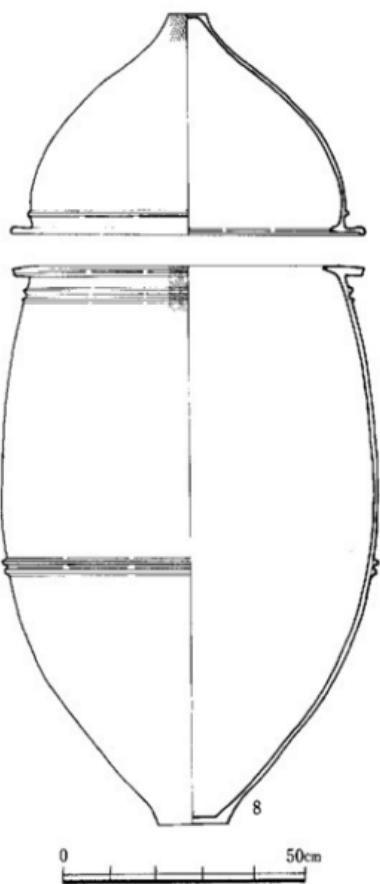
第39号 第5·34·40号漆棺形測圖





第40図 第11号墓棺実測図

第29号墓棺（第38図） 上蓋は器高に比べてやや口徑が大きく、肥厚したT字形口縁下に三角突帯をもつ蓋である。下蓋は外唇のよく発達したT字形口縁下に一条の鋭い三角突帯をもって、直線にかかる胴上部に高めの「コ」字形突帯二条を廻らし、中位で膨らみを増す蓋である。胴下部下端には焼成前穿孔痕が一個みられ、内部より施される。底部はややあげ底となる。



第41図 第8号斂棺実測図

時期は中期中葉。

第30号斂棺（第38図） 上蓋は水平に外反するT字形口縁に近く高い「コ」字形突帯を廻らし、胴部はやや膨らみを増しながら、胴腹部中位に走る二条の「コ」字形突帯に至ってカーブを変える壺である。下蓋は外傾し、横ナデのため口縁平坦部がくぼむT字形口縁下に三角突帯を廻らせ、胴部は直線的カーブをとりながら胴部中位よりかなり上位に走る二条の「コ」字形突帯に至り、ゆるやかに底部へ移行する壺である。時期は中期中葉か。

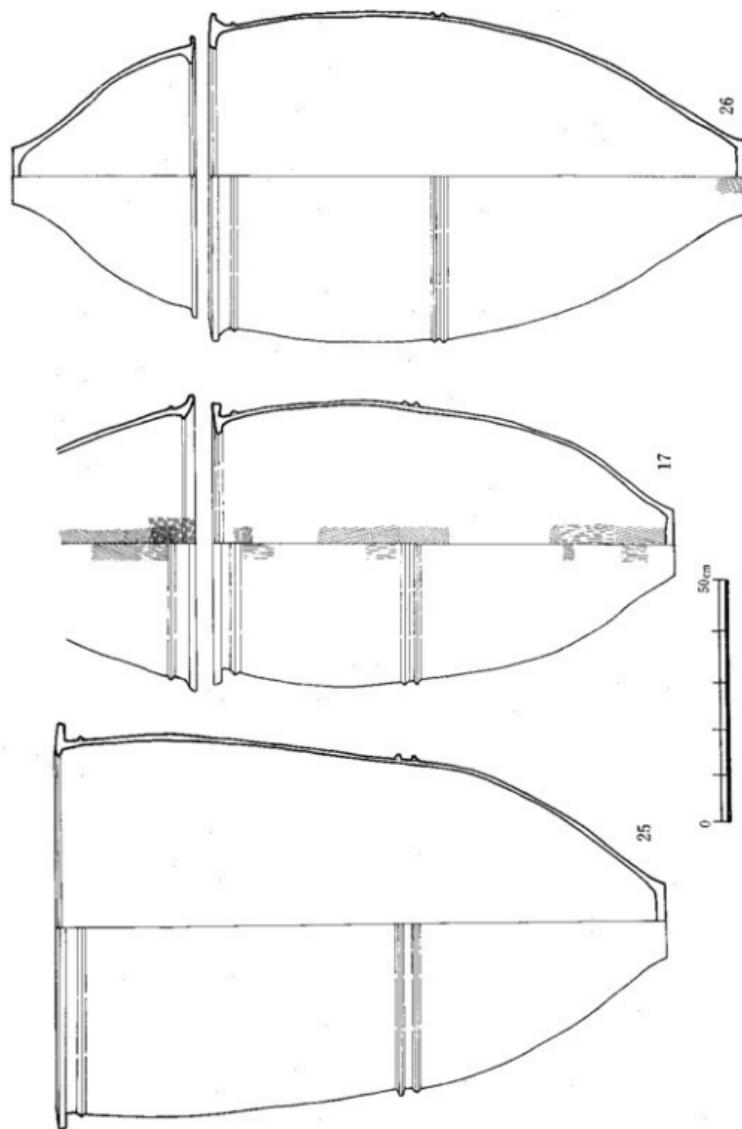
第5号斂棺（第39図） 上蓋は鉢に近い器形で、口縁は外反の急な断面「く」字形口縁に近くなり、内面に弱い稜をもつ。時期は中期末であろう。下蓋は頭部にやや上向きとなる段状の突帯をもち、胴は上部で球状に膨らむ壺である。底部はややあげ底となる。

第34号斂棺（第39図） 壺形土器は肩部がややくずれた段状の頭部突帯を持ち、低く朝顔状に外反した錐形口縁をのせている。胴部の最大径はかなり上部にあり、これから比較的急に底部へすぼまる。底径は胴径に対すればかなり小さい。時期は中期後葉であろう。

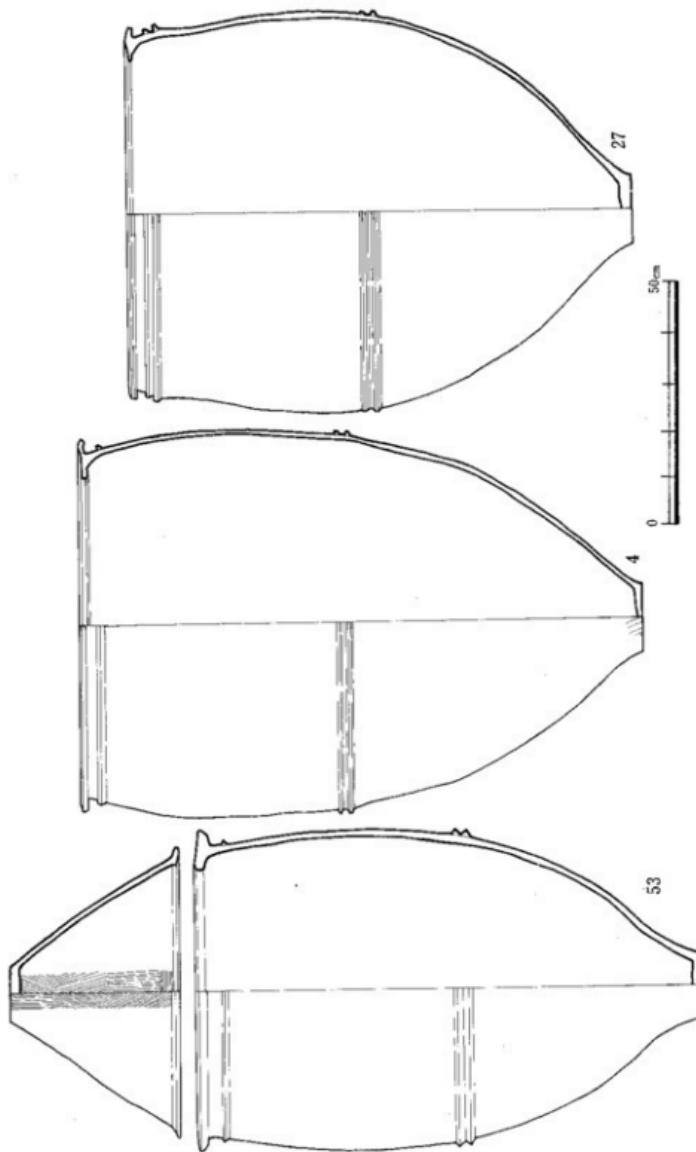
第40号斂棺（第39図） 上蓋は口縁部の外反度が著しい「く」字形に近い口縁断面をもつ壺である。口縁内面には弱い稜をもっている。時期は中期末であろう。下蓋は底径17cm・残存器高37cmをもつ壺である。頭部以上を打ち欠く。

第11号斂棺（第40図） 上蓋は精良な拿蓋形土器で、器面は研磨が苦しく、器表は全面丹塗りで、器面には上下二段の暗文が施される。口唇に近く焼成前の穿孔一個がみられる。下蓋は口縁部の外反度が著しい「く」字形口縁をもつ壺である。突出する内唇は角張っており、器形

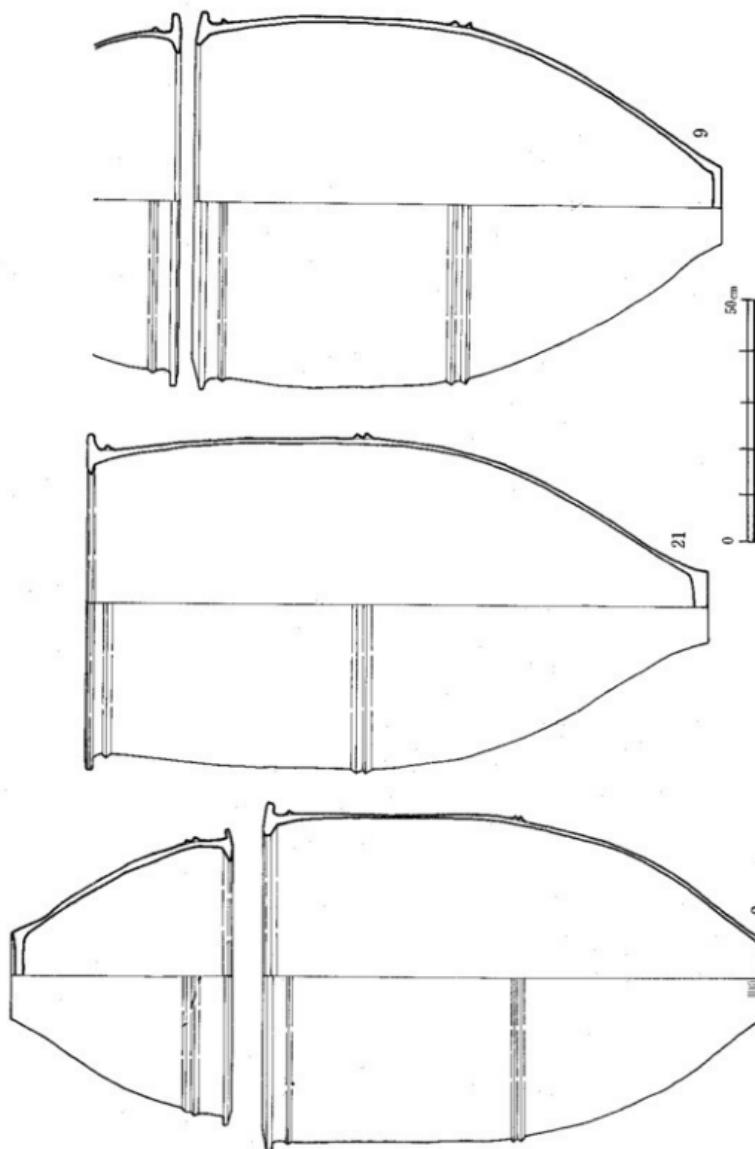
第41図 第17・25・26号鐵棺実測図



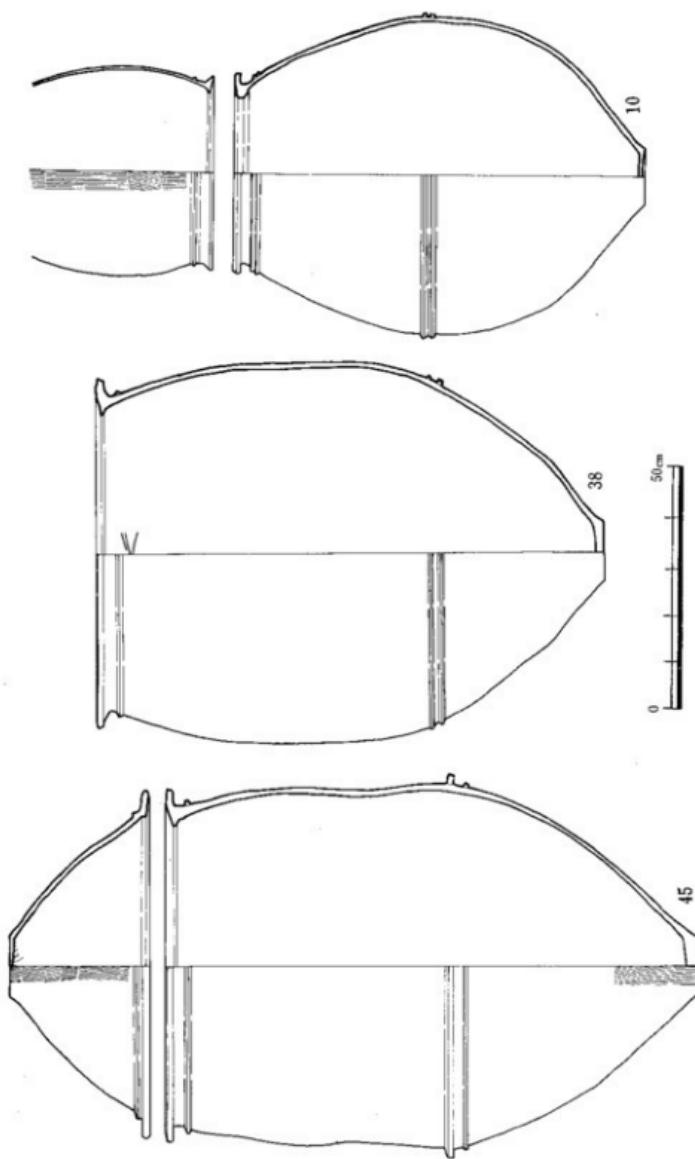
第4·27·53号櫛棺丈測圖

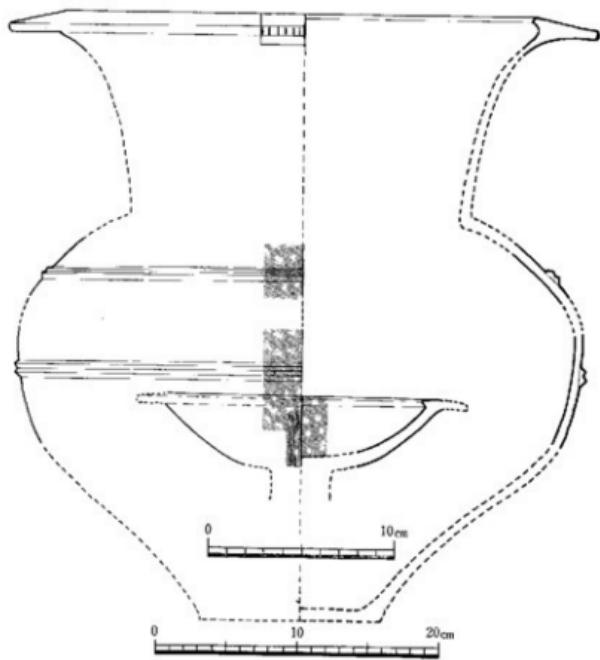


第44圖 第2・9・21號棺夫測圖



第45圖 第10·38·45号鐵棺素描圖





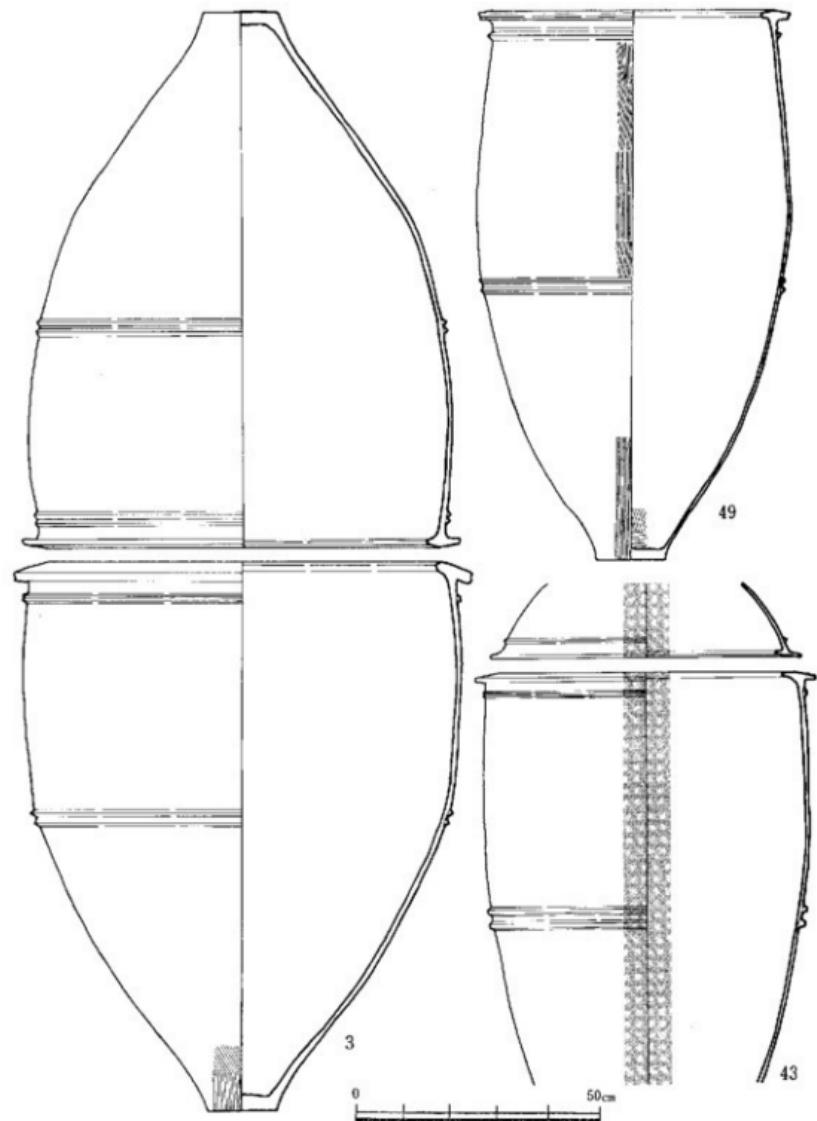
第46図 第45号墳墓址内出土土器実測図

は全体的にすんぐりとしている。時期は中期末頃であろう。

第8号壺棺（第41図） 上蓋は横ナデによって口縁平坦部がへこみ、外唇のよく発達した鉢である。口縁下に「コ」字形突帯を廻らす。口径に比して底部はかなり小さい。下蓋はほぼ水平に外反するT字形口縁下に二条の三角突帯を廻らす壺である。胴部はゆるく膨らみをましながら、胴部中位の断面「コ」字形突帯二条に連絡して、ゆるやかに径を小さくする。細めの口縁は内外唇の発達が良く、外唇はややくぼむ。時期は中期中葉か。

第17号壺棺（第42図） 上蓋は口縁内面に弱い棱をもって急激に外反する口縁下に一条の三角突帯をもつ鉢で、内面上半部は丹塗り、口径63.6cm。下蓋は口唇が内・外方に発達したT字形口縁下に三角突帯を廻らし、胴上部に三角突帯二条を走らす壺である。口縁外唇はやや肥厚して中くぼみとなる。時期は中期中葉か。

第25号壺棺（第42図） 口縁外唇の発達の良いT字形口縁下に一条の三角突帯をもち、直線的にやや径を小さくしながら、胴部中位よりやや下がる位置に断面「コ」字形突帯二条を走



第47図 第3・43・49号覆棺実測図

らせる型である。器形は全体的に外びらきとなり、肩部突帯下はゆるやかにすぼむ。時期は中期中葉か。

第26号壺棺（第42図） 上蓋は内外唇の発達が良好で薄くなる外唇をもつT字形口縁の鉢である。口径60cm・器高30cm。下蓋は口縁内唇の発達が良好なT字形口縁をもち、胴部中位よりやや上部に二条の三角突帯を廻らし、胴下部は細くしまりながら底部へ連絡する型である。口縁下および胴部の突帯は細く低い。時期は中期中葉であろう。

第4号壺棺（第43図） 上蓋は胴部に「コ」字形突帯二条をもつ型であるが、細片となり実測不能。下蓋は横ナデによって平坦部がくぼみ、内・外唇はともに肥厚する口縁下に上向きの「コ」字形突帯をもち、やや膨らみを加えながら、胴部の中位よりやや上位に上向きの「コ」字形突帯二条を廻らす型である。時期的には中期後葉であろう。

第27号壺棺（第43図） 口縁平坦部中位からやや重ねて中くぼみとなる外唇と、これより内傾して厚さを減じ、シャープな感じをあたえる内唇とをもつ口縁下に上下が不揃いの突帯二条を廻らし、膨らみを増しながら、胴部中位よりやや上がったところにある上下不揃いの「コ」字形突帯二条に連絡し、これより膨らみを保ちながら底部へつながる。口縁下の突帯は接近しており、いびつである。時期的には中期後葉であろう。

第53号壺棺（第43図） 上蓋は僅かに外唇の張り出しが強調される短小な平坦口縁から殆ど直線的に肉厚の底部へ連絡する鉢である。下蓋は非常に厚く、内・外唇の良く発達したT字形口縁下に高く鋭い三角突帯を廻らし、胴部は膨らみを加えながら、胴部中位の大さく鋭い二条の三角突帯に接続して、更にこれよりゆるやかに径を小さくして胴下部をつくる。時期的には中期中葉か。

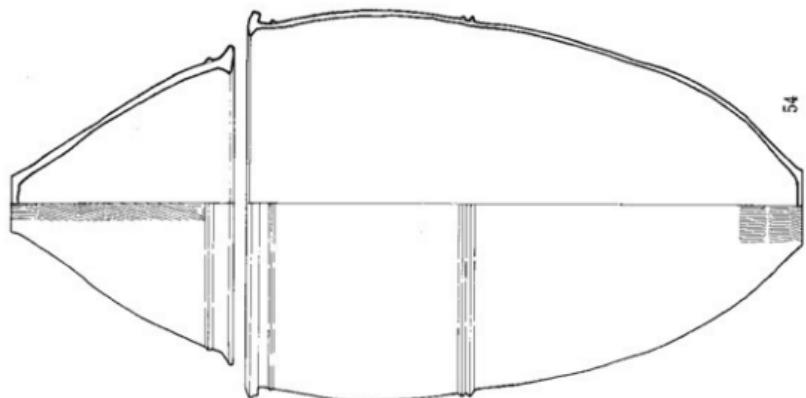
第2号壺棺墓（第44図） 上蓋はやや重れ、薄くなる外唇とともに発達のよい内唇をもつT字形口縁下にやや下って二条の三角突帯を施した鉢である。底部は径が大きくややあげ底氣味である。下蓋は内唇が肥厚するT字形口縁下に低い二条の三角突帯を廻らし、これよりほぼ直線的に伸びる胴部はほぼ中位に走る二条の三角突帯へ連絡し、これよりゆるやかに膨みを減じながら胴下部をつくる。底部はややあげ底となる。時期的には中期中葉であろう。

第9号壺棺（第44図） 上蓋は非常に良く発達したT字形口縁下に、シャープでない三角突帯をもつ鉢である。下蓋は内外唇とともに棱角をもってやや外傾するT字形口縁をもつ型である。口縁下には二条の三角突帯をもち、直線的にのびる胴部は中位で二条の太く、高い三角突帯に接続し、ゆるやかに径を減じながら底部へつながる。時期は中期中葉であろう。

第21号壺棺（第44図） ほぼ水平に外反して口唇の発達の良好的な口縁直下に太い三角突帯二条を廻らし、ほぼ直線的に伸びる胴部は胴部中位よりかなり上部に走る二条の三角突帯に接続し、しまりの良い下胴部をつくる。器形は細くしまった胴部にくらべて口縁部が巨大であり、器壁の薄さからも強調される様に思われる。時期は中期中葉であろう。

第10号壺棺（第45図） 上蓋は内唇が肥厚して内傾する短小な口縁部をもつ型である。口縁下には極細な、低い三角突帯をもち胴部の張りは弱い。下蓋は胴部の最大径が中位以下に片寄り、口縁に近づくに従って口徑を小さくしてすぼまる型である。胴部中位にはそれほど高くな

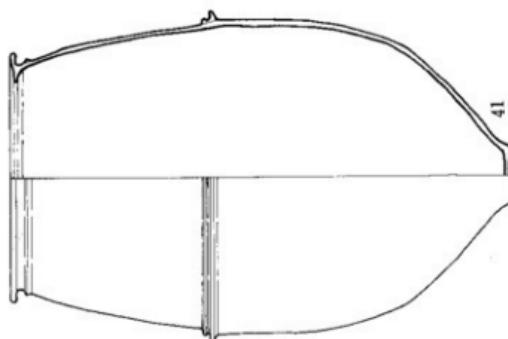
54



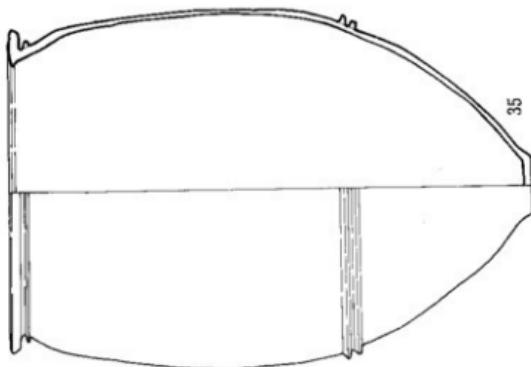
第48図 第35・41・54号縄棺実測図

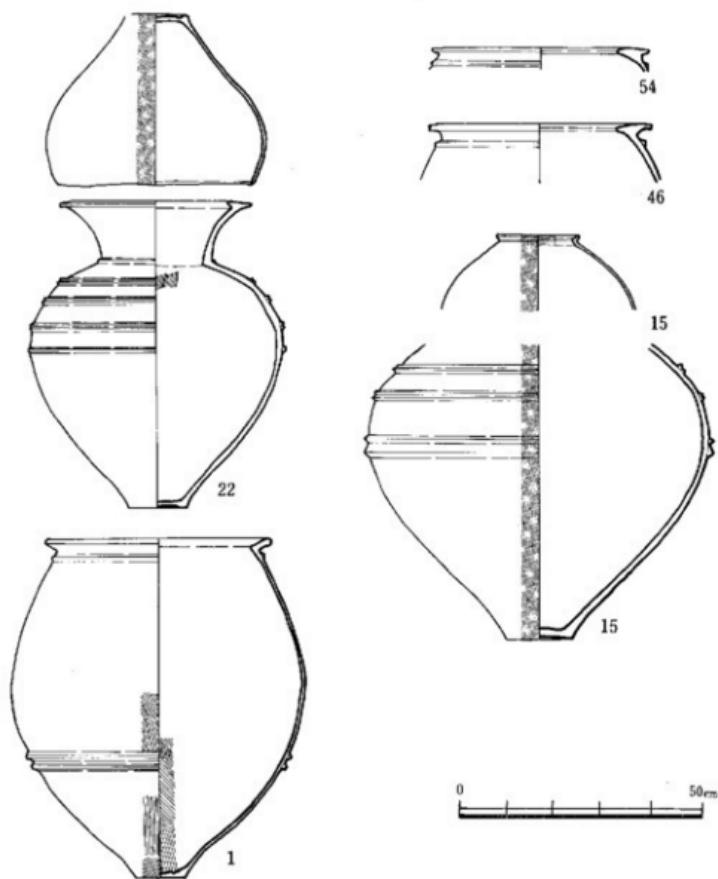


41



35

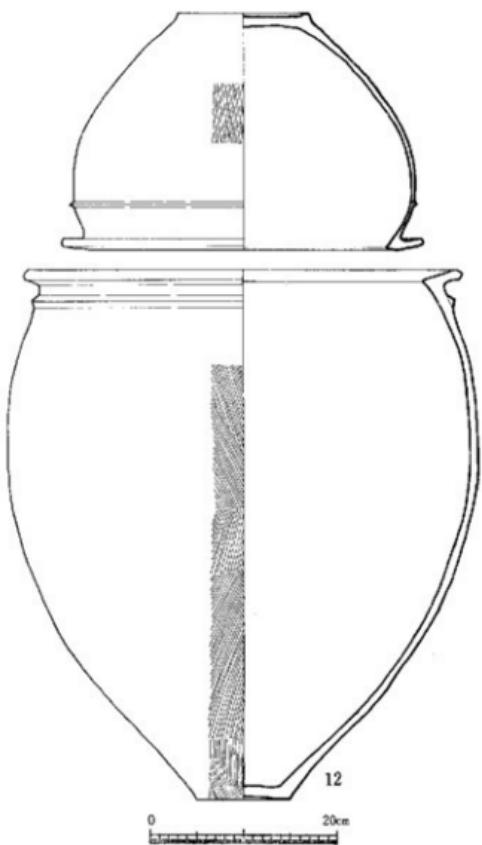




第49図 第1・15・22・46・54号壺棺実測図

い二条の「コ」字形突帯を走らせ、つよく肥厚する口縁内唇を打欠いた口縁下には、断面「M」字形に近くそれほど高くない突帯を一条廻らしており、重心の低いすんぐりした土器である。時期は中期後葉であろう。

第38号壺棺（第45図） ゆるく傾斜をもって外反する口縁は外唇をのばし、直下には一条の三角突帯が廻っている。これよりゆるやかに膨らむ胴部は中位よりかなり下った位置に走る二



第50図 第12号壺棺実測図

よりややあがる位置に三角突帯二条を走らせる壺である。胴は下部突帯より径を小さくしてすぼまる。器高114cm。下腹は肥厚して内外唇とも稜角をもたないまるい断面をしめし、口縁下に廻る「コ」字形突帯は中くぼみである。直線的にのびる胴部は中位よりやや上部にある二条の三角突帯へつながり、これよりすぼまる。時期は中期後葉か。

第43号壺棺（第47図） 上縁はシャープな平坦口縁下に鋭い一条の三角突帯をもつ比較的浅い鉢である。内外両面とも丹塗り。下腹は口縁の内部への突出が著しいT字形口縁をもつ壺で

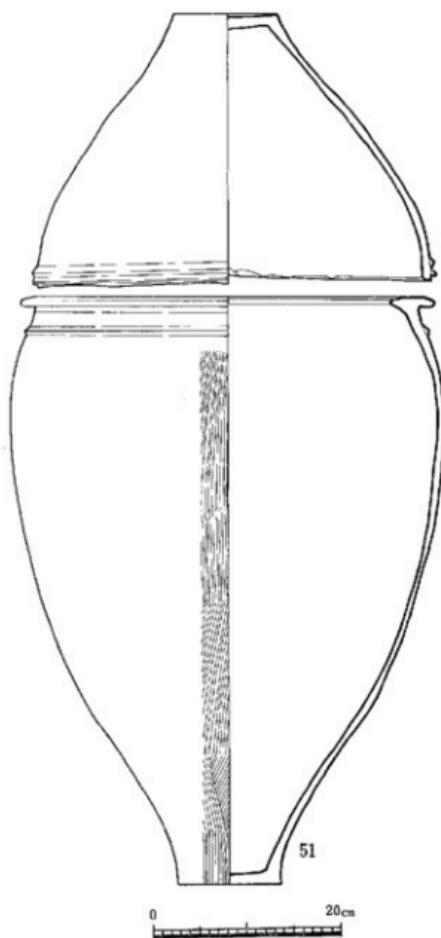
一条の「コ」字形突帯へつながっている。中くぼみとなる外唇にくらべ薄く鋭い内唇は棱をもっている。器形は部分的にみてもかなり退化の傾向をもっており、全体的にしまりがない。時期は中期後葉であろう。

第45号壺棺（第46図）

上縁はほぼ水平に外反する口唇の伸びた鉢であり、内唇は僅かにうかがえる程度で、口縁下の突帯はシャープではない。口径74cm・器高29.6cm。下腹は口縁の内傾が著しく、厚さを減じ中くぼみの外唇はよく伸びる。口縁下には「コ」字形突帯一条をめぐらし、これ以下は一度へこんでからふくらみ、上下不揃いの「コ」字形突帯へ接続し、ふくらみをもって底部へのカーブを変える。時期は中期後葉であろう。

第3号壺棺（第47図）

上縁はほぼ水平に外反するT字形口縁下に二条の三角突帯を廻らし、胴腹部中位



第51図 第51号壺棺実測図

摺曲する口縁下に低い三角突帯一条を廻らし、直線的に張る胴上部は胴部中位よりやや上に走る上下不揃い「コ」字形突帯へつながる。胴上部は胴部突帯より上がすぼまり、やや薄い底部はあげ底となる。時期は中期後葉であろう。

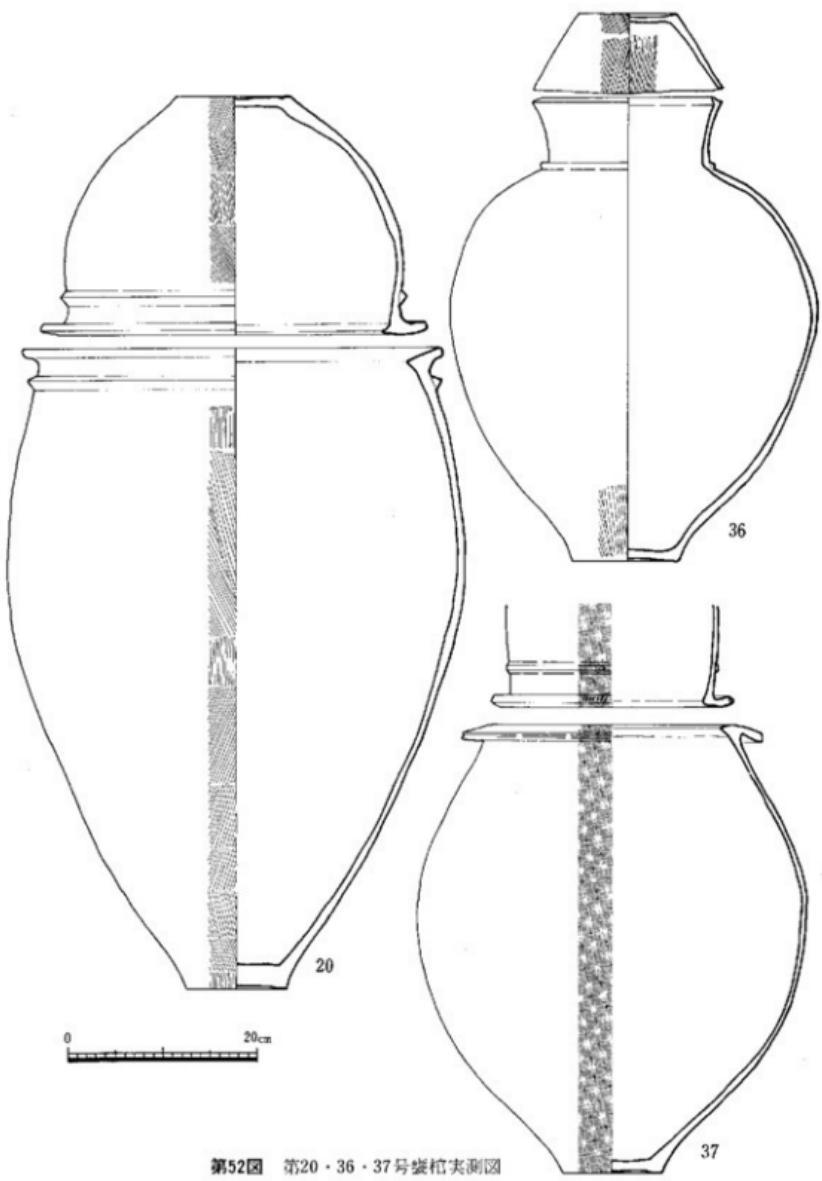
第54号壺棺（第48図）上部は肉厚な口縁下に低く太い三角突帯一条を廻らし、器壁の厚い胴部は殆どふくらみをもたず直線的に底部へつながる鉢 使用する。接口使用壺（第49図）は口径46

ある。口縁下には低い複合三角突帯を一条廻らせ、ほぼ直線的となる胴部は、「コ」字形突帯二条につながり、殆んどふくらみを増さないまま底部へつながると考えられる。時期は中期中葉であろう。

第49号壺棺（第47図） 水平に外反する口縁はT字形となり、口縁下に一条の三角突帯をめぐらす。胴部の突帯はほぼ中位にあり、二条の細くて低い三角突帯をなしている。口縁下から胴中位への膨らみはゆるやかでほぼ直線的となり細身である。底部はいちじるしく厚く、内面はナデにより凹凸をなす。時期は中期中葉であろう。

第35号壺棺（第48図） 第35号は、ほぼ水平に外反する口縁外唇が棱角的となり、口縁直下に断面「コ」字形の垂れる突帯一条が付される。器壁の凹凸をくり返して、ゆるやかな張りをもつ胴は中位よりかなりさがる位置に断面「コ」字形を呈する二条の垂れる高い突帯に連絡してずんぐりとした胴下部をつくる。時期は中期後葉であろう。

第41号壺棺（第48図） 第41号は口縁平坦部の横ナデが頭著で、



第52図 第20・36・37号壺査実測図

cmを測り、口縁がすぼむ形態となろう。下縁は肥厚する外唇をもつ短小な口縁下に三角突帯をもち、胴部に走る二条の三角突帯を器高の劣付近の高い位置に持つ壺である。時期は中期中葉より下るか。

第1号壺棺（第49図） 急激に外反する口縁は「く」字形を呈し、内側は稜をもっている。口縁下の三角突帯は口縁直下にあがっている。これより径を大きくして直線的に伸びる胴部は上胴部中位においてカーブをかえて中位よりやや下った位置に走る二条の低い「コ」字形突帯へつながる。時期は後期初葉であろう。

第15号壺棺（第49図） 第15号は胴部最大径のあがった壺で、胴上部に二ヶ所「M」字形、下部に二条の三角突帯をもっている。口頭部以上は全く残さず打欠かれており、破片を全く残さない。胴部突帯は各れも貼りつけであり、棱角をもっている。器表は全面丹塗り。混在の異個体口縁（第47図）は口径20cmをはかる丹塗り磨研の無頭壺である。

第22号壺棺（第49図） 上縁は肩部以上を打欠いた器表丹塗りの壺形土器であり、胴部の最大径は低い。下縁は頭部状にひろがる頸に肥厚した動形口縁をのせる重量感のある壺形土器である。頭部突帯は断面段状となり、上部に集中した胴部突帯は3個が中央の窪む「M」字形をなし、下端のものは「コ」字形となる。時期は中期後葉であろう。

第46号壺棺（第49図） ゆるやかに内傾する口縁は肥厚して、外唇はやや垂れ、肉うすで稜角を持っている。口縁直下にあまり高くない、太い三角突帯一条を廻らせる。口縁のしまりは良く、胴部はかなり張ると思われる。

第12号壺棺（第50図） 上縁の鉢形土器は口縁外唇の伸びは頭著で口縁下の突帯は低く纖細である。底部あげ底となる。下縁は丸い口縁外唇から内傾して鋭い稜線を内面にもつ壺である。器形は全体にズングリしており、変化が少ない。口縁下の突帯はあまり高くない。時期は中期後葉であろう。

第51号壺棺（第51図） 上縁は底径11cm・突帯部径44cmをはかる壺の突帯部以上を欠く。突帯断面は「M」字形。黄褐色を呈し、焼成不良。下縁は平坦口縁下に低い三角突帯を廻らし、全体的にスマートである。

第20号壺棺（第52図） 上縁は外唇の伸びの良い、鉢である。下縁は急激に外反して、内面に弱い稜をもつ断面「く」字形に近い口縁下に一条の三角突帯を廻らす壺である。

第36号壺棺（第52図） 上縁は黄褐色を呈し、胎土、焼成とも不良な壺底部で径10.4cmをはかる。下縁は、段状突帯から弱くひらく短い頭部をもち、口縁端は内側へ僅かに張り出しをみせる壺である。時期は中期後葉か。

第37号壺棺（第52図） 上縁はほぼ水平に外反する口縁下に「コ」字形突帯をもつ壺である。表裏とも丹塗り。口縁径25.6cm。下縁は口縁外唇がたれ、内側は鋭い稜をもつ無頭壺である。時期は中期後葉であろう。

第7号壺棺（第53図） 上縁は外唇の発達が良く、ゆるやかに内傾する口縁をもつ壺である。下縁も外唇が良く伸び、やや垂れる口縁をもつ壺である。時期は中期中葉であろう。

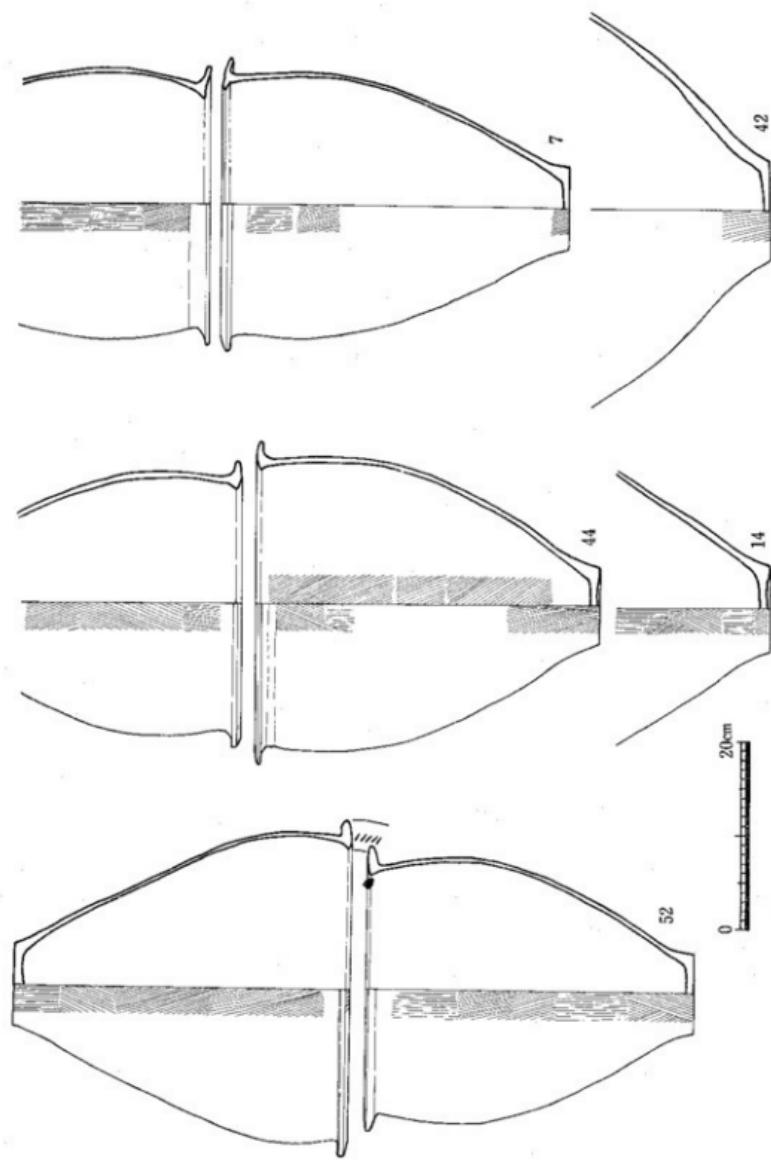
第14号壺棺（第53図） 器色は暗い赤褐色を呈し、胎土、焼成とも余り良くない。底径9.2cm。

第42号彫棺（第53図） 器色は黄白色を呈し、胎上焼成ともに良好。体部に煤の付着が著しく、日常土器の転用である。胎土、焼成ともに良好。

第44号彫棺（第53図） 上巻は水平に外反し、外唇の発達の良い口縁をもつ巻である。下巻は上巻と同様外唇がよく発達した巻である。時期は中期中葉であろう。

第52号（第53図） 上巻は器壁の非常に薄い胴部に平坦口縁を截せる巻である。口縁平坦部中央に籠状工具によって5本の直線文が一ヶ所描かれる。下巻は上巻と同様な口縁をもつが肥厚して丸くなる。時期は中期後葉か。（横山邦繼）

第53圖 第7·14·42·44·52號鐵船測圖



③ 土塙墓

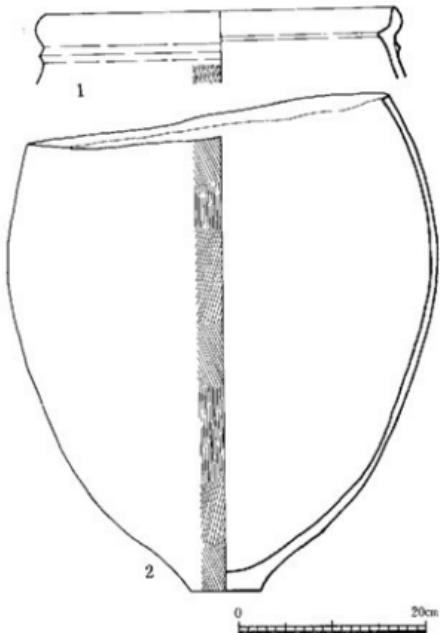
土塙墓1号（第21図）長さ150cm・巾77cm・深さ60cmをはかる隅丸長方形ピットである。内部には木棺の痕跡、土器類の伴出はなかった。19号壺棺および西部溝との間には切断関係がある、いずれもこれを切っており、このことから時期的には中期後半より新しい所産であろう。

2号は後世の削平がはげしく壁を十分残していない。長径110・短

径65cmをはかる隅丸長方形ピットである。時期を決定する資料はなかったが、南隅が38号壺棺の墓塙によって切られ、時期的には中期後半以前と考えられる。長軸はN-20-Eに位置する。

土塙墓3号（第27図） 3

号は墓域東端と切断関係にあり、これを切る。長・短径110×90cmをはかる隅丸長方形ピットであり長軸はS-73-Wに位置する、内塙西側の小口には胴下部以上を打欠く變形土器を使用する。また側壁に二対のつくり出し部分があり、内部に灰色粘土が充填され、断面図でみると、下端レヴェルは小口につかわれた變形土器の上端とほぼ一致し、平面的には同じレヴェルに灰色



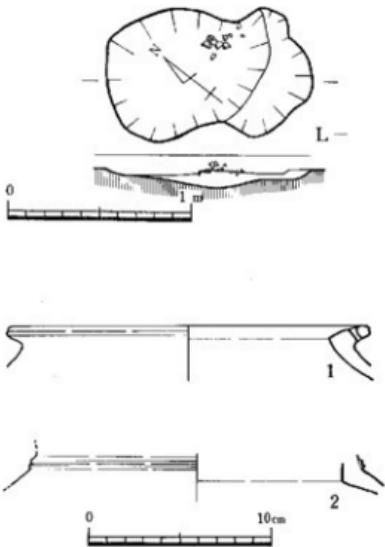
第54図 土塙墓第3号出土土器

粘土の塙がりがみられ、このことからつくり出しは内塙蓋を支える横木の固定部分かと考えられる。また側板の存在は観察できなかった。墓塙より變形土器口縁部が一個出土した。

土塙墓3号出土土器（第54図）1は墓塙中より出土した口径38cmの變形上器である。口徑外反は急でほぼ直立して、「く」字形となって突堤は口縁に近い。暗褐色。胎土・焼成不良。時期は後期初頭であろう。2は小口に使用した壺である。胴下部の膨みは大きく、中期以降の時期を考えさせる。赤褐色、胎土・焼成とも不良。胴上部に煤の付着がみられ日當土器の転用と考えられる。残存器高51cm。

④ 祭祀遺構（第55～57図）

壺棺墓地内では14号壺棺に近接して一ヶ所、33号壺棺の西に近接して二ヶ所の丹塗り破砕土



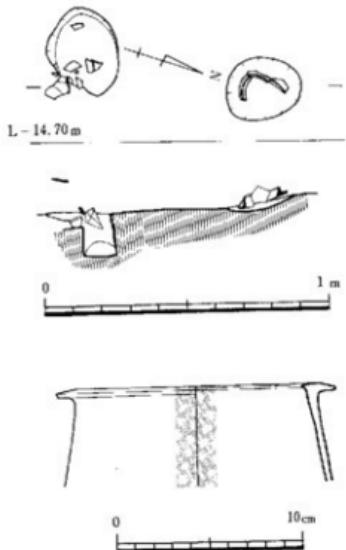
第55図 丹塗り土器ピットおよび出土土器

ピット中に丹塗りの無頸壺、壺と二個体分の破碎された土器片をもっており（第55図）破片は細かく碎けて全部を残していない。両土器とも焼成良好で無頸壺は口径24cm、壺は複合三角突唇をもち、頸部径21cmを測る。また後者は前期溝の埋没したあとその南端直上に営なまれており丹塗り變形土器（第57図）一個体分がまとめられている。溝を切る方形遺構内には土器の混入は全くみられず土器と関連をもつとは考えられない。出土土器は外唇の発達がよく口縁下および膨らむ剣部中位に各一条の複合三角実帯をもつ變形土器で中期中葉に位置づけられよう。また両遺構の南北に換して時期不詳のピットがみられる。これは径60cm・深さ15cm内外をはかる円形ピットで、内部には焼土と小木炭片の堆積がみられ、周囲の壁は赤く変色している。

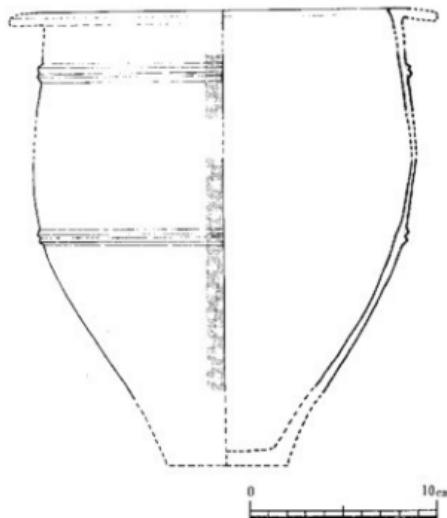
器群をもつ地点がみられ、出土状態および墓地内において占める位置関係からこれを變形墓地に対する祭祀行為と考えた。14号變形棺の北に隣接する例（第56図）では二個体にあたる丹塗り土器がみられるが、両者を一括すると考えられる様なピットの存在はない。

北に位置する小形變形土器（第56図）は口縁外唇の発達の良い丹塗り磨研の土器であり、破碎された口縁上端を下に向ける。またこの變形土器に近い黒色上層中からは栽培種らしい植物の炭化種子が数粒検出されたが供獻内容物と直接関連があるものかどうかは明らかでなく、混入の可能性が強い。次に33号變形棺西側の二例（第55・57図）がある。前者は長・短絆が110×80cm内外をはかる不整形ピット

（横山邦謙）



第56図 丹塗り土器群



第57図 破片土器実測図

⑤ 溝（第9図） 弥生時代に位置づけられる溝状遺構は調査区の西部域をほぼ南北に横切り、両端において立あがりをみせ、残存長16m、巾60~70cmを測る。溝の性格については明らかではないが、溝底より第58図にみる土器が出土した。1は暗い黄褐色を呈し、あげ底の内面に指調整痕をもつ壺形土器である。底径8.5cm。2は僅かに口唇が外反し、細かい口縁から急に器壁を増してひらく頸部につながる壺形土器口縁で黄褐色を呈し、焼成不良。時期は弥生前期に位置づけられよう。

（横山邦雄）



第58図 溝底出土土器

⑥ 人骨及び貝輪

§ 人骨

全般に保存状態は頗る不良であるので、知り得た僅かばかりの推定要項を各人骨ごと列記するにとどめる。ただし、貝輪を伴った43号人骨のみは別に特記した。

19号妻棺入骨：男性、成年末期。棺は大型の須次式、上鉢、下蓋で、頭片は上鉢にあった。両側大腿骨の骨体部が残り大きい。残存歯は8765及引

29号妻棺入骨：性不明、成年か。大型の須次式、上鉢、下蓋で、少量の頭片が上鉢内から出で、大腿骨片も少量ある。

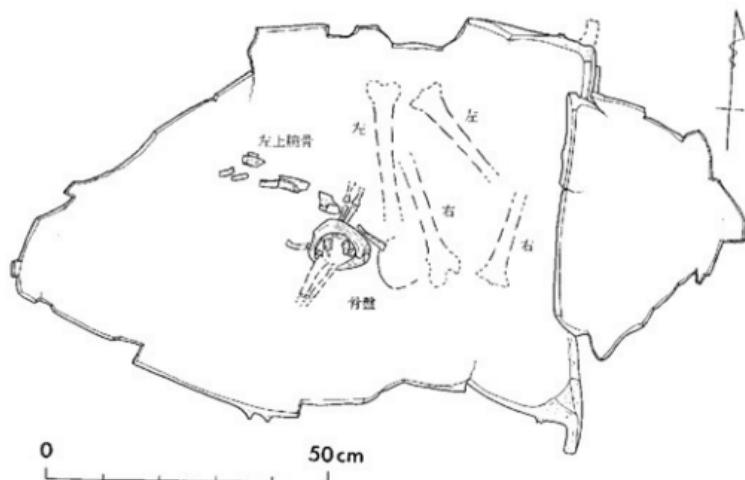
41号妻棺入骨：男性、成年。大型の須次式、上蓋・下蓋の棺より出で、頭片は上蓋内にあった。大きな左側大腿骨と右胫骨の骨体部が残存。

43号妻棺入骨：別記。男性、成人。53号妻棺入骨：女性、老年。棺は典型的須次式で上鉢、下蓋である。頭蓋外板少量と、丸味を帯びてやや小さい左右の大脛骨と左側の胫骨いずれも骨体部が残存。歯は6と3が残り咬耗が著しい。頭片は上鉢内より出土。

54号妻棺入骨：女性、成年か。男性とすれば若年。棺は大型の須次式、上鉢、下蓋である。小量の頭片は上鉢より出土。他に左側大腿骨の骨体部が残り、大きさは53号人骨よりやや小さい。

§ 43号妻棺入骨と貝輪との出土関係（第59図、P. VII-1）

この妻棺は大型の下蓋に鉢型土器が上蓋として使用してあった。そして上下ともに内外壁は丹塗磨研で仕上げられていた。人骨残片のおおよその配置からみて、遺体は先ず下蓋に頭を先



第59図 諸図43号妻棺入骨・貝輪出土状況

にして収容、仰臥屈位の姿勢で葬られたと判断される。もっとも、骨の保存状態は頗る不良、侵入した軟泥に覆われ、辛うじて四肢長骨の大なるものの断片からの推断である。折悪しく夏の暴雨期にあたり、現場での人骨の潤拭露出は不可能に近かったので、壇もろとも一括して研究室に持帰り自然乾燥を待って処置した。

両側の上肢骨は、肘を軽く曲げた状態で足方に伸び、下腹部のあたりで手首を交叉し、右手の方が上位にあった、貝輪は右手首附近で、横置された下葬全體ではほぼその中央に存在した。大きな貝貝を縦切にしたもので、後記の如く原材料はゴホウラである。その出土状態の位置方向を記述するには、便宜上、巻貝に使用される用語を利用して貰う。すなわち、螺背を上に、殻軸の線は壇の中軸線に対してやや傾斜し、螺塔部を人骨の左肩に向けていた。全体の輪廓がアルファベット大文字のD字形に近い形をとる此の貝輪の、比較的直線的な近縁（以後、掌側⁽¹⁾辺と呼称する）の上に、恰も箸置に一对の箸を置くように、右前腕の橈・尺両骨の遠位半が乗っていた。左も前腕は壇内位をとっているので、桡骨下半は螺塔側に、尺骨のそれは前溝側に、両骨が並置されていた。後で貝輪を精検して判った事だが、掌側辺上縁には腐蝕の著しい2部分があり、ために側面觀はW字状の波形を呈する。これは貝輪に通された前腕軟部の腐敗によって生じた有機酸と、前腕構成両骨の重みによって、特にこの2箇所が他と比較して著しく腐蝕されたためと解されよう。断って置くが、貝輪は沈下して壇内壁に密着し、いかに精査しても前腕骨が貝輪内側辺の下に介在したかのような形跡は認め得なかった。貝輪の縫合への密着は、PL-XVIIの2に見られるように、貝輪下縁の腐蝕によって剥落した白粉が点々と壇壁に残り、おのずから貝輪の存在位置と輪廓を示していることからもうなづけよう。上記から前腕は貝輪の螺背から螺腹へ抜けて挿入されていたことが判るが、さらに貝輪内孔の泥を慎重に除去して行った結果、先ず始めに右手根舟状骨が内孔のはば中央附近で、次いで有頭骨・有釣骨が、相互の自然な連接関係からあまりズレない状況で前溝側に現われた。然し、この3個の右手根骨には全体として、手根部を強く掌側に屈曲させたような、自然の融解によると思われる転位が見られ、有釣骨の対三角骨関節面が上を向き、その上に貝輪殻軸の前溝側端が乗っていた。他の附近諸骨は殆んどその形骸を抑えることは不可能であったが、辛うじて右小菱形骨掌側半と左三角骨を貝輪内孔の螺塔側に摘出した。この両骨とともに前記3骨と較べ保存状態は不良であった。左側の三角骨が貝輪内から出たことは、いさざか意外であったが、筆者等が現場に駆けつける以前に貝輪周辺は発掘小道具の手が加えられて居り、俄爾で泥水が壇内に流入するという不祥事もあったので、この左三角骨だけは或いは紛れ込みではないかと思う。

この一事はさて置き、貝輪・前腕二骨・手根三骨の相互の出土位置などから総合的に判断すると、貝輪の装法は、右前腕を螺背から螺腹へ抜けて挿入し、しかも螺塔側が橈側（母指側）に前溝側が尺側（小指側）に来るようになされていた事が判明する。この装法は、筆者の経験した土井ヶ浜・立岩・金隈遺跡出土例と同様である。もっとも、土井ヶ浜例は、後述する如く、貝輪としての利用部が殻口面に対し直角に近いので、挿入の向方だけは外唇側からということになる。

§特に43号櫻棺人骨について（男性、成人）

貝輪を着装していたこの人骨は特に重視してその性状を述べるべきであるが、残念なことに、満足に残されていたのは貝輪によって化学的に保護されたと考えられる前記の右側三手根骨のみである。これらから性別・年令を推定することは頗る困難なことではあるが、下記を有力な理由として、性別のみは不明のまま放置するよりむしろ男性とした方が妥当であろう。

すなわち、一見してこの三手根骨は大きい。（PL XIX）で、上段に並置して対照とした現代人（本籍山口県、男性、28才）よりも大きく有鉄骨釘の発達も良い。手根骨の計測的比較項目には種々あるが、何分にも豆粒ほどの小骨群であり、計測手技の上から無難と思われる舟状骨最大長一項目を取上げて参考までに既知の成績との比較表を掲げる。（表2）これからも判る通り、舟状骨最大長には性差が見られ、一般に男性が女性より大きく、しかもこの43号櫻棺人骨のそれは比較群男性の最大値を示している。従って筋強の男性と見るほうがむしろ妥当であろう。

ただ、年令については確たる推定の根柢が見当らない。手根骨の化骨の度合、収容された脛の大きさなどから、完全に成人した個体と考えられるが、成年（Adultus）なるや熟年（Maturus）なるや決定しかねる。老年（Senilis）とみなすべき変化は認め得なかった。

§貝輪（第60図、PL XIX）

この貝輪は前記した如く、43号櫻棺内に収容された

男性成人と思われる人骨の下腹部より、右前腕手首に着装された状態で出土した。

着装時に於て手首側（遠位）に向う貝輪の辺縁は、ゴホウラの体層腹側に当るが、沈下して要壁に密着して出土し、接触部の腐蝕が特に著しかった。反対側すなわち殻背側に当る部分は概して保存は良かったが、黒褐色の汚泥が固着し水洗しても除去不能であった。外面には丹かところどころ見られ、これは貝輪に塗布されたものではなく、陥ち込んだ要壁内面の丹が附着したものと思われる。

この貝輪がゴホウラ製であることは、説明の都合上裏付けが後になったが、その大きさ、厚さ、殻軸の対する殻の輪廓などあらゆる点で符合し、自信を持って主張し得る。また勞生時代における他遺跡からの出土分布からしても当然のこととしておかしくない。原材となったゴホウラは南島産のものでも最大級で殻長約16cmを測るほどのものであったろう。この事は筆者の手許の沖永良部島産のものと比較してほぼ察しがつく。利用部位は、外唇部を除いた体層の部分を、殻口面にほぼ平行で、殻軸を挟んで幅広く活用したものである。図-61の如く螺旋部は次体層までを利用し、それより殻頂に到る間の螺旋塔は縫線に沿い円く（正確には螺旋を描く）打落してある。前溝側は末端より約4cmほどのところまで殻軸にはば直角に擦り落し整美な凹形を見せている。着装時に手背側にくる弯曲の強い背側辺は高さ55mmを測り、手掌側にきて比較的直線的な掌側辺は29mmを測る。

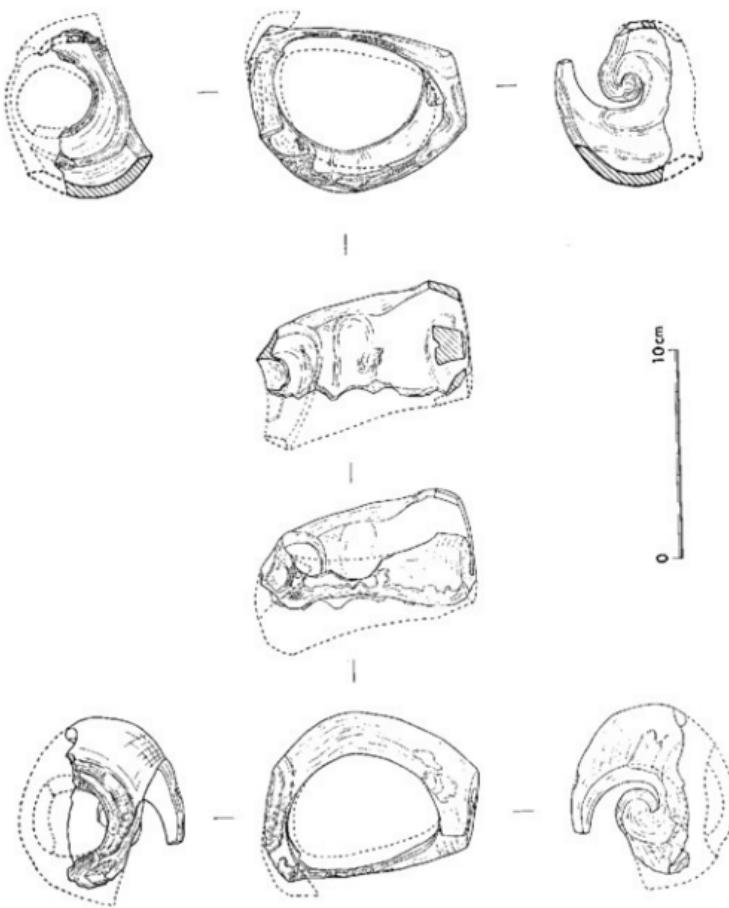
これらの値は、腐蝕の強かった箇所を、あらゆる点から検討を加えながら慎重に復原した上で

表2 舟状骨最大長（右側、単位mm）

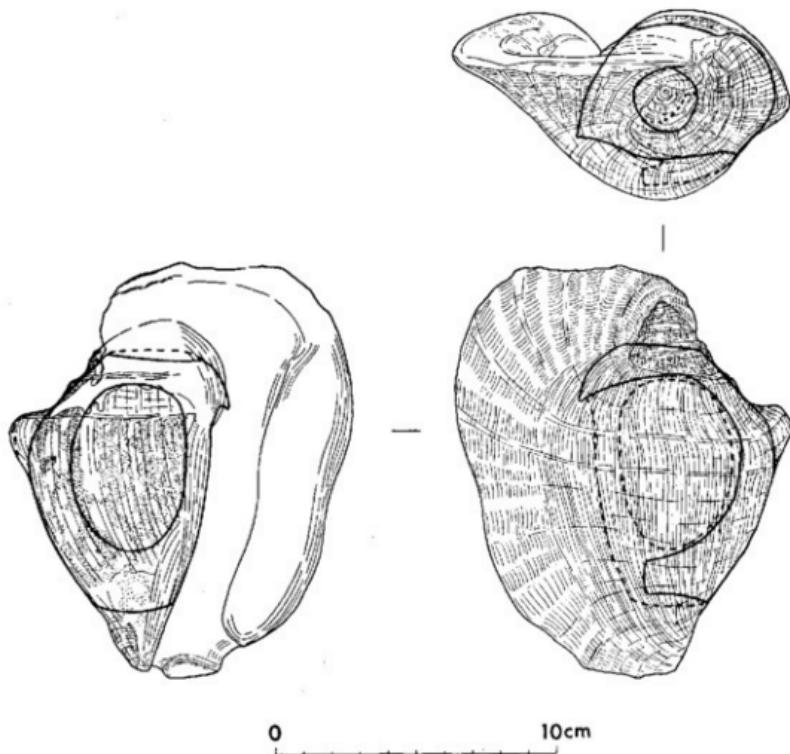
諸國43号櫻棺人骨 33mm

比較群(著者)	性別	個数	平均値		標準偏差		最大	最小
			男	女	男	女		
現代北陸日本人	男	39	27.69	1.79	32	24		
(森麻)	女	24	24.29	1.77	29	22		
現代関東日本人	男	71	27.31	2.31	33	20		
(加藤)	女	41	24.08	1.81	28	21		

図60 蟹道43号人骨着装貝輪某剖面



の推定値である。この貝の肩角には特徴ある強大な一瘤があり、これから外唇へ伸びて、蚌背を思わせる、螺肋の隆起が走るが、貝輪の背側辺に残るべきこの瘤は擦り落されており、斜に走る隆起だけは注意深く見ることによって認めることが出来る。また螺背部前溝端寄りが外唇へ向って伸びているのをなるべく残すよう加工している点は土井ヶ浜例に似るが、尖端は截断されている。着装時に肘側にくる内孔は最大長径76mm（殻軸に沿った径は73mm）、これと直角に測った最大幅径は59mm（殻軸に直角に測った最大幅径も59mm）、手根側（この側は腐蝕が強いの



第61図 諸岡出土貝輪の取り方

で、以下はいずれも復原後の推定値) 内孔の最大長径70mm(全長66mm)、最大幅径57mm(全長57mm)であり、肘側に広く手根側に狭く、前腕の形態に適合し、この装法が正しいことが裏づけられる。

なお、この貝輪の型が盤口面にはほぼ平行な利用の仕方であると判断した根拠は、蝶塔を半分埋めて走るゴホウラ特有の袖の縫線が蝶唇と殆んど直交する部位を、貝輪肘側面観の左上隅に確認し得たことであり、次に内唇滑層の被覆層理を貝輪掌側辺に痕跡的ながら探し得たことがある。また背側辺における前記の隆起の走向も有力な参考となった。

ところで、この貝輪の持つ考古学的意義についてであるが、いずれ後の機会に西南日本における弥生時代の巻貝製貝輪の問題を総括的に取上げる予定であるので、此處では諸岡貝輪に直

接附隨した事だけを略述するに止めたい。

この貝輪は、從来知られているものでは、上井ヶ浜 124号人骨着裝例に全体的形態は最も近似している。ただ殻口面に対する利用角度が違うだけである（PLATEの2）また巨視的には同一遺跡と見てよいと思われる現在の諸岡の渡國神社境内から昭和28年に出土した旧例の貝輪の型は、佐賀県（吉野ヶ里・切通）熊本県（年ノ神）、長崎県（三会）などでも知られて居り、筆者の模造実験では同じくゴホウラ製であり利用角度もほぼ同じであるが、ただ側縁の高さが低く、蝶塔側の円形孔（正しくは螺旋形）の螺背側周縁が切れて連がらない。全体の輪廓は似ているが、一見したところ著しく違った型として目に映る。

諸岡新例と旧例の出土地点の間には水平距離で約80m・高さで新例が8m低いへだたりがあるが、両者ともに弥生中期に属する須玖式壺棺より出で、旧例がやや古いかと思われるにせよ大差はない時期のものと考えられる。

從来、新例の如き側縁の高い型は、やや遅って弥生前期末のものが多いので、形式上は古い型と考えられていたが、必ずしもそうとは言い切れず、やや下って中期にも出現を見たわけである。この点は、弥生埋葬遺跡相互の編年の上で今後の注意・検討を喚起することになる。

（水井昌文・橋口達也）

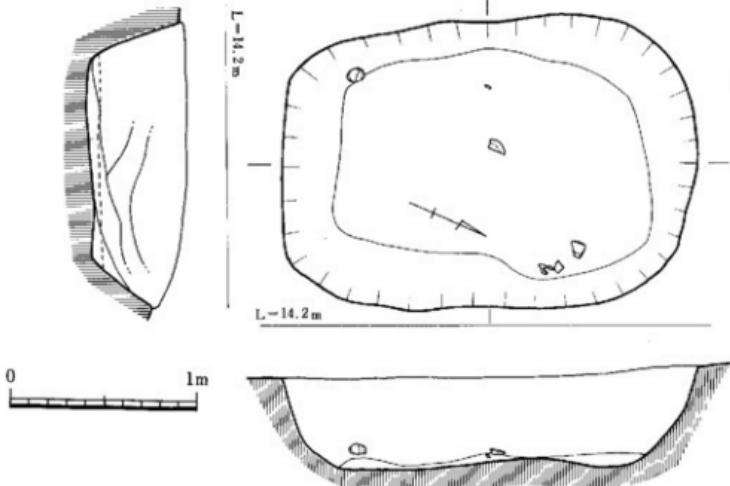
- (1) 着裝時、前腕掌側面に接するのでこの呼称を用いた。同趣旨で前腕背側面が接する湾曲の深い凹縁は背側辺と呼ぶ。今後の事を考えると、将来さらに辺縁を小分けする必要があると思っている。
- (2) 九州・台湾間に連なる島々を指す。
- (3) この殻長は殻頂から殻軸の前溝端に到る直線距離。從来最高として計測されている種は、殻口の後方への折り返しの部分が欠けていたり、或いは人工的に丸く削り落されたりしているので、今後の比較を考えての事である。殻長16cmのものは從来の殻高で言うと18cm程度になる。

3. 中世遺構（第62～67図）

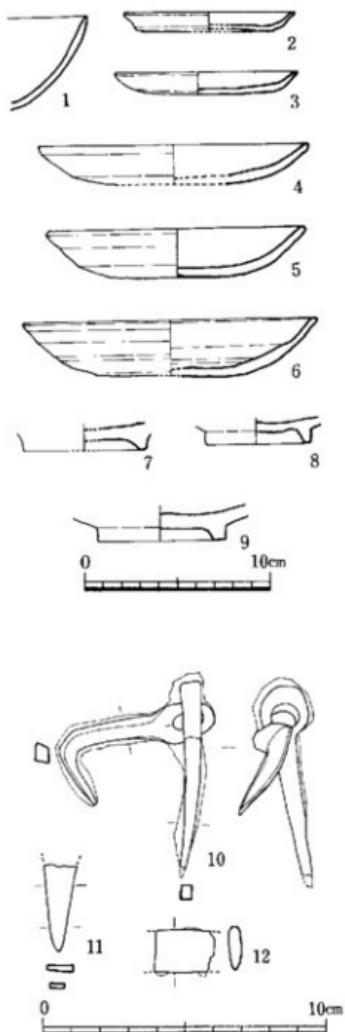
諸岡丘陵では市教育委員会に依って昭和47年春、今回調査区の北東部にあたる諸岡9番22地内の調査が行なわれ、黒色土器、滑石製品を含む竪穴遺構など中世期と考えられる遺構が検出されており、更に周辺には土器類などの散布がかなり広範囲にわたって認められ、相互に連絡を持つものと考えられる。調査によって検出された遺構は竪穴遺構としたもの（隅丸長方形ピット、青磁器副葬ピット、それに時期不明ながら関連をもつと考えられるピット）及び柱穴群、溝状遺構である。以下個別に説明を加えることとする。

(1) 竪穴遺構（第62図）

隅丸長方形ピット 調査区北東部において長軸をN 23° Wに向けて見出された隅丸長方形の大形ピットである。長径は21.0cm・短径15.4cmを測り、南部でやや径を小さくする。埴底には土師質直形上器、鉄器の一括遺物、又東・西の壁に貼りついた土師質皿形上器が出土した。埴内は主として腐植土と考えられる黒色土によって満たされ、下部には黒色土に黄色ローム土ブロックを多く混じる様になるが、他に木炭などの異物の混入はみられなかった。また埴を被覆する盛土は認めることが出来なかった。出土遺物より中世期墳墓と考えられる。



第62図 隅丸長方形ピット実測図



第63図 開九長方形ピット内遺物

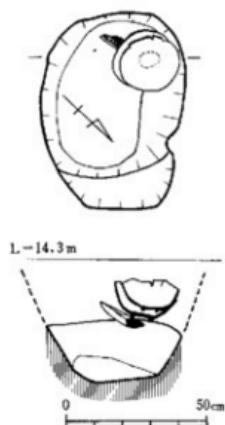
(出土遺物) 土器 (第63図1~9) 1は器色が淡い黄褐色を呈する軟弱な焼きの土器で楕形となるか。器高4.9cm。2は黄褐色を呈する堅緻な焼成の所謂「燈明皿」で口径9cm、器高1cm。3は淡い黄褐色を呈し、軟弱な焼きの浅い「燈明皿」形土器で、口径8cm、器高1.2cm。底部はヘラ切り。4は淡い黄褐色を呈する堅緻な「燈明皿」形土器で塙底中央に見出された。推定口径14cm、器高2.2cm。5は塙底北隅に同図10の鉄製品と一括出土した。淡い黄褐色を呈し、焼成の余り良好でない土器である。口径14cm、器高2.7cm。6はやや深い黄褐色の「燈明皿」形土器で口径16cm、器高3.1cm。7は器色灰色を呈し、底径6.4cmをはかる高台付きの瓦器質土器である。8は暗い褐色を呈する土器質の高台付土器で、底径5.8cmをはかる。9は器壁外面に淡い緑色の釉がかった青磁器である。高台下部には釉はかかっていない。底径6.8cm。

鉄器 (第63図10~12) 10は頭部にリングを持つ一对の釘状鉄製品である。断面は方形となり塙底北隅に出土した。11は刀器の茎か。12は鈍い刃部をもつ刀器であろう。

青磁器副葬ピット (第64図) 青磁器副葬

ピットは後述する東北部ピット群の一角に営まれる。ピットは長径50cmをはかることの出来る不整開丸長方形を呈し、これに高台付きの鉢形青磁器2個及び小形刀、磁石が一括して埋置されている。埋置されたこれらの一括遺物は塙底より15cm程浮上している。本来の掘り込みは、現在ピット内部に充満している黒色腐植土層中からと考えられるが、調査においては同色同質のため確認することが出来なかった。2個の重ねて埋置された青磁器内の覆土中からは何の遺物をも見出す事が出来なかった。磁器下に埋置された鉄器及び磁石は固着していたが、実測図に示すより茎の木質部残存は良好であった。青

磁器はその他に口縁折返しの肥厚する玉縁をもつ例がみられるが、遺構より出土することはなかった。



第64図 青磁器出土状況

外面口唇下に1~1.5cm程垂れている。そして底部に近く再び濃度を増して高台部分に垂れる。

内面は草色釉の垂れが僅かに認められるが、それはほど顯著でなく、器色は全体的に草色を帯びた褐色を呈する。また内外器面には釉のかからない部位が存する。3は粘板岩の礫を利用した砥石であらゆる面に砥面を持ち、平滑となっている。仕上げ砥であろうか。4は砥石と重ねて埋置された小刀と考えられる鉄器である。残存長14.8cm、刃渡り9.3cmを測る。刃部はやや蛇行して内湾気味である。茎には木質部を若干残し、鋸歎のため判然としないが目釘孔が知られる。



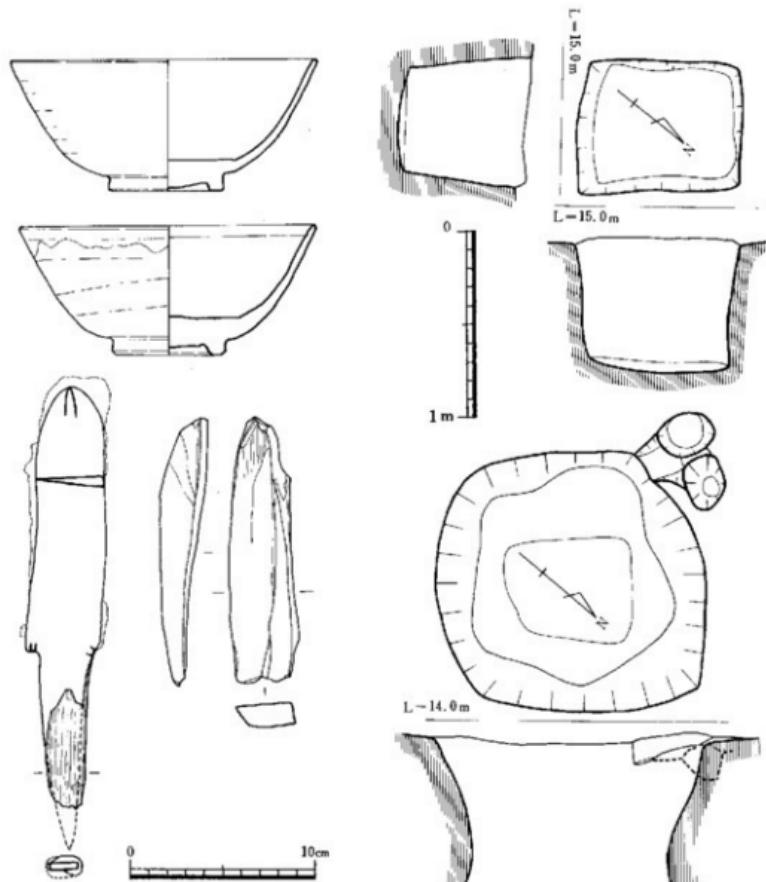
第65図 青磁器
内面拓影
(原寸大)

(出土遺物)(第66図) 青磁器は完形品2個が出土した。

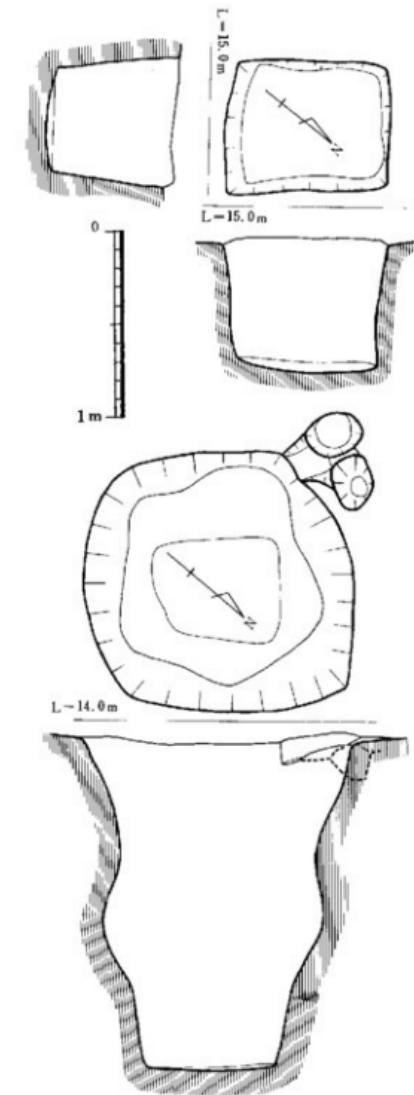
1は口径16cm、器高7cmを測ることの出来る高台付きの体形である。器色は表裏共にくすんだ草色を呈しているが、器表の上半部は釉が薄く、淡い感じを与える。

また器表の釉は高台部分を全ておおうことがなく、くすんだ草色をやや濃くする下半部からの垂れとなっている。底部下端は灰色の地肌のまま放置される。内面は底部に近く使用によるものか草色を失なっている。肥厚する底部は棱角の強い高台をつけ、ゆっくりと膨らみを加える胴下部は中位よりやや反転ぎみに直交するII縁に連絡する。口唇内面に5mm程ドットしたところに釉をかける以前の一条沈線がみられる。また底部内面には第65図拓影にみる様に 2.5×2.5 cm四方の印判が押され、中にみえる文字は「金玉満堂」と読み取ることが出来る。これらから龍泉窯産としてもやや時期の下るものであろう。2は口径が16cm、器高7cmを測ることの出来る青磁器である。器色は褐色を帯びた白色とやや青味を帯びた草色釉との混じりで形成され、後者は

時期不詳ピット(第67図) 1に調査区北西に見出された長・短径・深さが各々 $89 \times 68 \times 71$ cmを測る長方形のピットである。内部からはなんらの遺物も検出できなかった。同図2は、調査区北端において検出された円形に近い竪穴遺構である。直径14.7cm、深さ17.7cmを測る。埴は中位において膨らみをもって張り出す。時期を決定する土器類は顯著なものがなかったが、上端覆土中に土師質土器細片の出土がみられた。これらは他の調査例からすれば中世期の墳墓と考えられる。



第66図 青磁器副葬ピット内遺物



第67図 時期不詳ピット

(2) ピット群・溝 [第9図]

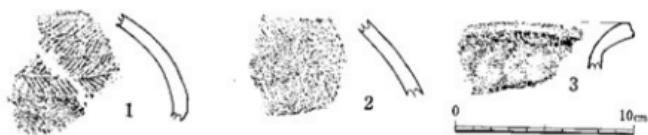
中世期と考えられるピット群は調査区南東部・中部域・北東部にわたって見出された。東南部には、直徑30~40cmをかる柱穴が6個見出された。このうち3個は建てかえを示すと考えられ、同径のピットが隣接している。これらのピット中からは小形で土師質の所謂「燎明皿」形土器の出土がみられたが、建物としてのまとまりを示さない。中部域も直徑20~30cm程度のピットが散在するが、上面の削平が著しく、造構としてのまとまりをもたない。北東部では、円形小ピット(20~25cm)および不整形の浅いピット群が散在し、焼土、土師質の所謂「燎明皿」を出土するものも若干含まれるが、建物などの造構としてのまとまりを示すものはなかった。

溝と考えられる造構は、現在で長さ4.7m、巾70~30cmをかる浅い痕跡的な造構であるが、他のピット群との関連などは明らかでなく、遺物の出土はなかった。(横山邦継)

4. 表面採集の遺物

弥生時代前期の土器 (第68図1~3)

1は第14号甕棺、2は第16号甕棺、3は第13号甕棺の墓坑内より出土した。1・2は右軸羽状文を施した壺の胴部破片である。いずれも胎土に石英粒を含み、赤褐色を呈する。1の焼成はややあまいが2は良好。3は甕の口縁部で、如意形の口縁をなし、口縁下端に刻目を施す。内外面とも刷毛目調整で、外面の口縁部下には指で押さえた痕が残る。石英粒を胎土に含み、

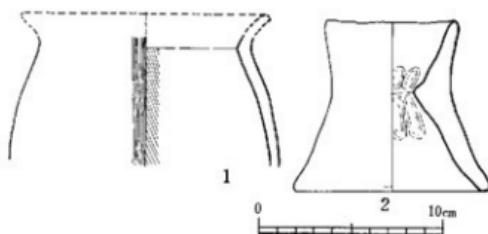


第68図 表面採集土器(1)

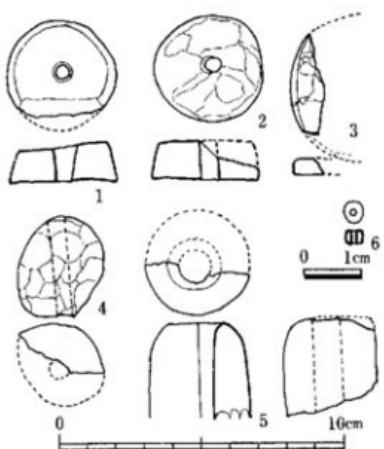
褐色を呈する。焼成良好。これらはいずれも板付II式の範疇に入るものであろう。

弥生時代後期の土器 (第69図1・2)

1は、いわゆる「く」の字形口縁と推定される甕の破片である。外面には細い刷毛、内面には粗い刷毛目調整を施す。胎土に石英粒を含み、焼成良好、外縁暗



第69図 表面採集土器(2)



第70図 表面採集石・土製品

より出土した。やや偏平な球状を呈する。赤褐色を呈し、小さな角棒状のもので穿孔されている。5は円筒状の土錘で、胎土に石英粒砂を含み、焼成良好、淡暗褐色を呈する。これらの土錘は4は確実に弥生時代中期後葉より古いものであるが、5はあるいは後世のものかも知れない。また4は土錘でない可能性もある。

玉（第70図6）

1個のみの出土である。ガラス製の小玉で色調はスカイブルーを呈する。直径3.5mm、長さ2.5mm、孔径1mm。なお、表土中の出土であるために、時期は判然としない。

(沢 豊臣)

褐色、内面赤褐色を呈する。2は器台である。内面には指で押されて調整した痕が残る。胎土には石英粒砂を含み、焼成良好、赤褐色を呈する。これらの上器は弥生時代後期前葉のものと考えられる。

紡錘車（第70図1～3）

3個の出土があり、そのうち2個は土製、1個は石製である。1は土製で、胎土に石英粒を含み、焼成は良くない。黄褐色を呈する。2・3は第25号覆棺墓域内からの出土である。2は土製で、胎土は砂を含み、あまり良くないが、焼成良好、暗褐色を呈する。3は結晶片岩を利用した紡錘車の破片である。

土錘（第70図4・5）

2個出土したが、ともに形態の異なるものである。4は第24号覆棺墓域内

表3 燐 檔 墓 一 覧 表

No.	方 位	傾 斜	形 式	土 器	墓 埋	時 期	備 考
1	N-7°E	+3.5	单	甕	不整円筒	後期	
2	N-3°-E	+14.5	接口	甕+鉢	不整 圓丸長方形	中期	
3	S-3.5°-W	+9.5	接口	甕+甕	*	*	
4	S-77°-E	-16	接口	甕+鉢 (打矢)	*	*	21号を切っている
5	N-89°-E	-39	接口	甕+鉢	不整圓筒	中期末	埋土中より円筒より高环口線
6	N-82°-W	略水平	接口	甕+鉢?	長筒円	中期	
7	K-75°-E	-4	接口	甕+甕	*	*	
8	S 5° E	+17	接口	甕+鉢	圓丸長方形	*	
9	N-21.5°-W	+27	接口	甕+鉢	*	*	10号より古い埋土中よりコア(黒曜石)出土
10	N-19°-W	+20	接口	甕+甕	*	*	下部よりコア(黒曜石)出土
11	N-26.5°-W	略水平	接口	甕+甕	*	中期末	
12	N 17° E	+21.5	接口	甕+鉢	*	中期	
13	N-25°-W	?	接口	甕+甕	?	?	28号を切っている
14	N-9.5°-W	+58	接口?	(甕+鉢)?	?	?	27号を切っている
15	S 24° W	+14	单	甕	不整圓筒	中期	
16	N-88°-W	?	接口	甕+甕	*	*	
17	N-84.5°-W	+21°	接口	甕+鉢	圓丸長方形	*	
18	S-75°-W	?	?	甕	*	中期	
19	S-85°-W	+18	接口	甕+鉢	*	*	
20	N-86°-E	+14	接口	甕+鉢	*	*	
21	S 78° E	+3	单	甕	不整圓筒	*	木蓋使用か 4号より切られている
22	N-16.5°-E	+24	接口	甕+甕 (打矢)	圓丸長方形	*	4号を切っている
23	?	?	?	?	?	?	実測不能
24	S-52°-E	+6	接口	甕+甕 (打矢)	圓丸長方形	中期	墓底より絶縁車2個出土
25	S-80°-W	+9.5°	单	甕	*	*	木蓋使用か、墓底より土錐、フレイク(黒曜石)
26	N-13.5°-W	+9.5	接口	甕+鉢	*	*	
27	N S	+14	单	甕	*	28号を切っている。木蓋使用か	
28	N-19°-W	+4	接口	甕+甕	*	*	
29	N-71°-E	+21°	接口	甕+鉢	*	*	
30	N-13.5°-W	+4.5°	接口	甕+甕	*	*	グレーヴィー(?) (黒曜石)
31	S-65°-E	略水平	接口	甕+甕	椭円形?	*	33号を切っている
32	S-83°-W	+26.5°	接口	甕+甕	?	*	33号墓底中に埋置
33	S-58°-W	+25	接口	甕+鉢+石杯	圓丸長方形	*	破損修理に丹波高杯を使用
34	N 35° E	15°	单	甕	?	*	33号の墓底中に埋置
35	S-89°-E	+25	单	甕	?	*	異様体質に埋もれ木蓋使用か ブレイク(黒曜石)
36	N-19°-E	+33	接口	甕+甕 (打矢)	不整圓筒形?	*	45号の墓底中に埋置
37	N-87°-E	?	接口	甕+甕	椭円形	*	3号を切っている
38	N-74°-E	+26	单	甕	圓丸長方形	*	D-2より新しい。木蓋使用か
39	?	?	?	?	?	?	甕棺墓底か
40	N-83°-E	126	接口	甕+甕	圓丸長方形	中期末	墓底付近よりコア(黒曜石)出土
41	S-85°-E	+22	接口	甕+甕 (打矢)	*	?	
42	N-83°-E	+20	?	甕	?	?	人骨あり
43	N-87°-E	+6	接口	甕+鉢	長筒円形?	*	貝殻伴器人骨あり。丹波塗り
44	S-26.5°-E	?	接口	甕+甕	圓丸長方形	*	
45	N-86.5°-E	+19	接口	甕+鉢	不整圓筒形	*	埋土中トツビーズ(旗瓣石)
46	?	?	单	甕	?	?	焼蓋上城か(?)
47	?	?	?	?	?	?	44号を切っている。実測不能
48	?	?	?	?	?	?	甕棺墓底か
49	S-88°-W	+11.5°	单	甕	圓丸長方形	中期	木蓋使用か
50	?	?	?	?	?	?	実測不能
51	N-67°-W	+30°	接口	甕+甕 (打矢)	圓丸長方形	*	
52	S 33° W	+12.5	接口	甕+甕	不整圓形	*	53号を切っている
53	N-S	+21.5	接口	甕+鉢	圓丸長方形	*	
54	S-34°-E	+6	接口	甕+鉢	圓丸長方形?	*	30号に異個体使用

表4 土 塚 墓 一 覧 表

No.	方 位	形 式	時 期	備 考
1	S-80°-W	圓丸長方形	中期	K19号を切っている
2	N 20° E	圓丸長方形	*	K38号に切られている
3	S-73°-W	圓丸長方形	*	K38号を切っている。木蓋か小口(甕+鉢)を使用

ま と め

諸岡丘陵においては前記の様に先土器時代遺物、弥生時代墓地および中世遺構の調査を行ない、以前に知られていた綱形銅剣、貝輪などの出土状況・埋葬施設のあまり明らかでない資料、また先土器時代に属すると考えられた表採資料のナイフ型石器の出土位置等具体的に知るところが多かった。

以下、成果を列記することにする。

1. 先土器時代の調査は、台地の基盤をなす侵蝕・風化の著しい花崗岩（早良花崗岩）にのる洪積層（鳥栖ローム、B・P - 30000年）を発掘し、東側斜面のほぼ標高14m線に沿って、約20cmの「石器包含層」がみとめられた。石器はその素材を殆ど黒曜石で占め、ナイフ型石器・台形石器・台形様石器・彫刻刀型石器・削器・石核・剥片・削片の組成を持つことが知られた。

2. 諸岡遺跡における弥生時代墓地は、既に丘陵の西側・頂部・南側に亘ってその存在が知られているが、今回調査された甕棺墓地は、さらに南にひろがり、この間に墓域を画する様な施設を併ら持たず、これ自身では墓地の完結するまとまりとは考えられない。墓地内で見出された甕棺墓、土塚墓は前記の様に中期中葉から後期初頭に至る時期に営まれたと考えられ、これらの間にはいくつかの前後関係がある。甕棺墓を「K」、土塚墓を「D」と略し、岡式化して再記すれば、

K-26→K-2、K-3→K-37、K-21→K-4→K-22

K-9→K-10、K-28→K-27→K-14

→ K-13

K-19→D-1、K-24→K-24、K-33→K-31、

→ K-32、

K-35→K-34、K-38→D-3

K-45→K-36、K-53→K-51、

→ K-40 → K-49、

(矢印は新しい順序を示す)

の関係がみられる。このことから少なくとも本遺跡では甕棺墓より新しい時期の土塚墓が知られる。特にD-3は小口に甕形土器を使用する点で注目される。またK-3、K-24、K-27・28、K-33・35・45・53と切断関係にあるのは各も小児用甕棺であって、それより新しい時期の所産である。またこれらは成人棺との位置関係からはあたかもこれに付帯するかの様であり、両者間の親密な関係を彷彿せしめる。また小児棺にはK-13・14・16にみられる如く地山面に掘り込みを殆ど持たず、黒色土とロームの混在土中に墓壁を持つ例があり、このことよりH

地形を推定すれば、(おそらく後の1mをあまり越えない削平を考慮して) 窫棺墓域は一体に平坦面を保ち、第29~38、35号窫棺を結ぶ線を変換点として、ゆるやかに傾斜していたものと考えられる。

次に祭祀遺構に就いて触れたい。墓地内の祭祀行為と考えられたものは全て丹塗りの甕、壺などを使用する「土器祭祀」であると思われたが、これには第14号と近接する墓域北端および第33号の西に連なる破碎土器群と墓域内に丹塗り高环、壺の破碎片をもつ成入棺第45号、小児棺第5号（また第33号の高环例もこれにあたるかも知れない）の二者が知られる。後者は器形復原可能な破片を含み、窫棺墓に対するそれぞれ個別の祭祀行為を考えしめ、前者はこの様な在り方と対比して、祭祀行為がむしろより多くの不特定な対象に向かられているものではないかと考えられる。

以上の様に諸岡遺跡において調査された窫棺墓地はその墓域の一端にしか触れることが出来なかつたが、立地上からは前に調査された金隈遺跡と類似しており、墓域内において占地のうえでの拡散、収拾の図式的な経過を辿るものであるのか興味が持たれるところであるが、遺跡の復原的作業を含めて後の調査に期待したい。（横山邦雄）

（参考文献）

- 高倉洋蔵編『宝台遺跡』福岡市上長尾所在弥生時代集落遺跡 1970年 日本住宅公團
折茂洋『金隈遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書7・17号）1970・71年 福岡市教育委員会

第Ⅲ章 緊急調査各地点の調査（第2図・第71図）

板付遺跡周辺の緊急調査は、諸岡窯棺遺跡の他に4カ所を行った。いずれも板付遺跡ののる台地とその南の警察学校台地周辺の沖積地で、これまで水田であった。東・西にそれぞれ御笠川と諸岡川が流れ、各地点とも氾濫原をなす。遺構の存在は認められず、遺物も少ない。

1. H-8地点〔板付4丁目2-1〕(第71図1~3) 板付水田遺跡の南に接する。東西に 4×4 mグリッド3カ所を13m間隔で設け、東から第1~第3グリッドとした。遺構はなかった。遺物は第1グリッドの耕作土・床土から土器片拓片が、第2グリッドの上から4層めまでと第3グリッドの上から3層めまで（標高約8.3mより上）から青磁小片1・陶磁器小片4・弥生式土器と土師器の小片約30・鉄片1・黒曜石片1が出土した。弥生式土器片中に中期とみられる口縁部小片1がある。各グリッドにみられる12層（腐植を含む黒色粘質土）は板付水田遺跡西側に認められる層の続きで、弥生時代には地表だったと考えられる。

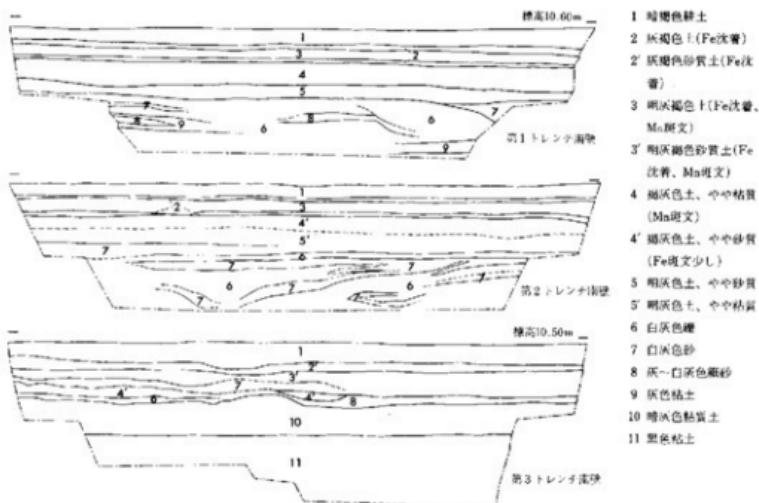
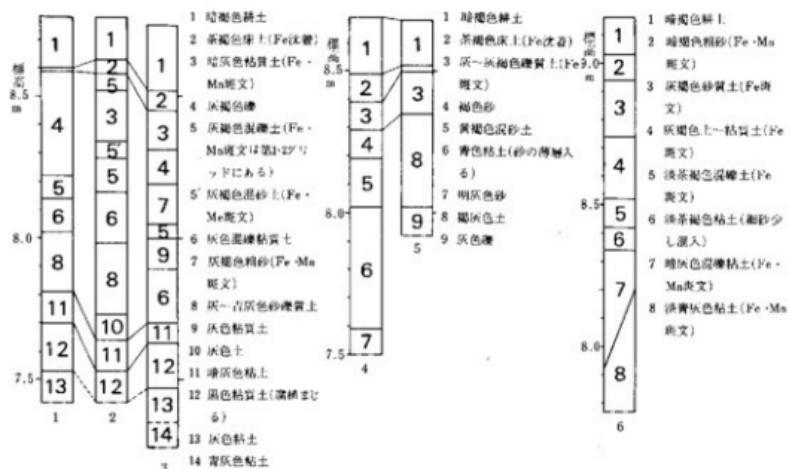
2. D-9・10地点〔板付5丁目9-6〕(第71図4・5) 板付台地と警察学校台地中間の沖積地である。東西に 4×4 mグリッド4カ所を3m間隔で設け、東から第1~第4グリッドと名付けた。湧水が激しくあまり掘り下げられなかった。各グリッドとも氾濫による砂・礫・粘土の堆積がみられる。ボーリング棒によれば、砂礫層はさらに1m以上下まで続く。遺物は土器小片数点だけである。

3. D-7地点〔板付5丁目15-5〕(第71図6) 板付台地東方約80mの地点である。 4×4 mグリッド2カ所を22m間隔で設け東を第1・西を第2グリッドとした。第1グリッドは最近の擾乱を受け層序が乱れている。第2グリッドの床土下は氾濫堆積層で、8層は東から西に傾き7層に示される水流で削られたとみられる。遺物はなかった。

4. A・B-13地点〔板付6丁目11-2・7・18・19〕(第71図8~9) 警察学校台地東側にある。調査直前に盛土されたので予定を変更して盛土のない部分に 6×4 mトレチを台地側に2（第1・第2トレチ）、北東部に1（第3トレチ）設けた。第1・2トレチは台地下の沖積地ほぼ同じ層位を示す。各層から瓦片5・須恵器片30余・陶磁器片6の他に弥生式土器・土師器小片100余片が混在して出土した。いずれも磨滅が甚しい。第1・第2トレチの北東約60mの第3トレチでは耕土層下に氾濫層があるが、その下標高約9.5m以下は腐植を含むかたくなった黒色土（11層）で少くとも標高7mまでは続く。本トレチの遺物は11層上部出土の土器片4（同一個体）だけである。これは厚さ3~4%・灰色砂質胎上で器表に黒い煤が付着し、細い刷毛目がある。流水による磨滅がまったくなく本層が地表であった時期をこの土器片が示すと考えられる。

以上各地点の調査結果は板付遺跡の環境復元資料となり、いずれ詳細に言及するであろう。

（後藤 直）



第72図 土層断面図

第71図 緊急調査各地点上層図 1～3 II～8地点 (1：第1グリッド、2：第2グリッド、3：第3グリッド) 4・5 D～9・10地点 (4：第1グリッド、5：第4グリッド) 6 D～7地点第2グリッド 7～9 A・B～13地点各トレンチ南壁断面図

調査関係者

九州大学医学部第二解剖学教室

永井昌文、横口達也

調査協力者

白木総潔(ヘルス商事)、池平勝一、稻富美弥子、中牟田松茂、松岡次郎(三共物産K・K)、神代倉次(福岡酒販K・K)、高倉洋彰、金鍾徵(九州大学考古学研究室)、龜井 勇(春日市中央公民館)、中原志外顕、浜石哲也、横尾義明、小山雅文、鈴木由紀夫、宮下健司、川道 寛(以上明治大学学生)、玉永光洋、野尻雄二(以上東洋大学学生)、稻富裕和(法政大学学生)、実川順一(東京都遺跡調査会)、東福岡高校史学クラブ、松本敦子、城戸久美子

福岡市教育委員会

正木利輔、結城一義、青木 崇、清水義彦、三島 格、檜崎幸利、草場九男、安田正義、下條信行、島津義昭、山崎純男、後藤 直、沢 皇臣、山口謙治、横山邦聰、江浜明徳、木村良子、山田美幸、山本貴恵子、攝磨周子、日吉香代子、柳沢千サヨ

図
版



尾鷲丸着（月曜丘陵より）のぞき



1 諸岡遺跡発掘地全景（航空写真、東から）



2 諸岡遺跡発掘地全景（航空写真、南から）



1 諸岡遺跡遠景（南から）



2 諸岡遺跡遺構出土状況全景（北から）



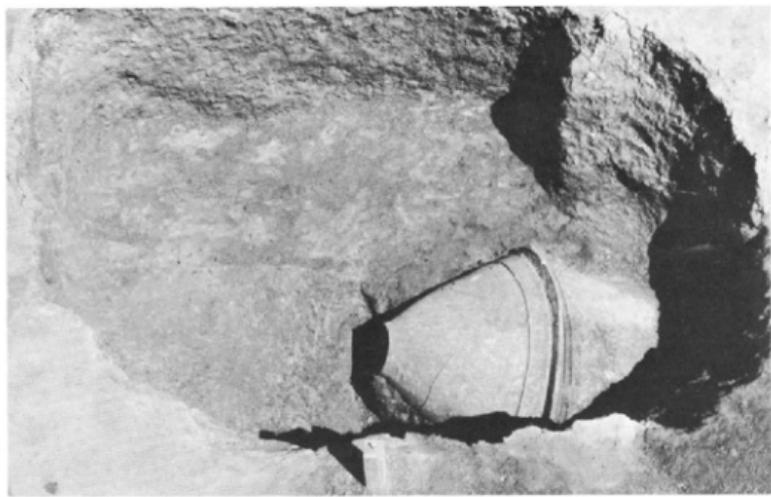
1 12号・29号甕棺出土状況（東から）



2 8号・9号・10号甕棺出土状況（東から）



1 18号・25号斎棺出土状況（西から）



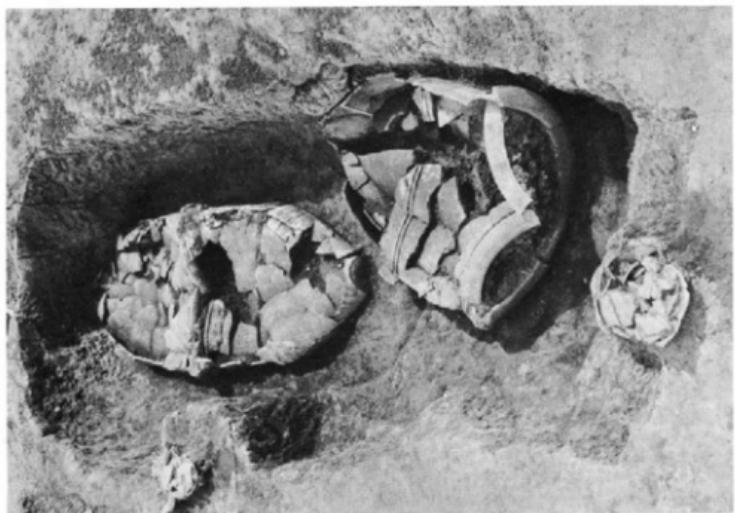
2 19号斎棺、1号土坡墓出土状況（南から）



1 35号壺棺出土状況（東から）



2 38号壺棺、2号土塚墓出土状況（東から）



1 13号・14号・27号・28号甕棺出土状況（北から）



2 30号甕棺出土状況（南から）



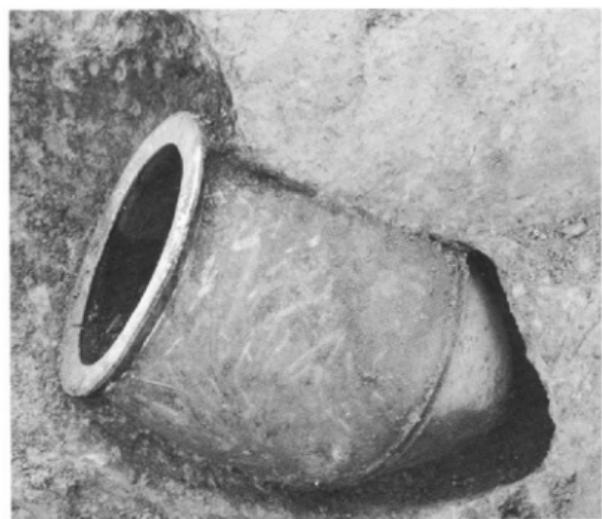
1 4号・21号・22号甕棺出土状況（北から）



2 33号甕棺出土状況（西から）



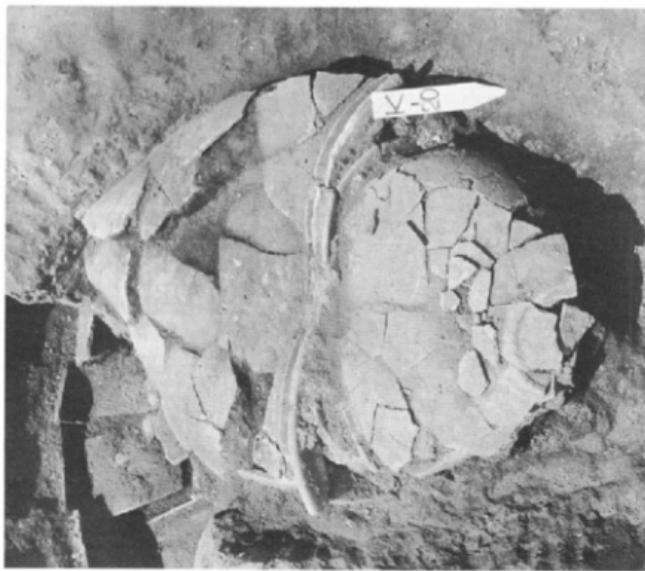
1 52号・53号壺棺
出土状況
(南から)



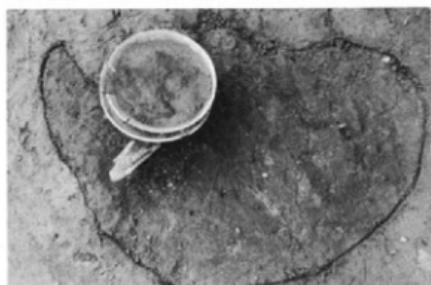
2 35号壺棺挿入
状況 (東から)



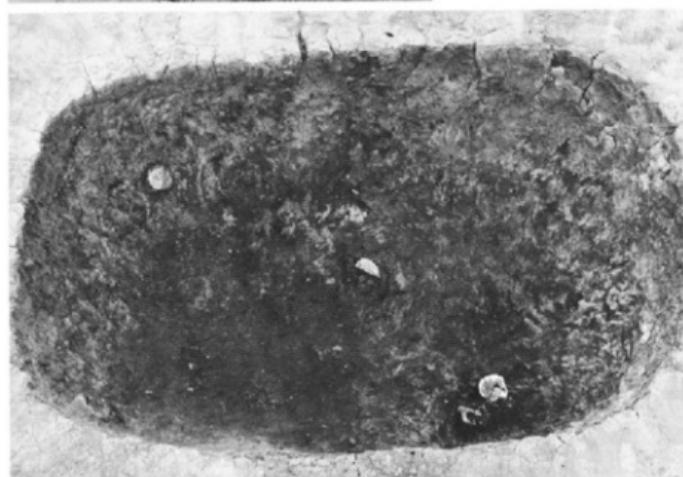
1 15号窯笛出土状況（南から）



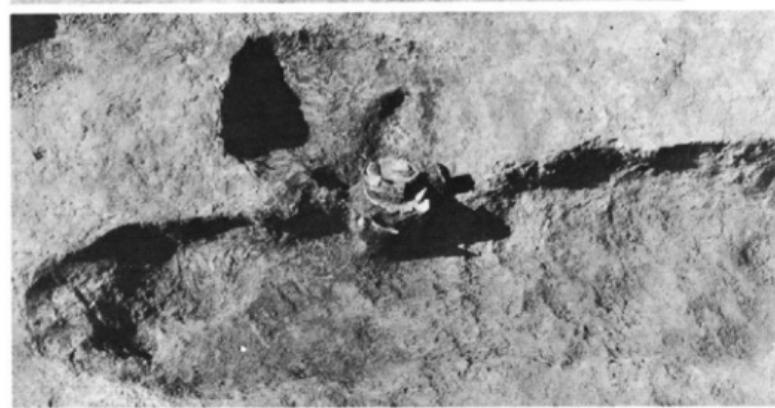
2 20号窯笛出土状況（東から）



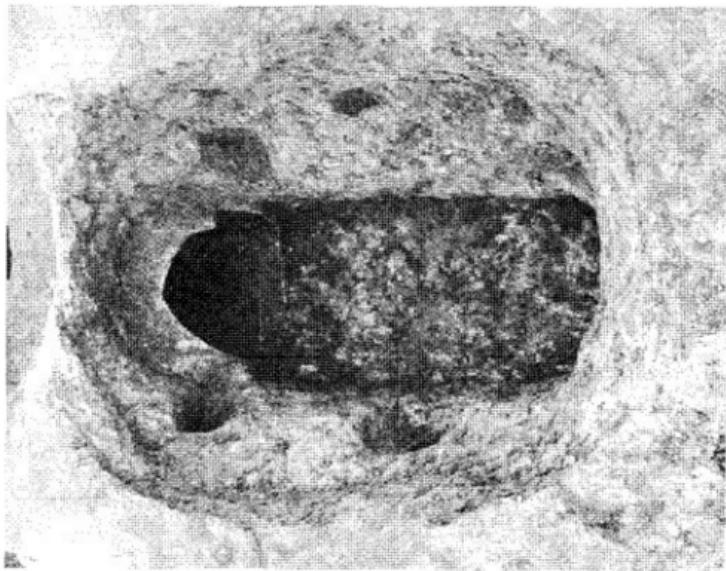
1 青磁器出土状況



2 長方形ピット出土状況



3 破碎土器出土状況



1 3号土埴輪（東から）



2 11号土埴輪出土残片



1 43号甕棺貝輪着裝人骨出土状況（北から）



2 43号甕棺貝輪着裝状態



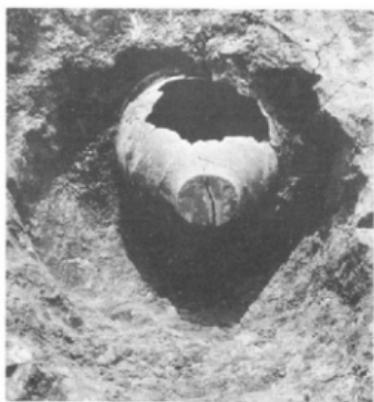
3 34号甕棺出土状況



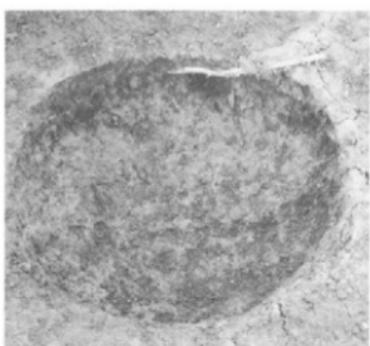
1 51号甕棺出土状況（北から）



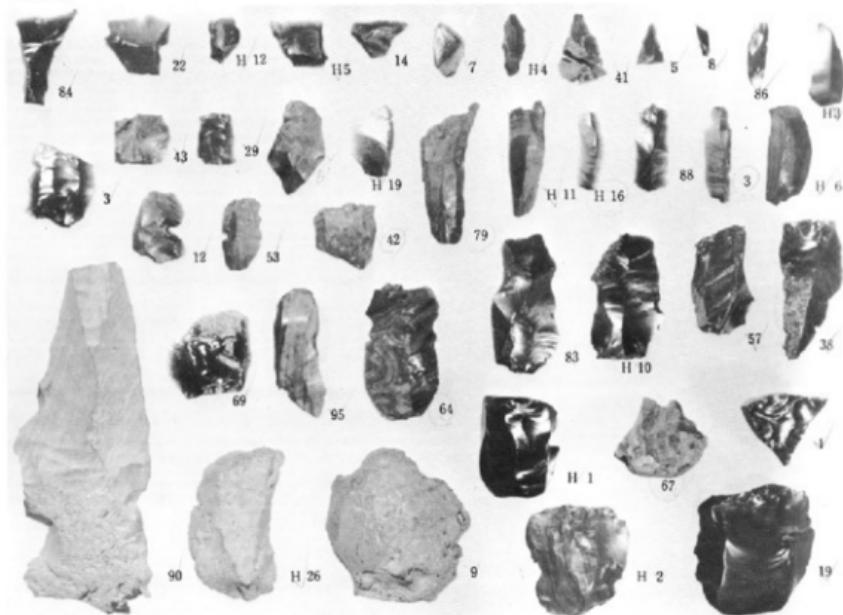
2 46号甕棺出土状況



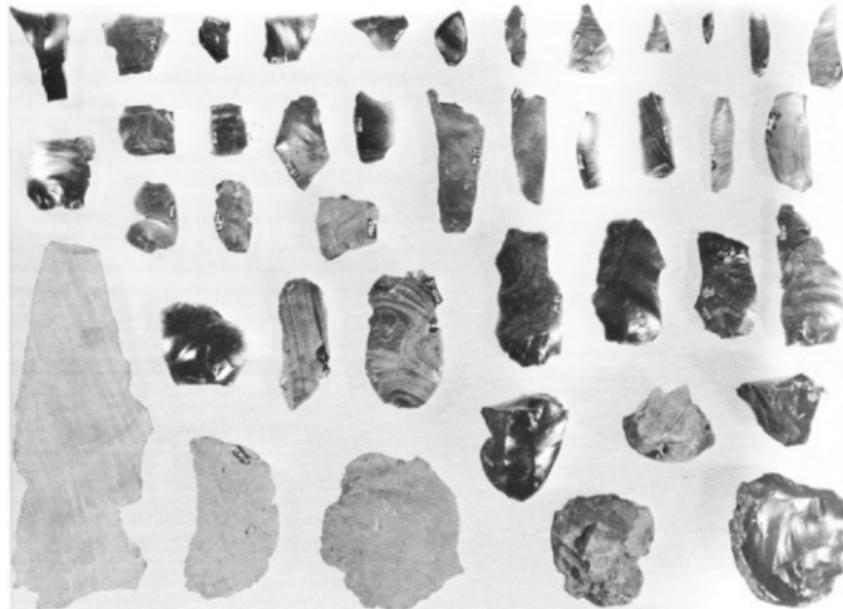
3 5号甕棺出土状況（東から）



4 焼窯ピット（東から）



1 先土器時代石器（表）



2 先土器時代石器（裏）



1 青 磁 器



2 石器・鐵器・土製品



1 貝輪と手根骨の出土状態



2 貝輪除去後の状態

1 手根骨の比較

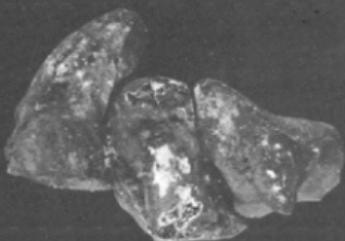
上段…

現代日本人
(28才)



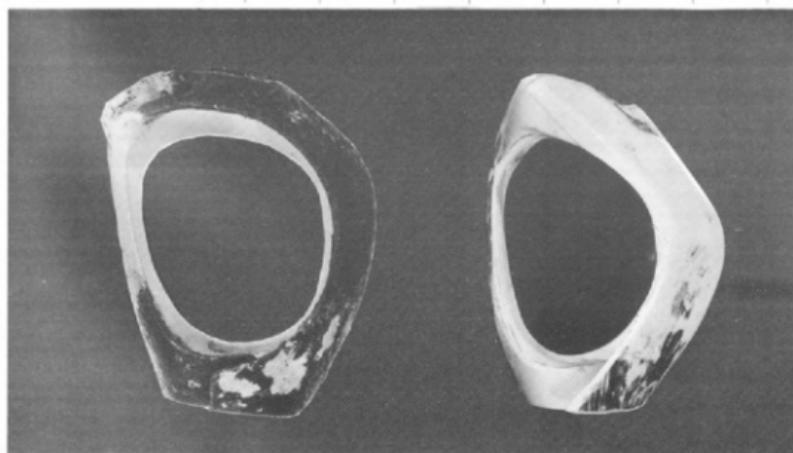
下段…

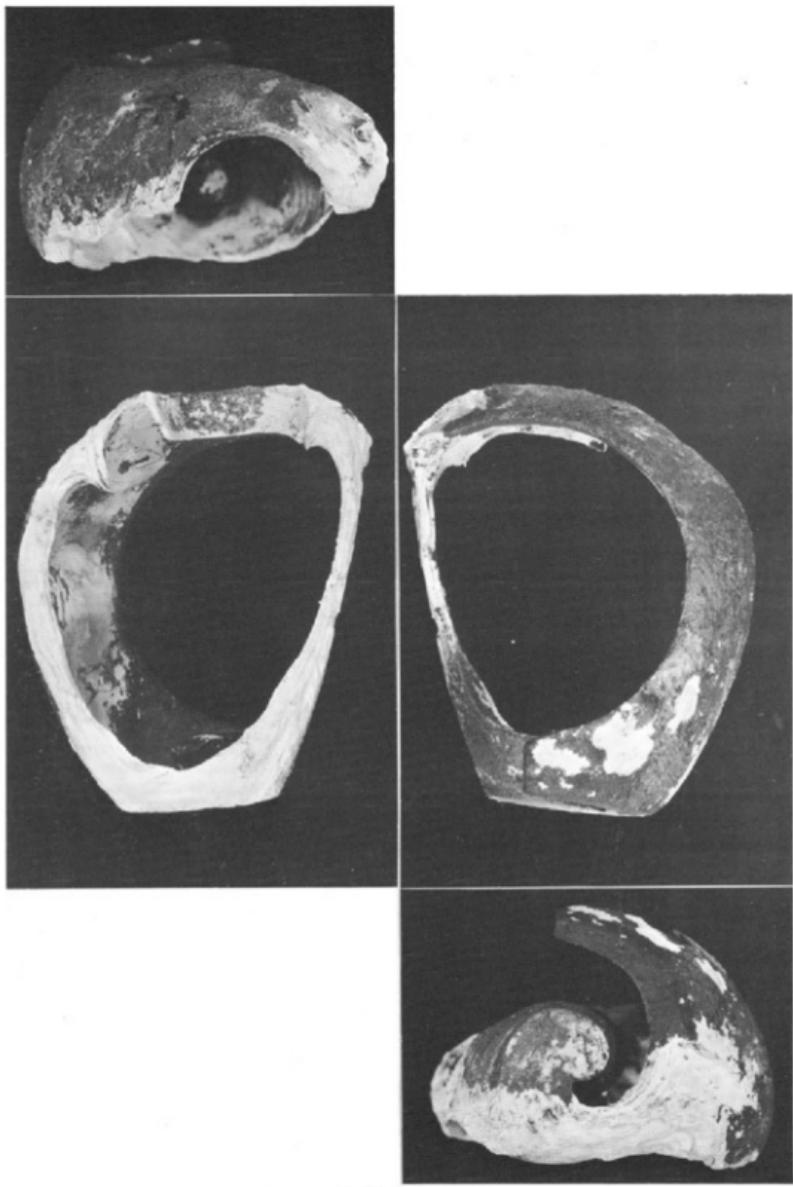
諸岡43号
要棺人骨



2 貝輪の比較

左…諸岡
右…土井ヶ浜
(模造品)





43号墓棺人骨着装貝輪

板付4・7丁目市営住宅建設地調査報告

1974

福岡市教育委員会

目 次

1. 調査の経過.....	1
2. 周辺の遺跡.....	2
3. 調査の結果.....	3

挿図目次

第1図 調査地の位置と周辺の遺跡.....	1
第2図 調査地現況図.....	2・3
第3図 土層断面図.....	4
第4図 ポーリング柱状図.....	5

表 目 次

表1 I線ポーリング土層表.....	6
表2 II線ポーリング土層表.....	7

図 版.....

1. 調査地全景	
2. I-1 トレンチ南壁土層	
3. I-2 トレンチ南壁土層	

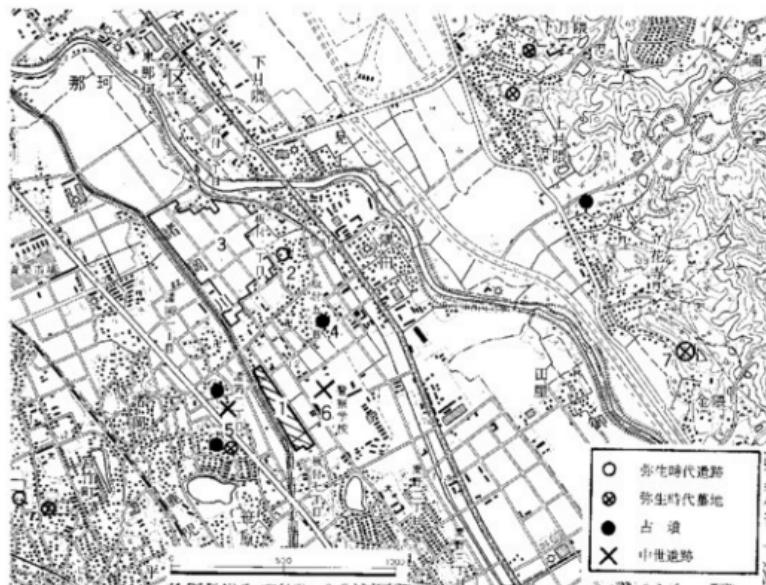
本報告書は福岡市住宅供給公社が計画した板付第二市営住宅建設地の事前調査（1973年度実施）報告書である。調査は福岡市教育委員会文化課板付遺跡調査事務所が行い、後藤直と山口謙治が担当した。本報告書作成には後藤があたった。

1. 調査の経過

福岡市住宅供給公社は博多区板付地区に市営住宅の建設を計画し、まず板付二・三丁目に板付第一市営住宅建設地（約150,000m²）を買収し、ついで板付四・七丁目に板付第二市営住宅建設地（約30,000m²）を買収した。前者は板付水田遺跡とよび、市教育委員会文化課が1971年夏以来調査をつづけている。第二市営住宅建設計画に対し文化課は板付水田遺跡調査の所見と計画地周辺の遺跡分布状態（第1図）・立地等から遺跡の存在する可能性もあると判断し、1973年7月から事前調査を行った。

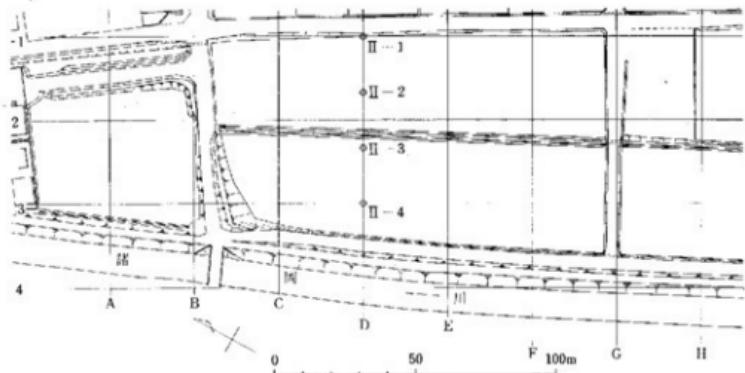
まず対象地を30m方眼に区切り、東から西へI～4、北から南にA～Nの番号を付し、各方眼をその東南隅で交叉するラインの番号で呼ぶことにした（第2図）。

ついで調査地のほぼ中央にI-1・I-2トレンチ（各々4×10m・4×7m）を設定し、土層の検討と遺物・遺構の確認を行った。その結果、遺構・遺物を含む可能性のある土層を見出し、あわせて調査地全域の土層推積状態を明らかにするためにボーリング調査を実施することとし、東洋開発産業株式会社に委託した。



第1図 調査地の位置と周辺の遺跡

1. 板付4・7丁目調査地 2. 板付遺跡 3. 板付水田遺跡 4. 板付八幡古墳
5. 諸間遺跡 6. 警察学校遺跡 7. 金瀬遺跡



第2図 調査地現況図

以上の調査が終了したのち、その資料を板付水田遺跡調査で得た所見に基いて検討した結果、本調査地に遺跡存在の可能性はないと考え、以後の調査を打切った。

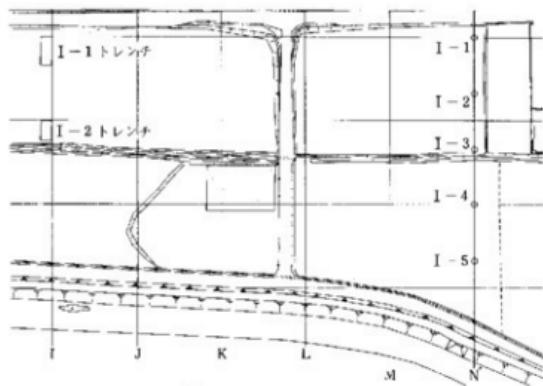
2. 周辺の遺跡（第1図）

調査地は諸岡川右岸に接する沖積地で、これまで水田であった。地表標高は南側で9.8mあまり、北へゆくにつれて少しづつ低くなり、北端で8.9mほどである。東側には約100mはなれて警察学校低台地（標高12mほど）があり、西方約200mには諸岡丘陵がある。警察学校低台地の北側には板付低台地が南北にのび、南側は麦野方面へ標高が高くなる。

諸岡丘陵には先土器時代遺跡・弥生時代甕棺墓遺跡・古墳5基・中世の遺跡がある。⁽¹⁾ 警察学校低台地は原形をいちじるしく損なっているが、以前は桑畠で現在よりも高く、土器片や人骨等が出土したという。⁽²⁾ 磚石・瓦・古鏡等が採集されている。

板付低台地は北北西-南南東にのびる長さ約500m・幅約150m・比高2~3mの台地であり、その中央に環溝集落址（板付遺跡）⁽³⁾があり、南端の八幡神社内には封土を失った横穴式古墳がある。⁽⁴⁾ 台地北端部と西側冲積地は、板付第一市営住宅建設地となり、1971年以来の事前調査で台地北端で弥生時代の貯蔵穴群・甕棺等の墓群が調査され、沖積地では弥生時代生産遺跡の存在が確かめられた。

その他に、周辺ではしばしば遺物が採集されており、今回調査対象地内にも遺跡の存在が予想された。結果的には全面が氾濫原であり、遺構の存在はないと考えるに至った。しかし、今回の調査結果は、現在すすめている板付遺跡周辺調査の結果とともに、板付遺跡の古環境を復原する上で貴重な資料となる。



3. 調査の結果 (第2・3図、表1・2、図版2・3)

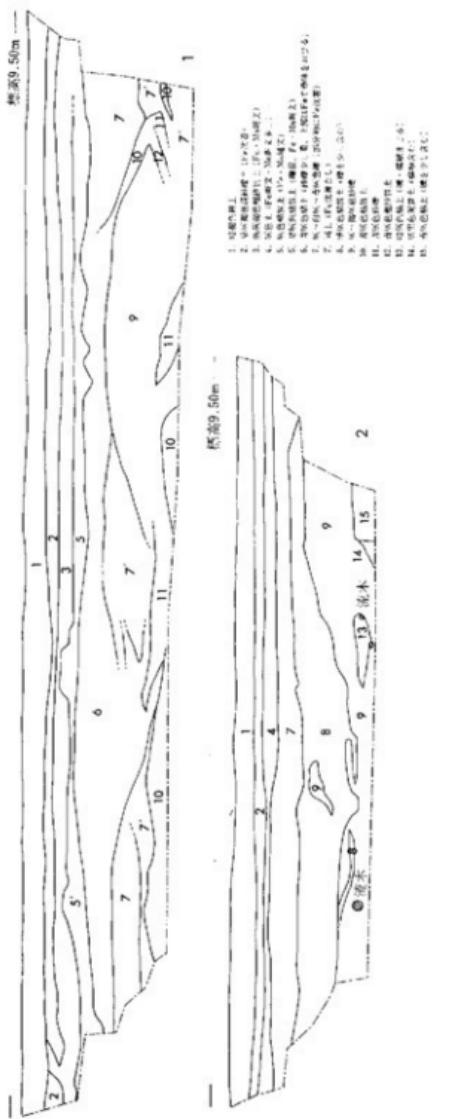
I-1・I-2両トレンチは調査地のほぼ中央で現地表の標高は9.3~9.4mである(第3図、図版2・3)。両方とも類似の層序をなし、耕作土と床土の下は砂質・粘質土・粘土の互層となり、いくたびかの氾濫の跡を示している。地下水位は高く、耕作土を10~20cm掘り下げれば湧水を見る。

I-1トレンチでは、現耕作土と旧耕作土とみられる層(I~5層)の下に青灰色粘土がひろがり(6層)、それ以下は礫層となる(7・7'・9層)。これらの下の一部に粘質土層(10層)がみられる。6層以下は常時地下水に浸されているらしく、灰~青灰色をおびる。

I-2トレンチでは表土層(1・2・4層)下を礫層(7層)がおおい、さらに粘質土層(8層)が厚く続き、ついで礫層(9層)となる。この礫層中の標高8.3~8.1mからは流木が出土した。トレンチ西側では流木の出土する高さに粘土の落込み(15層)とそれに接して腐植を含む灰黒色土(14層)がみられる。この14層は板付水田遺跡にひろく認められる黒土層に似ているが、今回の調査では他に認められなかった。数本の流木は直徑10cm未満で、外見上はさほど古いとは思われないが、9層を堆積させた氾濫によりはこぼれてきたものであり、14層・15層はかって地表をなしていたであろう。

I-1・I-2トレンチで出土した遺物は陶磁器・須恵器・土師器・弥生式土器の小片20点あまりにすぎない。しかもI-1トレンチでは1・2・3・5層から、I-2トレンチでは1・2・4層からのみ混在して出土し、それ以下の氾濫堆積層からは出土しなかった。こうした出土状態は、今年度調査した他の緊急調査地点と同様である。

以上のトレンチ発掘にひきづき調査地全体の地層序を明らかにするために南側のNライン(ボーリングI線)と北側のDライン(ボーリングII線)でボーリング調査を実施した。前者で5ヶ所、後者で4ヶ所を20m間隔で掘削した。深度は東側警察学校よりのNo.I-1とNo.II-



第3図 土層断面図

1 : I-1 トレンチ南壁
2 : I-2 トレンチ南壁 (S-%)

1で6m、他は3mである。
岩芯採取率は100%とした(第
4図、表1・2)。

その結果、No.I-1では標
高5.6m以下にNo.II-1では
標高4.1m以下に風化花崗閃
綠岩・風化花崗岩が認められ
た。これらは基盤岩が風化し
たものであろう。その上の層
が沖積層と考えられる。

I・II両線とも表上(15~
35cm)下に腐植交りの層があ
る。I線では厚さ1m未満、
II線では東側で2mちかくに
なり西側で薄く0.65mほどに
なる。I-1・I-2トレン
チの各層序はこの腐植土層に
相当しよう。

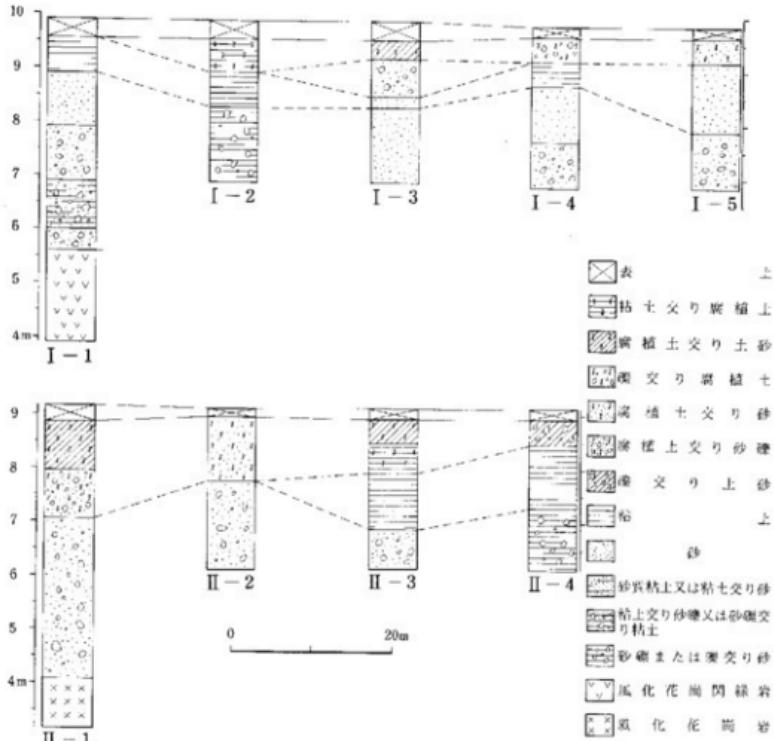
この腐植土層下には、I線
では全体に、II線では西側に
粘土層があり、いずれにおいても
西側で厚さが2m近くに
なる。この下はかなり厚い砂
礫層が基盤層上に堆積してい
る。No.II-4の砂礫層中標高
6.9~6.5mにワラクずのよ
うなものの(腐植が進んでいな
い植物片)がまばらに入って
いた。

ボーリング調査の結果は、
調査地全域が氾濫原であるこ
とを示している。西側を流れ
る諸河川は、堤防が完備する
以前はしばしば氾濫し、流路
も若干ことなっていたという。
したがってもしあ構が残存す

るとすれば、警察学校により近い方と考えられる。

以上の調査結果は、いずれ板付水田遺跡報告の際に、環境復原資料として詳細に言及するであろう。

- 註 (1) 1973年度調査。福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第29集に報告する。
 (2) 1972年市教委文化課発行 報告書未刊。
 (3) 「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表 総集編」1971年 P. 28 No. 813
 (4) 森貞次郎・岡崎敬「福岡板付遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年
 下條信行「福岡市板付遺跡調査報告」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集)1970年
 (5) 同上 P. 26 No. 800
 (6) 同上 P. 26 No. 734~736 · 741~744



第4図 ポーリング柱状図 (表1・2参照)

No. I - 1 [地表標高 9.90m・水位 9.80m]

深 度 (m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
9.55	表 土 (0.35)	軟	暗灰	植物根を交えた腐植土や砂部分を交えた粘性あり。
8.90	粘 土 (0.65)	軟	青灰	10%前後の細砂を交えた良質の粘土で粘性極大。
7.90	砂 硬 (1.00)	軟	灰黑	中～細粒の砂層で上部はわずかに粘土を交える。
6.90	粘 土 (0.90)	軟	青灰	約40%の粘土と細砂交りの砂でやや粘性あり。軟弱。
6.00	砂 硬 (0.40)	軟	灰白	石英・長石等の細礫と粗砂。
5.60	風化花崗岩 (1.70)	軟	青灰	風化進展し、一部は細粒粘土状となる。所々に未風化層を交える。下部は次第に堅密となる。
3.90				

No. I - 2 [地表標高 9.89m・水位 9.89m]

深 度 (m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
9.54	表 土 (0.35)	軟	暗灰 青灰	植物根を交えた腐植土を含むわずかに粘性あり。軟弱。
8.94	粘土 (0.60)	軟	青灰 茶灰	約30%の粘土を交えた腐植土。粘性大で軟弱。
8.29	粘 土 (0.65)	軟	青灰	10%未満の細片、苔母の細片等を交えた良質粘土で粘性大。
7.69	粘土 (1.40)	軟	青灰 灰黑	約5%以下の石英・長石質礫を交えた中～粗粒の砂。上部はわずかに粘土を交える。
6.89				

表 1. I 線ボーリング土層表

No. I - 3 [地表標高 9.89m・水位 8.64m]

深 度 (m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
9.54	表 土 (0.35)	軟	暗灰	植物根腐植土を交えた砂質土。軟弱。
9.19	葉植土交り砂 (0.35)	軟	青灰	石英質細礫・腐植土交りの土砂でわずかに粘性あり。
8.49	砂 硬 (0.70)	軟	灰黑 灰	約10%以下の石英・長石・角閃石等の細礫を交えた粗砂。
8.29	砂質粘土 (0.20)	軟	青灰	約50%の細砂と粘土でやや粘性あり。
6.89	砂 (1.40)	軟	青灰	7.70m付近までは含水比大で軟弱。上部の細砂を交えた砂。上部は細砂で次第に中～粗粒に移る。

No. I - 4 [地表標高 9.84m・水位 9.69m]

深 度 (m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
9.64	表土 (0.20)	軟	暗灰	植物根を交えた腐植土。軟弱。
9.19	礫交り腐植土 (0.45)	軟	青灰	ほとんど腐植土でやや粘性あり。各石等がまとまる。
8.74	粘 土 (0.45)	軟	青灰	10%前後の細砂を交えた良質粘土。粘性大。
7.69	粘土交り砂 (1.05)	軟	青灰	約20%の粘土と細砂でやや粘性あり。全体に青母の細片を交える。
7.44	礫交り砂 (0.85)	軟	青灰	約10%以下の石英・長石質礫をわずかに交えた中～粗粒砂。含水大である。
6.84				

No. I - 5 [地表標高 9.84m・水位 9.59m]

深 度 (m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
9.64	表土 (0.20)	軟	青灰	植物根を交えた腐植土でやや粘性あり。軟弱。
9.19	腐植土交り砂 (0.45)	軟	青灰	全体に腐植土を交えた中～粗粒砂。
7.89	砂質粘土 (1.30)	軟	青灰	上部は粘土が多く、下部は次第に砂質土に移る。青母の細片、石英・長石・角閃石等の細礫がみられる。
6.84	礫交り砂 (1.05)	軟	青灰 青灰 灰黑	石英・長石・角閃石等の細礫を交えた中～粗粒砂で、下部はしまっている。

No. II-1 [地表標高 9.16m・水位 9.16m]

深度 (標高 m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
8.86	表 土 (0.30)	軟	暗灰	植物根を交えた腐植土。耕作土。
7.96	腐植土交り 土 砂 (0.90)	軟	褐黑色	細砂交りの土砂で、全体に腐植土を交える。
7.06	腐植土交り 砂 硬 (0.90)	軟	暗灰	石英、長石等の細礫と土砂・黒色の腐植土が混含。含水比大で軟弱。
4.06	礁交り砂 (3.00)	軟	褐黑色	±5%以下の石英、長石等の礫約10%を交えた中～粗粒砂。
3.16	風化花崗岩 (0.90)	やや 軟	褐黑色	風化進展し上部は粘土交り砂礫状であるが、下部は次第に固結し、堅密な層をなしている。

No. II-2 [地表標高 9.12m・水位 9.12m]

深度 (標高 m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
8.97	表土(0.15)	軟	暗灰	植物根交り。水田耕作土。
7.77	砂 交 り 腐植土 (1.20)	軟	褐黑色	全体に細砂を交える腐植土を主とした粘性土で、軟弱である。
6.12	礁 交 り 砂 (1.65)	軟	褐黑色	石英、長石質細礫・葉母片等を交えた粗粒砂。上部は腐植土交り。

No. II-3 [地表標高 9.14m・水位 8.96m]

深度 (標高 m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
8.94	表土(0.20)	軟	暗灰	植物根・細砂を交えた腐植土でやや粘性あり。
8.49	腐植土交り砂 (0.45)	軟	暗灰	腐植土・石英質細礫等を 交えた土砂で、比較的 重っている。
7.94	粘土交り腐植土 (0.55)	軟	暗灰	約30%の粘土を交えた腐 植土で、粘性極大。
6.89	粘 土 (1.05)	軟	暗灰	10%未満の細砂および 母の細片を交えた良質の 粘土で、粘性大。
6.14	砂 硬 (0.75)	やや 軟	褐茶	石英、長石等の細礫と中 に粗粒の砂。

No. II-4 [地表標高 9.14m・水位 8.79m]

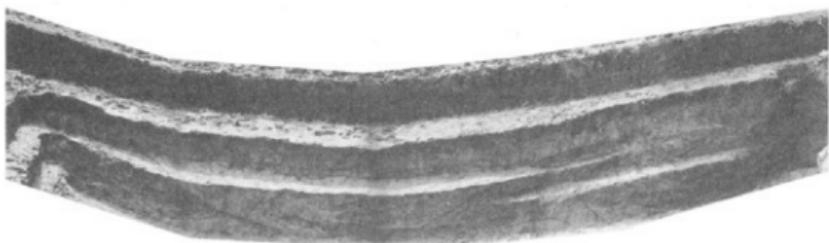
深度 (標高 m)	名 称 (層 厚 m)	硬 度	色 調	記 事
8.94	表土(0.20)	軟	暗灰	植物根・石英等を交えた 腐植土。水田耕作土で 軟弱。
8.49	砂 交 り 砂 (0.45)	軟	褐茶	石英土・長石等の細礫交り
7.29	粘 土 (1.20)	軟	褐茶	約10%の細砂を交えた良 質粘土、粘性極めて大。
7.06	粘土交り砂硬 (1.15)	硬	褐茶	10%未満の粘土を交えた 砂硬。帶は±5%以下の細 砂で、±5%以上の細 砂は、7.94～7.54m間は 細粒軟質で腐植物（土と して扱わなくす）を交えて いる。下部は次第に粗粒と なる。これは、上部では 多くみられ風化花崗岩 の堆積土と考えられる。
6.14				

表 2. II線ボーリング土層表

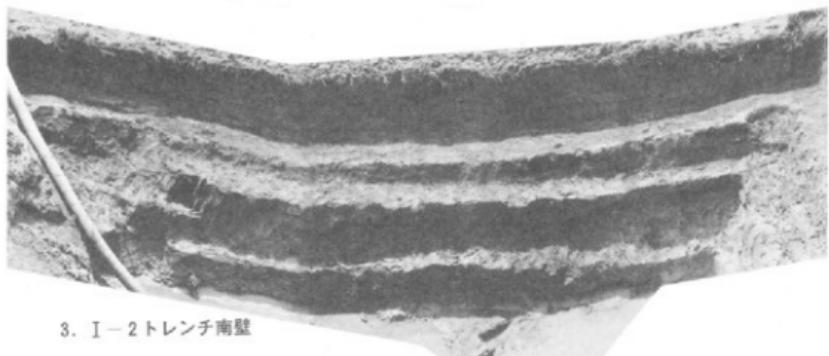
図 版



1. 調査地全景（南から）



2. I-1 トレンチ南壁

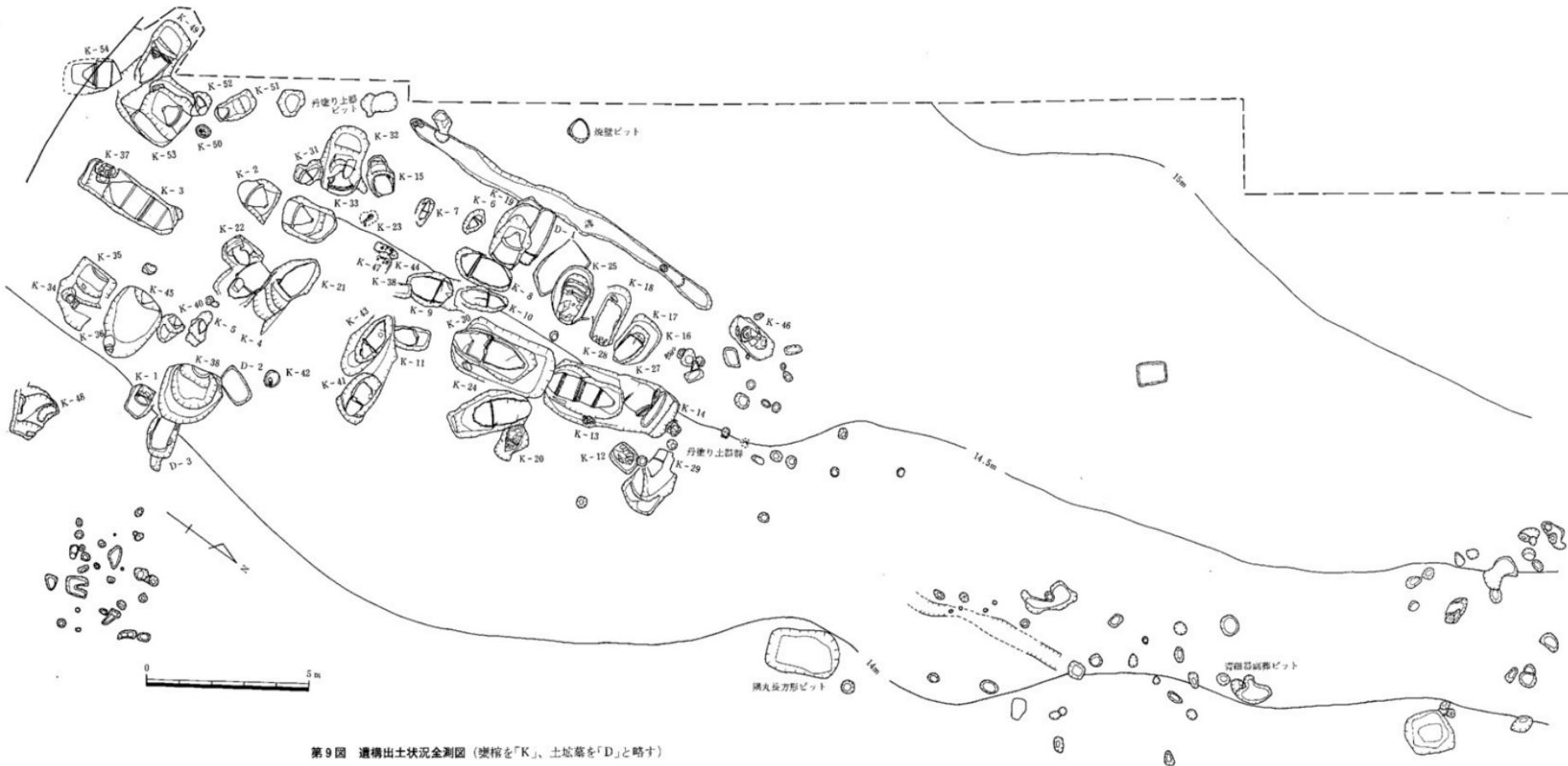


3. I-2 トレンチ南壁

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第29集
板付周辺遺跡調査報告書(1)

昭和49年3月30日

編集
福岡市教育委員会
印 刷 秀 巧 社 甲 刷



第9図 遺構出土状況全測図 (甕棺を「K」、土埴輪を「D」と略す)